

ECONO FORUM

21



特集

モラルの功罪

ECONO FORUM 21

2005年、エコノフォーラムは『エコノフォーラム21』という名前に変わりました。

エコノフォーラムは、もともとゼミを中心とする経済学部の活性化の「広場」でした。しかし、10年を経て、わたしたちは21世紀の世界経済と日本社会をもっと確実な「目」で捉え、経済学部から新鮮な発想で社会に向けて提言できれば、と考えるようになりました。『エコノフォーラム21』は新たな世紀にふさわしく、学生と教員、さらには一般市民をも巻き込んで様々な声が響き合う広場を目指します。

No.19 March 2013 CONTENTS:

- 2 巻頭言／利光強
- 3 特集 **モラルの功罪—経済学の視点から**
モラルの功罪—「節電」／新海哲哉
「経済効果」って何？／高林喜久生
統計の豆知識／豊原法彦
「ムラ社会」日本の損失／原田哲史
「食の安全・安心」のリスク／東田啓作
モラルの功罪「経済予測の有効性」／村田治
- 16 エコノフォーラム座談会「日本の農業について」
- 28 山本栄一先生を偲ぶ
- 30 シリーズチャペル〈経済と人間〉
東田啓作・市川文彦・小林伸生・河野正道・猪野弘明・平山健二郎・寺本益英・土井教之・井口泰・林宜嗣・野村宗訓・根岸紳
- 42 シリーズチャペル〈人間を考える〉
中川慎二・舟木讓・本郷亮・春井久志・田禾・山田仁・宮脇幸治・巖廷美・大高博美・韓燕麗・井口泰・舟木讓
- 54 退任教授最終チャペル講話
上ヶ原半世紀—仁川、甲山、アダム・スミス—／篠原久
私たちに地平線は見えるか／竹本洋
- 57 チャペル講話 卒業生を覚えて
4年間の学生生活を振り返える—社会人としての第一歩—／利光強
- 58 基礎演習：論文一覧
- 70 研究演習Ⅱ：ゼミの総括と卒業論文一覧
- 86 経済学部懸賞論文
- 87 編集後記

「第Nの経済学の危機——大学教師の反省——」

経済学部長 利光 強

日本経済は円高・デフレ基調からなかなか抜け出せず、加えて「3.11 東日本大震災・福島第一原発事故」の経済的・社会的な影響もあり、日本国民の多くが、ここ数年憂鬱な日々を暮らしてきたと思います。しかし、年末の衆議院選挙による政権交代後、株価の上昇や円安傾向など、若干の景気回復の様相を見せています。「コンクリートからひとへ」というテーゼが実現しないまま、老朽化したインフラ整備の必要性も相まって、再び「ひとからコンクリート」に戻りつつあります。そして、企業の業績が回復しても、賃金や雇用の著しい改善を見ないままでは、分配率の不均衡が懸念されます。そのことは、所得格差の拡大につながり、14年4月以降の消費税増税とともに、低所得階層へさらなる打撃になると予想されます。

また、グローバル化が進む中で、日本を取り巻く世界経済も大変厳しい状況にあります。「財政の崖」に直面しているアメリカ経済が「崖」から落ちた場合、その世界経済へ与えるマイナスの影響は計り知れません。また、ここ10年ほど中国の経済成長に依存してきた日本経済は、日中間の政治的な緊張や中国の労働力の賃金上昇などにより、経済の拠点を中国から東南アジアへシフトさせることが喫緊の課題となっています。

こうした危機的な経済状況は過去にも何度も起こり、「第1、第2、そして第3の経済学の危機」として、経済学者に対し「経済学の限界」を示してきました。しかし、その一方で経済学は自然科学（特に、数学や物理学）を真似て制度化され、いつの間にか「社会科学の女王」と呼ばれるようになってしまいました。そのもとの、多くの経済学の専門雑誌が出版され、山のように理論研究や実証研究の論文が掲載されるようになりました。さらに、最近では、ネット上にも多くの研究論文が公開されています。こうした過剰ともいえる研究情報の氾濫は、実際、一人だけでは整理・管理をできないほどになってしまいました。そして、その研究論文のなかには、現実的な経済問題や社会的現象を十分に解明できているのか、疑問の残るものもあります。

ところで、100年も前にA・マーシャルは、「経済学は『実践の下僕』であり、『倫理の侍女』である」と述べています。



研究者はこのマーシャルの言葉の意味をきちんと理解し、経済学の限界や射程を認識すべきであると考えます。経済学は人々の幸福のために資する政策手段を提案する段階で留まらねばならず、政策の選択に際しては、公共の倫理などの視点、つまり経済理論の射程外の価値判断に基づいてなされなければなりません。人間社会にとって経済という営みが続く限り、その反省がなければ、「第Nの経済学の危機」が繰り返し叫ばれることとなります。

同じことですが、学生たちに経済や経済学を教える立場にある大学教師もまた、マーシャルの言葉を忘れてはならないと思います。学生たちの大半は社会に出て、大学で学んだ考え方—あるいは、「思想」—に基づいて、多くの現実的な課題に取り組んでいくこととなります。したがって、学生には「経済学の守備範囲」をしっかりと意識させ、その上で経済理論をきちんと教育しなければなりません。大層に聞こえるかもしれませんが、大学教育によって培われた「思想」が、社会の方向性を決める際に多大な影響を与えることになりかねないことを大学教師、したがって研究者は常に自戒しておくべきです。守備範囲を外れた経済理論（もどき）が、深刻な「第Nの経済の危機」を引き起こすかもしれません。

特集

モラルの功罪

経済学の視点から

今号の特集のテーマは、「モラル」である。モラルという単語を一般的な辞書で引いてみると、道徳とか倫理とかいった単語が出てくる。それでは、道徳や倫理とは何だろうか。様々な定義があるとは思いますが、およそ、ある社会において人が正しく行動するための規範、あるいは人がその社会において守るべき道、ということになる。

やや強引なこじつけの印象はあるものの、今回はあえてそのモラルの負の側面について考えてみることにした。規範は、絶対不変のものではない。異なる社会には、異なる規範が存在する。同じ社会であっても、時とともに規範は変化していく。現在のわれわれが生きている日本社会の規範は、100年前のそれと異なることは明らかであるし、30年前のそれとも同じではない。法律のように明文化されたものではないため、変化の瞬間が見

えにくいだけである。

さて、モラルが不変のものではないならば、漠然と正しいと思われているような事柄について、少し疑ってみることは面白い。それが、本当に規範となるべきことなのかどうかを考えてみることは大切である。なぜならば、それがより良い次の規範を作りだしていく原動力となるからである。と、なんだか大げさに書いてみたが、取り上げる個々のトピックは、とても身近なものである。

1つめは「節電」である。最近でこそ少し緊張が緩んできたものの、少し前までは多くの人たちが、頑張って節電をしていた。2つめは「食の安全・安心」である。政府、多くの自治体がこのコピーを宣伝しており、なかには小学校でこのテーマの授業や取り組みを行っているところもある。3つめは、日本特有の「みんなで心を一つにして頑張ろう!」と

いったタイプの取り組みについてである。特に大震災後、多くの人々が、一つになって頑張ることは美德であると感じていたのではないだろうか。4つめは、どちらかといえばエコノミストのモラルを問うものである。私たちの多くがエコノミストの経済予測を信じこんでしまいが、その有効性はどのようなだろうか?

今回はあえてモラルの負の側面について経済学の観点から切り込んだのであるが、決して現在の規範を否定しようとしたのではない。客観的に事象を観察することを、また面倒くさげらずに冷静に物事を考えることが大事であり、それに気づいてもらいたかったのである。今回の特集をきっかけに、より深く考える癖を身につけていただければ幸いである。

(編集担当・東田啓作)

モラルの功罪

「節電」

新海 哲哉 教授（理論経済学）

「モラル」の意味は、辞書で引くと概ね「道徳。倫理。人生・社会に対する精神的態度」であり、「士気」「やる気」のことを意味する「モラール」とは違うようである。また、「功罪」の意味を調べてみると、「良い点と悪い点」ということになる。

今回、私が「エコノフォーラム」から頂いた「お題」は、「節電は、モラルの観点から良いかもしれないけど、「経済的」にはどうなの？良いの？悪いの？」についてということなので、「節電の意義」についていろいろ調べてみた結果、次の四つぐらいにまとめられそうである。

(1) 電気料金が下がる。電気料金は使用量による従量制なので、節電すると目に見えた効果がある。

(2) 電力消費の低下により発電設備に余裕ができ、発電コストの高い火力発電に使用する化石燃料が減ると同時に、二酸化炭素排出量を減らすことができ、地球温暖化の抑制につながる。

(3) 電力消費の低下は、東日本大震災での福島原発事故以降批判と完全廃止が強く主張されている、原子力発電所への発電依

存度も減らせる。

(4) 夏など電力需給がひっ迫しているとき、ピーク時の電力消費が減らせるので、大規模停電や計画停電による生活や生産活動への影響をすくなくすることができ

したがって、上記の「節電の意義」をもとに考えれば、自分の生活の快適さや企業の営利活動のために電力をたくさん消費することをやめて、「節電」すべきだという考え方は、「モラル」の側面から望ましいことであるという主張は理解できる。確かに、「節電」すると電気代が下がり、家計に優しいし、地球温暖化抑制など環境にもよい、さらに国民に長期にわたる放射能被害をもたらす原発への依存度も減らせるし、大規模停電や計画停電のリスクも減るからである。

しかし、「節電」を経済学的に考えてみると、決して話そう簡単にはいかない。ここでミクロ経済学をよく勉強した人は「市場の失敗」のところまでできた「費用逓減産業」の話を出し、「何か違うんじゃない？」と疑問を呈してほしい。

ご存知のように、電力、ガス、鉄道などの事業は、国民生活や企業の生産活動にとって、必要不可欠で公共性が高く、またその事業を行うための固定費用が非常に大きいことが知られている。今回のお題の「節電」に関して言えば、電力会社も発電所、変電所、送電網の建設維持管理費用などの固定費用が非常に大きい。こうした産業ではこうした費用が非常に大きな企業は、生産量が大きいほど、生産量を1単位当たりの費用である「平均費用」は下がって、いわゆる「規模の経済」が働く生産量の領域が大きいことから、「費用逓減産業」と呼ばれる。そうなる、費用逓減産業では、市場で複数企業が操業すると、市場全体で、大きい固定費用が重複してかかるために社会的に無駄となるため、独占となる傾向が強い。現に現在、日本でも電力会社は全国9社の地域独占であり、独占の弊害（過少供給と高価格）をなくすため、政府による規制が行われている。

経済学の教えるところでは、「企業が限界費用と等しい価格となるところまで生産供給することが、資源配分上望ましい。（限界費用価格形成原理）」ことが知られている。しかし、企

業の採算面から考えると、企業は限界費用価格形成原理により価格付けすると生産費用が十分まかなえなくなり、赤字になるので、事業存続のために政府が、「電力会社が赤字にならずに利潤ゼロとなるように価格付けする。(平均費用価格形成原理)」ように規制することになる。

ここで国民が「節電」に励むと、どの電力料金の高低に関わらず電力消費を減らすことになるので、需要曲線は左にシフトする。他方、先に述べたように「費用削減産業」では、「規模の経済」が働いているので、平均費用は「節電前」は右下がりであり、そこで需要曲線が左にシフトすれば、需要曲線と平均費用曲線の交点で価格を決める、「平均費用価格形成原理」での規制下では、電力会社の市場均衡供給量は減り(そのための節電である)、平均費用は「節電前」より上昇し、企業は赤字に転落することを恐れ、政府に値上げを申請し価格も上昇する。(これを読んだ学生諸君は、ミクロ経済学のテキストを参考にグラフを描いて考えてみてください。)

価格上昇の効果は次に挙げるような、「負の効果」をわれわれ家計や企業の経済活動、経済全体に与える。

第一に、価格上昇は「家計」の光熱費支出を増加させるので、家計に打撃を与える。しかし、これはまだ、影響の程度は緩慢であるが、次にあげる悪影響は甚大である。

第二に、電力の消費者は、家計だけでなく、多くの企業も含まれ、需要規模も企業の方が大きい。電気料金の値上げは、企業の費用を増加

させ、国際市場で激しい価格競争にさらされている企業の収益を下げ、業績を悪化させる。業績の悪化は、生産活動拠点を日本から、他のコストが相対的に安価な海外への移転による、「産業の空洞化」をさらに進展させ、企業の日本国内での「雇用」を減らし、失業の増加をもたらす。また、企業の業績悪化は、株価を下げ海外から日本への投資資金の引き揚げをもたらす。最近、国際市場での取引の低迷をもたらす。最近、パナソニックなどの急速な業績悪化による大幅な株価の下落、外国企業への部門の売却等の加速をみれば、コスト上昇がいかに日本経済や国民生活に悪影響を及ぼすかは、明らかであろう。

第三に、「節電」による電力消費の減少は、電力会社の平均費用を上昇させるので、電力会社は長期的には、老朽化した発電所に代わる新たな発電所の建設や設備の更新、既存の発電所の操業を停止したり、変電、送電設備の保守維持費用など固定費用を節約して、「節電前」より左下方の短期平均費用曲線を選択し、赤字を避けようとするので、長期的に電力の供給能力が減少し、2011年の東日本大震災のような、自然災害等によって電力供給網が途切れたとき、電力を安定供給する体制がとれなくなり、もたらされるであろう大規模停電や計画停電によって、国民の生活や企業の生産活動、経済活動に大きな悪影響を与える可能性を高めることになる。

このように、「モラル」の上では「良い」であろう「節電」は、市場取引でもたらす効果や

それに対して企業がとる行動の結果を通じて国民生活や経済全体にもたらす影響を「経済学的」に考慮すると、かえって長期的にはわれわれ国民生活や国民経済に悪影響をもたらしてしまうかもしれない。

したがって、「経済学」を学ぶ経済学部の学生諸君は、大部分の国民が、「モラル」による「節電」の推奨を主張するときでも、上述した「経済学的なものの方、考え方を鍛え、「モラル」では良しとされる「節電」の、国民生活、企業行動、国民経済に与える「悪」の部分をも考慮するよう主張できる、「科学的かつ冷静な頭脳」と国民生活や国民経済の悪化による国民の苦しみをも考える「温かい心」をもつ社会人となってくれることを期待して小稿を閉じることにする。

「経済効果」って何？

高林 喜久生 教授（財政学）

二〇一二年の五月二十一日の朝には金環日食があり、天文ファンだけでなく、一般の人々を含め、大きな盛り上がりを見せました。そのころ、「金環日食の経済効果、たった5分で一六四億円」（読売新聞、二〇一二年五月十八日）といったニュースが目を引きました。日食グラスの購入や日食観察のための旅行支出、関連書籍やグッズの購入などの直接需要とそこからの波及効果がその内容とのことです。

近年では、金環日食以外にも以下のようなイベントの経済波及効果を取り上げたニュースがありました。

- ・スカイツリーの経済効果八八〇億円（東京都墨田区による試算）
- ・二〇一〇年東京オリンピックの経済効果 全国ベース二兆九六〇〇億円（東京都による試算）
- ・二〇一一年大阪マラソンの経済効果三九・六億円（関西社会経済研究所による試算）

このようにいろんなイベントが催されたり計画されたりすると、その「経済（波及）効果が、〇〇億円」とかいうニュースがマスコミを賑わせます。上の例で挙げた東京オリンピックの例のようにイベント開催の支援材料として用いられることもあります。金額で表わされるとともにしきりも伴います。この経済効果の金額はどのようにして求められるのでしょうか。また、

その金額を額面通りに受け取ってもよいのでしょうか。以下では、身近な大阪マラソンのケースを取り上げて説明しましょう（ほかのケースでも考え方は全く同じです）。

1. 大阪マラソンのケース

大阪、神戸、京都と関西でも市民マラソンの開催は一種のブームとなつていますが、その背景の一つにはそれが地域経済の振興に一役買うことが期待されていることがあります。ではなぜ、市民マラソンレースの開催がなぜ地域経済に影響を与えるのでしょうか。

大阪で市民マラソンレースが開催されれば、全国の多くの地域から参加者や付添者、応援者が集まります。大阪マラソンの場合、参加者の定員は合計三万人とかなりのスケールです。マラソンに参加するには大会参加費も必要になりますし（大阪マラソンの個人参加費は一万円です）、往復の交通費も必要です。地元から参加する人も、遠方から参加する人もいます。遠方からでは交通費もかさみますし、期間中の飲食費や宿泊費も必要です。お土産を買って帰る人も多いでしょう。これらは地域経済において追加的な財・サービスの購入となります（ただし大会参加費は大会事務局の財源となり事務局を通じて支出されます）。一方、大会事務局も大会の運営にあたってコースを設営したり、広報

をしたり、様々な支出を行います。これらは直接的な需要として経済に波及していきます。

そして、直接的な需要は間接的に様々な部門に波及していきます。飲食支出に注目すると追加的に発生した食品需要が波及して、農業や食料品製造業、運輸業など他の産業の生産が拡大していきます。また、ある食品の売上げが伸びれば、その食品メーカーは生産を拡大させ、残業が続くとそこで働く労働者の残業手当が増え、その一部は消費にまわるでしょう。残業手当でデジカメを買ったりマラソンとは直接の関係の無い業界にも波及していくこととなります。

このようにマラソン開催によって発生したある産業に対する需要の変化は、次々と他の産業に波及していきます。そしてこれが循環して地域の経済や景気に影響を与えることとなります。これは交通費や宿泊費、お土産の購入の波及についても同様に考えることができます。

2. 経済効果の求め方

もちろん、常識でこのような波及効果があることはわかります。しかし、経済分析の道具を使うことにより、その波及効果の大きさや、どの部門への波及効果が大きいか具体的な数値で示すことができます。その分析道具が、「産業連関表」です。産業連関表自体は産業間の様々な経済取引を行列形式にまとめたものですが、

この表をもとに、生産誘発額Ⅱレオンチェフ乗数×直接需要額という関係式が求められます。レオンチェフは産業連関表の創始者で一九七三年のノーベル経済学賞を受賞しました。

レオンチェフ乗数は、消費などの直接需要額が追加されたときに何倍の生産が誘発されるかを示します。先ほどの例で言えば、大阪マラソンの開催によって飲食支出の売上げが一億円増えれば（直接効果）その関連業界を通じてその乗数倍だけの生産が誘発されます（間接1次効果）。それに対応して賃金が増加し、その一定割合が消費に回り、また生産を誘発します（間接2次効果）。通常はここまでで一区切りとしてその生産誘発額の合計として経済効果が求められています。

大阪マラソンの経済効果については、大阪経済や関西経済に与える影響が分析の中心となりますから、大阪府や近畿地区の産業連関表を用いればよいこととなります。こうして積上げ試算した大阪マラソンの経済効果が冒頭に取り上げた三九・六億円というわけです。

3. 経済効果の読み方

しかし、経済効果の金額を鵜呑みにすることはできません。大阪マラソン開催で経済効果が発生しても、それがそのまま地域経済の拡大をもたらすとは限りません。マラソン参加者は、他のスポーツ・レジャー関連の消費を控えたりするかもしれません（地元からの参加者についてはこの影響が無視できないでしょう）。またマラソン大会開催の混雑を考慮して、一般観光客が訪問を取りやめる可能性もあることにも注意しなければなりません。とくに京都のような

観光地で開催される場合には、その影響は大きいでしょう。しかし、産業連関表による経済効果の試算で取り扱われているのはプラスの効果のみで、マイナスの効果は考慮されていません。

また、そもそも直接需要の正確な把握が非常に難しいということがあります。マラソン参加者の実際の支出を正確に把握することはアンケートでもとらない限りかなり難問です。上の大阪マラソンの試算例では「大阪市観光客動態調査」という一般の観光客の数字を流用しています。ここで用いる資料が違くと直接効果が異なり、それ以降の間接効果も当然異なってくる。

さらに、これらの調査によって公表されている経済効果の金額は、ほとんどの場合、生産誘発額であつて、原材料等の中間の生産物を含む全体の生産額の増加であることに注意しなければなりません。すなわち、われわれが一般に経済規模の指標で用いる県内総生産（国全体で見れば、国内総生産ⅡGDP）の増加額ではありません。県内総生産は中間生産物を除いた新たに生み出された付加価値生産額です。付加価値生産額に対応させるためには、生産誘発額ではなく付加価値誘発額を用いる必要があります。先の大阪マラソンの例では、生産誘発額は約三九・六億円と試算されていますが、付加価値誘発額は約四十四％の約一七・三億円と大幅に小さくなります。

最後に、一般にイベントが対象とする時点と使用する産業連関表が対象とする時点の間には大きなタイムラグがあるということです。産業連関表の作成には非常に手間がかかり、5年ごとに作成されることが基準となっています。国や近畿地区の産業連関表は2005年表が最新で、経済効果の試算にそれ以降の経済構造の変

化は反映されていません。

4. 経済効果試算のすすめ

産業連関表による経済効果は読み方に注意しなければ点もたくさんありますが、具体的な影響度を測定できるという意義は大きいといえます。そして、必須の分析道具である産業連関表の多くは、ネット上にアップされており、分析のためのワークシートが用意されているものもあります。産業連関表は基本的にEXCELシートで提供され、経済効果の計算もEXCEL上で可能です。後述の参考文献・資料リストでは教科書とともに総務省提供のワークシート（全国ベースの産業連関表を用いています）や兵庫県提供のワークシート（兵庫県産業連関表を用いています）を挙げておきました。とくに兵庫県のワークシートは具体例も豊富でかなりおすすです。卒論やインゼミなどでオリジナルの経済効果の試算に取り組んでみてはいかがでしょうか。

【参考文献・資料】

- 宮沢健一（二〇〇二）『産業連関分析入門（新版）』日本経済新聞社
 関西経済連合会・関西社会経済研究所（二〇一）「新・近畿産業連関表 および 京・阪・神市民マラソンの経済波及効果」 (http://www.apir.or.jp/ja/project/pdf/111026_Pdf01.pdf)
 兵庫県企画県民部統計課「産業連関分析ワークシート」 (http://web.prefhyogo.jp/ac08/ac08_2_000000016.htm)
 総務省統計局「経済波及効果を計算してみようー平成十七年産業連関表（三十四部門別）ー」 (<http://www.stat.go.jp/data/ro/hakyu.htm>)

統計の豆知識

豊原 法彦 教授 (経済統計学)

経済学部の皆さんが、日常接している統計データ。ここでは普段あまり気にしないような統計(学)について、お話しします。

統計に法律があるの？

はい。「統計法」という法律があります。これは、戦後日本が連合国の占領下にあった昭和二十二(一九四七)年に公布され、平成十九(二〇〇七)年に全面改訂されています。ちなみにこの法律の目的が第一条に書かれていますので引用します。

(目的)

第一条 この法律は、公的統計が国民にとって合理的な意思決定を行うための基盤となる重要な情報であることにかんがみ、公的統計の作成及び提供に関し基本となる事項を定めることにより、公的統計の体系的かつ効率的な整備及びその有用性の確保を図り、もって国民経済の健全な発展及び国民生活の向上に寄与することを目的とする。

つまり、大閣検地を引き合いに出すまでもな

く、国力をきちんと把握するには統計データの収集、利活用が重要だと言うことで、当然のこととして人も予算も付いています。そしてこの法律を元に行われている基幹統計が、国勢調査と国民経済計算です。

ご存じのように国勢調査は、五年に一度行われます(正確には西暦の末尾が0の年の大規模調査と西暦の末尾が5のときの簡易調査から成り立っています)。全員をくまなく調べるので、悉皆(しっかい)調査とも呼ばれる国勢調査は、統計法ができる以前の大正時代から行われていましたが、現在は統計法にもとづいていますので個人情報等を扱う調査員だけでなく虚偽の答弁をしたものにも罰則が規定されています。(それぞれ一〇〇万円以下と五〇万円以下の罰金)

噂では、むかし、国勢調査を行うための大型コンピュータの構想が示されたとき、五年に一度しか使わないので無駄だと各方面から指摘されたそうです。それに対して当局はその空いている時期には共通一次試験(今のセンター試験)の処理を行うと提案し、予算を獲得できたそうです。

また経済学部では切っても切り離せない国民

経済計算(SNA)ですが、海外ではUNsnaといわれており、国連経済社会理事会の下にある国連統計委員会(United Nations Statistics Division)で各国地域からの提案が議論され、議決されたものがたとえばSNAといった名称で採用され、社会の変化に応じて進化を遂げています。逆に言えば、ルールが変わるとデータの遡及が難しくなり、日本国内のデータであっても、現時点では一九八〇年までしか得られないものがあります。たとえば、私が学生の頃はGNP(Gross National Product: 国民総生産)が議論の中心でしたが、海外とのやりとりが盛んになるにつれて、GDP(Gross Domestic Product: 国内総生産)を分析対象にすることが多くなりました。資料集によっては両者を掲げているものもありますが、実質値など少し丁寧な分析を試みる際には、データの变换、近似などの対応が必要になります。

Statisticsと統計学の関係は?

次は、統計学を示すStatisticsという単語についてです。辞書によれば、ラテン語で「立つ」を示すstareという単語から、「政治」をしめす

statisticusを経てこの単語が生まれたそうです。つまり、もともとは国の状態を示す単語で、先の統計法の概念に近いものです。実は、明治の初期にはstatisticusを「国勢学」と呼んでいた時期もありました。それに対して日本語の「統計学」とは計ったものを統べる（＝全体をまとめ、支配する）学問ということですから、より実務を示す形へとニュアンスが変わってきたことを感じてください。もちろん、単に数字をまとめるだけではないことはおわかりいただけると思います。従いまして、皆さんが大学で学んでいる、目の前にあるデータからその背後にある母集団を統計的に推測するという、統計学とは少し違う印象を持たれるかもしれません。

実は明治の初期に創作された言葉には「情報」（情況報告の短縮語と言われ、決して「情けに報いる」というウエットな意味ではない）や虚数（虚々実々という熟語から「実」の反対語として「虚」が選ばれた。英語ではimaginary numberなので、想像上の数）、「野球」(baseball)を素直に訳せば塁球）などがあります。

お金をかけたGDP統計のはずなのに数字が合っていないのはなぜか？

はい。統計上の不突合と言います。経済学では最初のところで、GDPは生産面、分配面、支出面について一致するという三面等価の原則を学びます。ところが、総理府統計局のデータベースを見ると、平成二十二年度の国内総生産勘定（生産側及び支出側）では、生産側の方に「統計上の不突合」として約二兆円が計上

されています。これは、データ捕捉が消費、投資といった支出面の方が、雇用者報酬、営業余剰などの分配・生産面よりも容易なので、支出面にあわせる形で生産側を調整していることが原因です。GDPは都道府県庁はじめ各機関がデータを収集し、産業連関表を用いて中間生産などを精査しながら作成された二次統計なので、その性質上、漏れの部分が出てきます。それを、より正確であると思われる支出側にあわせる形でこのような処理が行われています。

景気回復と言われても実感を伴わないのですが。

よく知られていることですが、「景気」をダイレクトに表す経済指標はなく、内閣府経済社会総合研究所が生産、雇用、流通等の時系列データを加工して作成しています。また、日本銀行も金融政策決定会合後に金融経済月報において公表しており、例えば2013年1月では「わが国の景気は、弱めに推移している。」とされています。

景気が実感と必ずしも一致しない理由を元気という体調と比較して考えてみます。ある人が元気であるかの判断にはその人の身体状態に関する情報（身長、体重、血圧、血液組成成分など）の継続的なデータが必要になります。たとえばBMI（＝kg表示の体重÷m表示の身長²乗）は肥満度を示す指標で20未満であればやせ気味、26・5以上であれば太り過ぎなどと言われます。また過去の値と比較することも重要で、同じBMIであったとしてもそれが増加傾向に

あるか減少傾向にあるかによって判断が異なるでしょうし、さらにメンタル状況も合わせることで「元気」について判断することになるのでしょう。

景気の判断に関して経済社会総合研究所はあらかじめ選ばれた指標を先行、一致、遅行に分け、各々の過去3ヶ月の変化方向に基づいて行っています。その個別指標のうち雇用や家計に関するものは先行系列には「新規求人数」、一致系列には「有効求人倍率」と「所定外労働時間指数」、遅行系列には「家計消費支出（全国勤労者世帯）」と「常用雇用指数」があります。これは、景気がよくなると期待した企業が新規雇用を行い、人手不足の改善を行う中で家計の消費が拡大するというモデルを想定しており、実際にデータで裏付けられています。つまり家計が景気回復を実感するにはラグがあります。もちろん、より個人実感に近づけるために景気ウォッチャー調査のように市井の人たちがつ景気の実感を大まかに調べるものも利用されています。従いまして、新聞などで見られる景気については、少し長いスパンで見ただ方がいいかもしれません。

統計データについていろいろお話ししてきましたが、インターネットさえあればデータがすぐに手に入る今だからこそ、その出自を明確にした上で、日々の勉強に活用してください。

「ムラ社会」日本の損失

原田 哲史 教授（文化と社会の経済学）

日本文化史家にして評論家の加藤周一¹が晩年の対談のなかで、議会主義の伝統のあるイギリスでの多数決の考え方を引き合いに出して、欧米とは異なる日本での意思統一の問題性について熱く説いている場面がある。結論から言えば日本では「少数意見の尊重」が不十分だということのだが、老練な評論家の次のような議論には、亡き後もなお一層の共感を覚えるものである。

イギリスで多数決をするとき、多数派も少数派もそれなりに理由がある中で「現段階ではどちらが正しいか分からない」けれども、「まあ仮に」一定の方向で進まなければならないとすれば多数派の意見を採用するを得ない、と考えて決定する。その結果、少数派もひっくり返る。それが多数派の方向に進むことになるが、少数派の意見は、それはそれでありうることで、集団の中にとっておかれる。「あとで」それが正しいことが分かるかも知れないという留保とともに、集団内に保持されるのである。それに対して日本では、採決で多数をとった意見が「正しい」ことになり、進むからには全員一致で進むべきだということ。少数意見保持者を説得

し、多数派の意見に変えさせようとする。いや、その作業は採決をする前から行われることもしばしばある。そもそも多数決を好まないのが日本社会である。「徹夜で説得しました」というのが美談となり、「全員一丸となって」事を進めたいと思う。「説得」にもかかわらずあくまで少数意見を正しいと信ずる者は「村八分」にされてしまう。これが日本の「ムラ社会」なのである。

そこには皆で一緒に頑張る清々しさはあるのだが、そのために常に生ずる日本特有の弊害がある。その最たるものは、一定の方向へと進行する際に反対意見を——少なくとも決定機関からは——消滅させてしまっていることで、その進路が間違っていることに後で気付いても途中で軌道修正が極めて困難であることだ、と加藤は言う。方向転換は、どうしようもないカタストローフに陥るまでできないのである。例えば、第二次世界大戦ではある程度の時点で日本が負けることが上層部を含めて分かっていたのだが、戦争をやめる意見が抹殺されていて、うすうす分かっても誰もそれを言わない。原爆投下という大カタストロースが来るまで言え

なかったのだが、もっと早く方向転換できていれば原爆犠牲者はなかったはずだ。水俣病のときもそう、工場排水が問題だということはある程度の時点で分かっていたのに、人が死んだり重傷者が出たりということになって初めて排水を止めることになった。早期にそうしていれば犠牲者は減らせたであろう。いずれも決定機関の中に少数意見がなかったことが問題なのである。

以上のような加藤の指摘が彼の死後なお一層私たちに強い共感を呼ぶのは、昨年三月十一日の東日本大震災での福島第一原子力発電所のカタストローフとともに、原発をめぐる議論がいかに乏しかったのか暴露されたからである。「国策」として権威づけられた原発推進という多数意見によって、脱原発・反原発という少数意見が圧殺されてきた。そうした状況の中で、すでに指摘されていた津波による損傷・大事故の可能性が、現実のものとなったのである。原発推進派はそれを聞こうとせず安全神話でもって押し切ってきたので事故を「想定外だった」と言っていたが、反対派や地震学者からその問題が指摘されていたのだから、ただ単にそれを「想定」の

中に入れなかっただけなのである。東京電力内にはその懸念に注意を喚起する者はいなかったし、それどころか、東電の一般幹部でも意見が言えないような「原子力村」と呼ばれた限られた者たち（原発推進を至上目的とする産官学のグループ）の意向のみで原発が管理・運営されていた。様々な意見を取り入れて運営する体制にはなっていないことは明らかで、大カタストロフが起きて初めてそうした問題を考えたのである。それによる損害は計り知れない。それ以前からそうした声を真摯に考慮していれば、被害は防げたであろう。少なくともより適切な対処によって、被害は少なくともは減らされる。まさにこの原発事故は加藤の指摘した日本社会での意思形成の問題を如実に示している。

個人的な話になるが、大学院生の頃、熱心に原発運動をしていた知人がいた。その後、私の留学などで彼とは連絡が途絶えてしまったし、もうかれこれ三十年もたっているのだが、福島あの事故の後ふとインターネットで彼の名前を検索してみた。すると彼のサイトがあった。懺悔するような口調で次のような内容が吐露されていた。自分はもともと原発運動に力を入れていたし、今回のような事故が起きる可能性を指摘して電力会社にも訴えかけたが、いくら言っても「安全だ」で突っぱねられるだけで電力会社からはまともに相手にされなかった。それに、原発運動をしていたら、他にも携わっていた市民運動で自治体の仕事などを請け負おうとしても、原発のレッテルを貼られ

て締め出されてしまった。そうした中で子供を抱えて生活を立てていけないといけなかったの、あるときから原発の運動をやめてしまった。こんなことで本当に申し訳なかった。福島の方々に謝罪したい。と、こう書かれていたのである。

坂本龍一のように財を成した有名人なら事故前から原発を発言してもビクともしないだろうけれど、事故後でさえ原発を表明した俳優が職を失ったと聞く。事故前に下からの市民運動としてそれを訴えるのはあまりにもハンディキャップが大きく、生活を犠牲にすることを意味したのである。現在、政府も脱原発を決定しようとしており、もはや原発を叫ぶことも少数派に属するわけではない。しかし、日本社会における少数意見の圧殺の構造それ自体はどうだろうか。これを機に振り返ってみる必要があるだろう。「皆で一緒に頑張ろう！」ということ自体は良いし、日本社会の美徳でもある。もちろん、一定の方向で集団が進んでいくときは、行動を共にする必要もある。けれど、たとえそうだとしても、そのとき心の中で別の意見をもっていることが圧殺されてはならないであろう。そして機会があるときにそれを発言でき、また多数者がそれに耳を傾ける空気というものが必要である。それは心情や意識のみならず、制度でもって保障されていなければならないだろう。そうして日本社会の特質から生ずる弊害が軽減されるべきなのである。経済学的・数量的に見ても、カタストロフが来てからの軌道修正では、あまりにも損失が大きいのである。

1

加藤周一、一九一九―二〇〇八年。東京帝国大学医学部を卒業し医師となるが、文芸評論や文化論、文化史論を中心に執筆活動を展開するとともに、それを通じて欧米との比較における日本文化・社会の特性を明らかにし、社会・政治に関する批評も多数発表している。一九六〇年にはカナダのプリティッシュ・コロンビア大学（本学の提携大学）に招聘されて、日本の文化・文学史を講義する。その内容を含む著『日本文学史序説』上（一九七五年）・下（一九八〇年）は、英語をはじめ数か国語に翻訳されて、世界的な名著となっている。『加藤周一著作集』全二十四巻および別巻（平凡社、一九七八―九七年）。

2

『日本その心と私たち』（DVD『ジブリ学術ライブラリー』NHKエンタープライズ、二〇〇五年、「特別講義」。その他、同様の加藤氏の議論は『日本文化における時間と空間』岩波書店、二〇〇七年、第一部「第三章 行動様式」にも見られる。

3

大惨事の可能性については脱原発・原発の市民運動による叫びが無視され続けたのみならず、原子力安全委員会委員であった地震学者の石橋克彦（当時、神戸大学教授）が活断層との関連で大地震発生による原発の危険性を指摘しても受容されず二〇〇六年に委員を辞任するという事態を鑑みたとき、その深刻さをあらためて思い知らされる。

「食の安全・安心」のリスク

東田 啓作 教授 (資源経済学)

最近、「食の安全・安心」というコピーを見聞きすることが多い。それでは、「食の安全」あるいは「食の安心」とは何だろうか。

食の安全については、平成15年7月1日に内閣府の下に設置された食品安全委員会の役割をみると分かりやすい。食品安全委員会は、食品に含まれる可能性のある添加物や農薬、あるいは病虫害やウイルスなどの危害要因の摂取が、どのくらいの確率でどの程度健康に影響を与えるのかを、科学的知見に基づき客観的に評価する。したがって、食の安全は、リスク（＝被害が発生する確率）と発生した場合の被害の深刻さに基づいて、客観的に提示することができるといえる。

一方、食の安心は客観的に評価することが難しい。安心できるかどうかは、個々の消費者の主観的評価に依存するからである。例えば、食品添加物を気にする人もいれば、全く気にしない人もいる。低価格がセールスポイントのファミレスの食事を喜んで食べる人もいれば、それを安心して食べることができない人もいる。輸入食品と聞くだけで安心できない人もいる。したがって、食の安心の程度は、それぞれの消費者によって異なる。

確かに、我々の食生活が安全であることは望ましいし、安心して豊かな食生活を送れることは素晴らしいことである。食糧を生産する農家や農業生産法人、食品を加工する企業、食事を提供するレストランといった供給者は、食品添加物や残留農薬の基準を遵守すべきである。基準が適正なものであれば、モラルの観点からそうすべきである。食品偽装にいたっては問題外である。さらに、生産に関する情報が市場を通じて消費者に伝達される仕組み（＝ラベリング制度）が出来上がれば、市場価格は安全が生み出す効用や安全を作り出すための費用を反映することができるようになる。

しかし、安全・安心をやみくもに求めることは必ずしも社会にとって望ましい結果をもたらさない。特に、最近このコピーが濫用される傾向にあり、消費者も求めすぎの傾向にあるような印象を受ける。

一般的にリスクを減らすことには費用がかかる。以下では、安全・安心を過度に求めることの費用について、経済学的に考えてみよう。

第1に、効率的な農業生産、効率的な食品流通が阻害される。経済学部では、1回生の時か

ら市場メカニズムを勉強することになった（）。市場は、効率的な資源配分を実現するための最良の仕組みである。前述の通り、リスクを減らすためには費用がかかる。したがって、安全のためにどの程度費用をかけるかは、実現される安全性の便益と比較衡量したうえで決められるべきである。極端な安全や安心を求めることは、本来ならばより低い費用で供給されたはずの食糧や食品が、高い費用で供給されることになる。使用しても健康に被害が出ない農薬や食品添加物の使用を禁止することは、生産費用を極めて大きなものとするため、社会厚生観点から決して望ましいことではない。現在の日本では、農薬は、その安全性を確保するため農薬取締法に基づき製造、輸入から販売そして使用に至る全ての過程で厳しく規制・管理されている。したがって、使用方法を誤らなければ、安全性は極めて高い。

第2に、貿易の利益を失う。消費者は、輸入された食糧や食品から、病虫害、カビ、有害な食品添加物、あるいは残留農薬が検出されたらと聞くと、過剰に反応する傾向がある。過去の実証研究や実験でも示されているが、我々は、新

しいもの、あるいはよく知らないものに対して、よりそのリスクを過大に評価する傾向にある。安全・安心を過剰に求める場合、特定の輸入食料・食品の輸入禁止措置がとられかねない。経済学部では、やはり1回生から貿易の利益がいかに大きく重要なことなのかを勉強することになっていく。ほんの一握りの食糧や食品が有害であるというだけで、同種の食糧や食品すべてを輸入禁止にしてしまうことは、便益に比べて大きな費用がかかる政策措置である。

第3に、かえってリスクを高める結果につながる可能性がある。多くの人々は、農薬を用いて生産された通常の農産物よりも、有機栽培の認証を受けた農産物のほうが安全だと考える傾向にある。しかし、これは必ずしも正しい判断ではない。有機農産物にも、有害な物質は含まれているかもしれない。先にも述べたとおり、現在の日本において登録されている農薬によって健康被害が発生するリスクは極めて小さい。我々は、ある基準を満たしたものの（認証を受けたもの）は実際よりも安全だと考え、基準を満たしていないもの（認証を受けていないもの）は実際よりも安全ではないと考えがちである。消費者はまた、安全・安心に見えるものを過度に信頼する傾向もある。健康食品は、とても健康に良いと考える。しかし、読者の多くは、ダイエット食品で健康被害が出たというニュースはしばしば耳にするが、普通に利用されている食品添加物で健康被害が出たというニュースはほとんど聞いたことがないだろう。もちろん、食品添加物が健康被害をもたらすという因果関

係をデータで検証することが難しいためであるかもしれない。しかし、食品添加物が健康被害をもたらさないことの結果かもしれない。

消費者にとつて、情報の持つ意味を正確に理解して、さらにその情報によって判明したリスクに基づいて合理的に行動をすることは、かなり難しいのである。そもそもリスクをゼロにするということは極めて困難なことである。例えば、タマネギに含まれるある成分は、大量に摂取すると、肝臓に悪影響をもたらしたり、溶血性貧血を引き起こしたりする可能性がある。食品添加物ではなく普通に我々が食する食品であるため、基準は存在しないし、我々の多くがこの事実を知らない。いずれにしても、この成分から発生する被害の確率をゼロにするためには、タマネギを食べることをあきらめなければならない。筆者はコーヒイが大好きであるが、これに含まれるカフェインは大量に摂取すると健康被害が発生する場合があると言われている。このリスクをゼロにするためには、コーヒイをあきらめなければならない。

日本には、食品添加物、農薬などについて、安全の観点から厳しい基準が存在する。また、コーデックス規格と言われる国際食品規格も存在する。農薬が危ないのではなく、違法な農薬や違法な農薬使用法が安全ではない。輸入食品が危ないのではなく、危ない輸入食品が安全ではない。モラルの観点から安全・安心を追求することは、とてもよいことのように考えられるかもしれない。しかし、「食の安全・安心」のコピーの氾濫に惑わされて、「安全なものに

安心できずに、安全ではないものに安心することにならないようにすることが大切である。

参考文献

- 岩田健太郎（2012）『リスク』の食べ方 ―食の安全・安心を考える― ちくま新書
 畠山智香子（2009）『ほんとうの「食の安全」を考える』化学同人
 山下一仁（2008）『食の安全と貿易―WTO・SPS協定の法と経済分析』日本評論社

〈文末脚注〉

- i 食品安全委員会 (<http://www.fsc.go.jp/>) を参照された。
 ii 制度の詳細については、農林水産消費安全技術センターの農薬に関する情報のページを参照されたい。(<http://www.acls.famc.go.jp/index.htm>)
 iii 食の安全と貿易については、山下（2008）に詳しく述べられている。
 iv この部分については、畠山（2009）の第1章第3節を参照させていただいた。
 v 岩田（2012）は、生レバーの禁止を例に、リスクについて分かりやすく解説している。
 vi コーデックス委員会が策定する。この委員会は、消費者の健康の保護、食品の公正な貿易の確保等を目的として、1963年に国連食糧農業機関（FAO）と世界保健機関（WHO）により設置された。規格については以下のIPを参照された。
 (<http://www.codexalimentarius.org/standards/list-of-standards/en/>)

モラルの功罪

「経済予測の有効性」

村田 治 教授 (理論経済学)

毎年の年初めに、多くの調査機関やシンクタンクが一年間の経済予測を行い、シンポジウムや講演会が開催されています。その年の経済予測は、企業にとっては需要予測や設備投資を行う上で極めて重要であると考えられます。しかしながら、この経済予測ほど胡散臭いものはありません。と言いますのも、調査機関やシンクタンクが行ってきた過去の経済予測、例えば、GDP成長率などが的中したことがほとんどないからです。もちろん、予測にはハズレはつきものなのですが、これほどの中しないと、経済予測をするエコノミストたちが自己の経済予測の蓋然性をどこまで信用しているのか、いささか疑問を抱くところではあります。ひよつとしたら、「当たるも八卦、当たらぬも八卦」というのが内実なのかもしれません。そうであれば、いささか無責任であるような気がしますし、エコノミストとしてのモラルが問われるのかもしれないですね。以下では、この経済予測の有効性について考えてみましょう。

経済予測という場合、マクロ計量経済モデルによるGDP予測や先行指数を用いた景気予測などがよく知られています。前者のものとして

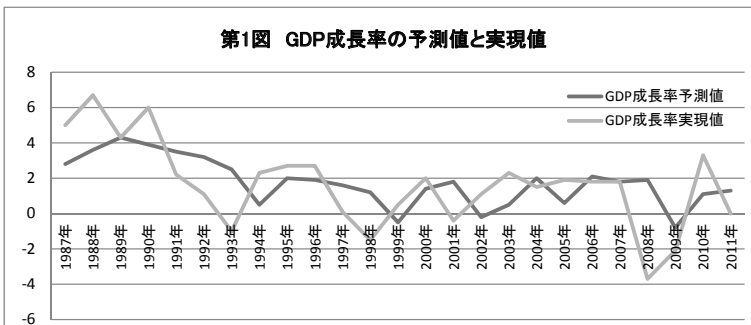
は毎年元旦の日本経済新聞に発表される年間GDP成長率のNEEDSマクロ予測などがあり、後者としては内閣府が毎月発表している景気動向指数(速報)のCI先行指数が挙げられます。以下では、この二つの数値を用いて経済予測の有効性について考えてみましょう。

毎年お正月に発表されている日経NEEDSのGDP成長率の予測値とその年の実現値をプロットしたのが第1図です。

この第1図からわかるように、GDP成長率の予測値は実現値をうまく予想しているとは言えません。実際、両者の相関係数は0.512と高くありません。実は、興味深い事実が観察されます。それは、GDP成長率予測値と前年のGDP成長率実現値の相関係数が0.856と極めて高いという事実です。実際、両者をプロットすると第2図のように描けます。この第2図からわかるように、GDP成長率予測値は前年のGDP成長率実現値と極めて似かよった動きをしています。このことは何を意味するのでしょうか。日経NEEDSマクロ予測の場合、原油価格、為替レートや金利などの外生変数や政策変数の予測値を与件として、次年度のGD

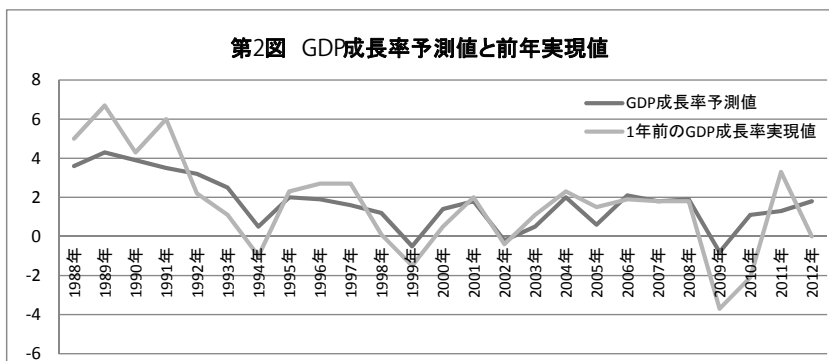
P成長率を予測しています。実は、これらの外生変数や政策変数の予測値は前年の実現値に

第1図 GDP成長率の予測値と実現値



引つ張られる傾向があるのです。したがって、その結果として、GDP成長率の予測値も前年度のGDP成長率実現値に連動する傾向が生じると解釈されます。

次に、内閣府のC I先行指数について見ていきます。1985年以降の内閣府のC I先行指数と景気基準日付の関係を図示したのが第



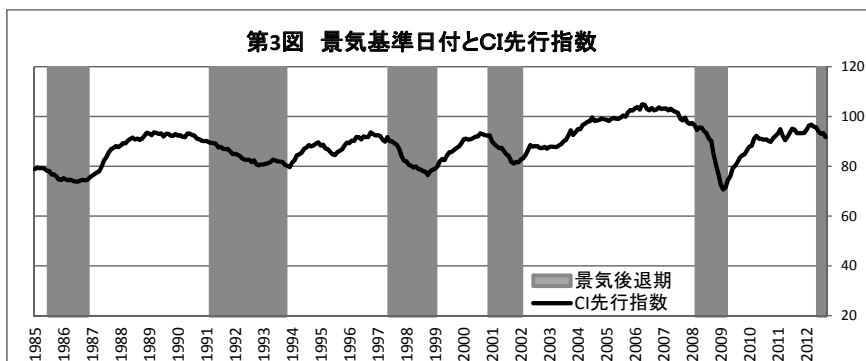
3図です。この第3図から、C I先行指数は確かに景気基準日付に先行していることがわかります。

ここで、第6循環(いざなぎ景気)以降の景気基準日付に対するC I先行指数の平均先行月数を求めますと、景気の谷に対しては4・2ヶ月、山に対しては6・4ヶ月C I先行指数が先行している事実が浮かび上がります。つまり、C I先行指数は景気の高や谷に対して平均で約半年先行していることとなります。

このように見てきますと、NEEDSなどの計量経済モデルを用いた予測では、GDP成長率予測が、与件となる為替レートや金利などの外生変数や政策変数の前年度の予測値に依存するため、GDP成長率の予測値が前年度の実現値に引つ張られてしまい、予測パフォーマンスが良くありません。言ってみれば、今年度の経済的条件を前提に次年度を予測しているためパフォーマンスが悪くなっているのです。その意味では、経済予測としては望ましい結果が出ていないと言えます。おそらく、この点については、予測を行っている当事者も気づいていないがどうしようもできないのだと思います。

他方、C I先行指数を用いた景気の転換点(谷や山)に関する予測では、平均約半年の先行期間を伴いながら、転換点の予測にある程度成功していると言えます。これは、C I先行指数自体が過去何十年もの経験から改良を重ねて作られてきた指標であるからと考えられます。しかしながら、このC I先行指数による予測も、景気の転換点といった2・3年に一回発生する

出来事を予測するものです。つまり、一年ごとのGDP成長率の予測のような短期的な予測ではなく中期的な予測と言えましょう。その意味では、経済予測は中期的にはかなり有効ですが、半年後などの短期の予測に関しては、現在のところ、必ずしも正確である保証はないと言えるでしょう。



座談会 エコノフォーラム

「日本の農業について」



山田浩雅さん
三菱商事



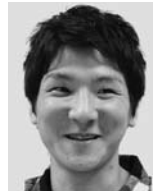
齋藤信也さん
フィデア総合研究所



東田啓作・教授



武智英里子さん
3年生



中村早利さん
3年生

東田 本日は、ゲストとして、私がお世話になった方お二人にお越しいただきました。三菱商事株式会社にお勤めの山田浩雅さんと株式会社フィデア総合研究所にお勤めの齋藤信也さんです。どうぞよろしくお願いたします。山田さんは、私が大学時代ともに学んだ友人であり、齋藤さんは、前任大学での教え子にあたります。

本日の座談会のテーマは「日本の農業について」。今話題の日本の貿易の自由化は、日本の農業が抱える課題や問題のほんの一つです。流通制度や農地制度など、貿易よりも重要な課題は存在しています。そういった問題の背景にあ

る事情をお二人にはお話いただきながら、これらの日本の農業について議論したいと思えます。

山田 はじめまして。三菱商事の山田と申します。一昨年の夏に6年の任期を終え上海駐在から戻ってまいりました。現在は新興国、特にインドネシア進出の仕事をしております。

齋藤 はじめまして。フィデア総合研究所の齋藤です。東田先生は私が学生（福島大学）時代のゼミ担当教官で、当時から大変にお世話になっております。卒業後は大学院に進学し地域経済について研究活動を続けておりましたが、修

今回の座談会は、「日本の農業について」です。今号の特集「モラルの功罪」でもそうであったように、一般的に正しいと思われることを、もう一度客観的に考えてみることは大切です。「日本の農業を守るためには、農産物貿易の自由化は避けなければならない」と聞いた人は多いと思います。でも、「日本の農業を守るためには、農産物貿易を自由化しなければならぬ」と聞いたら、皆さんはどう思うのでしょうか。社会科学において絶対不変の正解はありません。日本の農業を守り、強くするための正しい処方箋も時とともに変わります。そしてなにより大事なのは、貿易の自由化は、日本の農業が抱える課題・問題のほんの一つの側面にすぎないということです。流通制度や農地制度など、貿易よりも重要な問題が存在しています。個人が自分にとって正しい判断をしていくためには、多くの事実を知らなければなりません。今回の座談会もそのきっかけになれば嬉しく思います。ところで、座談会冒頭より、話がそれてしまい、日本のお菓子についても議論しました。そちらについても興味を持ってもらえれば幸いです。

士課程修了とともに現在の会社に入社しました。大学と環境は違いますが、東北をフィールドとした調査や研究活動をしています。

東田 また、本日は、私のゼミに所属する学生2名にも来てもらいました。お二人は研究活動を通じて農業に関して強い問題意識を持っています。

武智 経済学部3年生の武智英里子と申します。グループ研究で農業の生産性について研究を進めてきました。卒論では、農産物のブランド化について研究しようと考えています。

中村 経済学部3年生の中村早利と申します。

武智さんと同じグループで研究を進めてきました。卒論では、水産資源管理と漁業の生産性について研究をする予定です。

●日本のお菓子は美味しいのに

山田 日本のお菓子を作るレベルは高い。安く作ることができ、味もおいしい。

武智 世界のお菓子に比べてもですか？

山田 同じ費用で作るとなれば、日本と同じものはなかなか作れません。だけど、日本のお菓子は海外では全然とはいわなくても、あまり浸透していない。

理由の一つには、日本の会社全般に言えますが、これまで日本には、1億2千万人の人がいて市場が大きかった。どの会社も生存できるだけの市場があった。わざわざ海外に打って出なくてもよかった。もう一つの理由は、作るのには手だけ、売る力が強くない。これは日本企業全般にいえます。販売というか、マーケティング力がもっと必要かなど。例えば、中国では、韓国や台湾のお菓子といっしょに日本のお菓子が売られています。残念ながらあまりシェアを取っていません。日本国内を軸とした市場でやっているため、中国でこれだけやるぞ、というような体制になっていない。日本の人口が減る中で、高齢化も進んでいる。メーカーが生き残るためには、欧米というよりも新興国に打って出ないとしんどい環境になってきました。

武智 費用や製品差別化などの課題はクリアー

できていることが分かりました。一方で、需要をどうつかむかという点については、課題が残されているということもわかりました。経済学の教科書を応用させて考えると、市場の潜在的な規模と消費者の嗜好とを正確につかんでいくことが大事なんです。できれば、具体的な事例が知りたいです。

●新興国を視野に

山田 私はインドネシアチームにいるので、インドネシアの話します。現在は一人当たりのGDPがやつと3500ドルを超えたぐらいですが、年率で6%以上の成長があります。このままいくと、18年後の2030年にはドイツを、30年以内には、総額で日本を抜くともいわれています。ということは、アジアに今の日本のような規模の市場がもう一つできてしまうわけです。インドネシアだけではなく、中国はもっと大きくなっています。今、商社に求められていることは、日本の企業だけではなく、海外の企業も含めて、その成長する市場を取り込んでいくことです。

中村 単純な質問ですが、インドネシアは国の大きさは日本と変わらないのでしょうか。

山田 面積は大きいですが、インドネシアの面積は約192万km²です。日本が約37万km²ですから、約5倍です。インドネシアは、島が1万8000島ぐらいあり、人口は2億4000万人。ちょうど日本の2倍です。それから、島の一番東か

ら西まではアメリカよりも長さがあって5000キロ以上です。

中村 日本と同じぐらいの大きさだと思ってきました。日本の市場が小さくなってきているときに、なぜインドネシアに行くのかなど。ロシアなど国土の大きなところに行けばいいんじゃないかと。

山田 ロシアは日本と似ていて、今後、人口が減っていきます。新興国の定義は色々ありますが、ある成長段階にある国を一般的に新興国と呼びます。特徴は若い人が多いこと。平均年齢で、日本は今40歳を超えています。インドネシアのような国は20歳台です。フィリピンもそうです。この人たちは50〜60歳ぐらいまでずっと消費するわけです。経済用語で人口ボーナスという言葉があって、この期間は爆発的に消費が伸びることが読めます。それに対して日本やロシア、韓国はこれから減って、高齢化していきます。人が減る以上に、消費が弱くなります。

東田 それは単純にその世代の厚みが少ないということですね。

武智 単純に人口が多い、イコール市場規模が大きいということでもない。お菓子を消費する世代が鍵を握っているんですね。

山田 そうです。

武智 とところで、そんなに島が散りちりだったら売りにくいということはありませんか。日本みたいにぎゅっと固まっていないから。

山田 おっしゃるとおり。日本はさすがという部分があり、北海道から沖縄までほとんどの方が同じような生活をしています。お腹が空いた

らコンビニに行くような同じパターンの行動をとりますが、インドネシアは島格差が激しい。例えば、ジャワ島は小さくて13万km²しかなく、日本の3分の1の大きさですが、人口の半分以上の1億4400万人が住んでいます。日本の3分の1の場所に日本人よりもたくさんの方が住んでいる計算です。この島を中心に発展しているというイメージです。

武智 インドネシア全体に均一にやるのではなく、ジャワ島メインでやっていくのですか。

山田 島が多すぎるため、いっぺんには無理です。島によって格差はありますが、それも成長の一つのモデルです。中国は沿海部から集中的に投資して、ある程度の水準になったところで内陸に少しずつ投資を振り分けた。その国のやり方があり、同じようにやってもうまくいかないこともあります。

東田 日本も最初は東京とか大阪から、太平洋ベルトというところからでした。

武智 懐かしいですね。太平洋ベルト。

東田 人口は東京の方に移動させ、資本は地方に持っていくことに標準化していく。

山田 隣のタイにしても、各国何に重点投資をして成長していくかという成長モデルが違います。総じて東南アジア諸国は、軌道に乗り始めました。マレーシアは相当発展しています。中国もビックリしますが、沿海部は見た目は日本以上。高層ビルの数は上海だけで、日本の全高層ビルの2、3倍といったレベルです。



山田 浩雅 (やまだ ひろまさ) 三菱商事株式会社 生活産業グループ 新興市場事業開発ユニット インドネシアチームリーダー。日本で成功したビジネスモデルを新興国の実情に合わせて展開。

●生産性から見た日本の農業について

東田 話題を変えましょう。中村さん、武智さん、これまで書いてきた論文の内容をコンパクトに、説明してください。

武智 日本は農地が狭いため、限られたところでいかに生産性を上げていくかということが大事という話になっています。

中村 兼業農家が大部分を占めているとコストがかかるため生産性が低いと言われています。そこで、企業なら大規模農業をして、生産性を上げることができるのだろうかという点に焦点を当て、回帰分析を用いて研究を進めています。

武智 一農家あたりの農地面積が広くなれば広くなるほど生産性が上がるのではないかと、説明変数の一つに農地面積を、五大都市からの距離が近ければ近いほど輸送コストが低いので生産性が高いのではないかと、二つ目の説明変数に五大都市からの距離を、また、地域の誤差をなくすために、平均気温も説明変数として用いて、産出額と収穫量を回帰分析したところ、有意な結果ができました。

齋藤 全部の変数が有意に出ましたか。

武智 出ましたが…

齋藤 そのときの生産性というのは、皆さんはどういうイメージですか。収量を増やすのか、農業法人の収益を増やすのか。

武智 収量です。コストの面はうまく地域のデータが持つてこれなくて…。産出量や産出額を追っていました。

東田 そこはすでに指摘を受けていますよね。私もデータが入手しやすいということで、単位面積当たりの生産量と単位面積当たりの農業収入、売り上げでやらせてきました。本当は費用を見なければいけない。さらに研究を進めるのであれば、費用のデータを集められればいいという話はしています。

齋藤 少し歴史的な話をしましょう。これまでは農業の生産性を問題にする場合、一般的には単位当たりの収量を増やすことが重視されてきたと思います。というのも、終戦直後に外地から600万人ぐらいの方(当時の人口の約8%に相当)、が一気に日本に戻って来ることになったので、食糧をどうやって増やすのかということとは非常に重要な政策課題であったわけですね。

また、戻ってくる人々の雇用の場をどうやって確保するのかということも大きな課題でしたので、農地の解放を行って、それまで集約化が図られていた農地を一気に細切れにして、ほとんど無償というかたちで渡したわけです。つまり、戦後を振り返ってみると、我が国ではとにかく収量を増やすことが一番重要だったわけですが、ところが、現在は、収量だけではなく、収益をどうやって改善するのも大切になってきています。農家が国際化の波にさらされるなかで、より安定した経営を行っていくためにも、一戸一戸の農家の収益力を強化し、収益面では諸外国と比べても遜色ないレベルにしていく必要があると思います。

中村 現在の方向性とは全く逆だったのかと思うと、不思議な気もします。でも当時の状況では、こうすることで増産が可能になったということなのですね。

武智 なるほど。制度や慣習の条件によって、望ましい政策が変わってくる。それから、時代背景によって、政策の目的変数も変わってくるということが理解できました。

齋藤 先ほど山田さんから面白い指摘がありました。日本のお菓子はおいしいです。私の子どもも、みんなおいしいと言っていて食べています。私は山形から来ました。山形といえば米、サクランボ、ラ・フランス、ブドウ、メロン、柿、スイカということ、4月から12月ぐらいまで一年間果樹から畑作まで、色々なものがとれます。見た目もきれいです。それは皆さんが、形の悪いものとか、虫食いがあるものを選ばない

結果として、そういうものを作ってきたということなんです。農業試験場が各都道府県にあって、そこで品種改良をしながら、例えばキュウリが曲がらないようにまっすぐに作るための不断的努力をしている。サクランボでも糖度が20度とか、砂糖をそのまま食べているようなものが見つかるから、その技術力はものすごい。それは、工業分野、農業分野でも同じだと思います。

ただ、山田さんがおっしゃるように、それをどうやって売っていくのかという視点が今までは弱かった。貿易の自由化によって、競争力の高い農産品が日本に入ってきたときに、どうやってよりおいしく、安く、いいものを提供できるかということがますます重要になってくる



齋藤 信也（さいとう しんや） 株式会社フィデア総合研究所研究開発グループ主事研究員。主に自治体から受託する調査業務を担当するほか、各種政策提言活動を実施。

はずです。品質や鮮度も含め、消費者にとっても魅力的な農産物を提供していくことは、これからの挑戦だと思います。

中村 今はまだ具体案のようなものは出ていないですか。

● 6次産業ビジネススクールと人材育成

齋藤 ちょうど3年前から山形6次産業ビジネススクールというのをやっています。今、山形の農業が本当に厳しい状況なんです。東北というところ、山があつて、木があつて、畑があつて、さぞかし農業生産が豊富な地域なんだろうなというイメージをお持ちだと思います。ところが、20年ほど前から比べると出荷額は半分以下。それを作っている、生産者、米農家は、平均65.8歳です。おじいちゃん、おばあちゃんが農業の若手といわれている。先々考えても、向こう10年、東北の農業はほとんどなくなってしまうのではないかと危惧感があります。

そうしたなかで、6次産業を始めたきっかけは、人の育成が大事だと。人の育成というのは、どういう人を育てなければいけないのかというときに、今までのように、ただ作るだけの人ではないと。山田さんがおっしゃったように、販売、販路、マーケティングを分かった人が生産もやらなければならぬ。プロの生産者に対して少し経営のノウハウも身につけていただきましょうということ、山形大学や農業大学と連携したり、商社の方などにも来ていただいて

話をしてもらっています。どちらかという出口から、売ることから考えてものを作りましょうというところに力を入れてやっています。

中村 売るところを考えてということですが、そういう意味では、いま参入している企業さんは、そういったノウハウは蓄積してきている。そういった農業をしていない人たちが参入してくるより、農業の方からビジネスの力を付けていった方がいいということですか。

齋藤 逆です。6次産業ビジネススクールに来ていただいている方は、農家の方は少なく、食品会社や観光関係の物産館の方、お土産を開発している方なども多く、その方たちとのコラボレーションの場でもあると思っています。1次産業、2次産業、3次産業、足しても掛けても「6」ということで6次産業になっていますが、どちらかというと川下の食品会社さんとかサービス、商業の方から、今の農業のあり方を変えようという発想に立って、そこでより皆さん方が買い求めやすい農産品だったり、食品だったりというものを考えて、それにどうやって地域の農産物をつなげられるのかという発想で考えています。

中村 6次産業ビジネススクールは、全国的にも同様のものが増えてきているのでしょうか。
齋藤 数というのは私どもも把握はしていませんが、スタートは早かったと思います。九州や神戸市からも視察に来ていただいたりしました。そういう意味では全国各地から関心を持っていただいています。裏を返すと、色々な地域で、こういったものがなかったということ



武智 英里子 (たけち えりこ) 経済学部3年生、東田啓作ゼミ。ゼミに入ってから1年半、農業と食糧に関心を持ち研究を続けている。今後、農産物のブランド化を研究予定。

で、6次産業に関心の高さを感じます。

中村 6次産業は、農協とどういう関係でやっていくのでしょうか。6次産業があれば、農協はいらなくなるんじゃないでしょうか。

東田 この点は大事ですね。ちなみに、農協ではなくJAですね。農協にはいろいろなタイプがあります。

齋藤 販路を考えたときに、これまでの最大はJA系、農協系です。それから市場を通す流通経路があつて、そして大手量販店系、最近では直接販売系のルートも増えてきました。農協系、大手量販店系、市場系に加えて、第4の直販系の農家をどうやって増やすかだと思っています。従来は、物流コストがかなりかかっています。その結果、純粋に農業だけで食べていけ

ない農家も出て離農につながってしまふ。言い換えれば、農業に若い方たちが魅力を感じて飛び込んでこない。農業で儲けるために、選択肢として直販系、自分で売るといふ道もあるということを教えてください。

●変化には痛みが伴うが…

東田 客観的にいうと、変えるためには絶対に誰かが傷んでしまう。それは農業に限らず、何でもそうです。言い方は失礼ですが、東北でこれをやっていくときに、誰も傷まないかたちで進めようとする、結局、火花を打ち上げて、10年経つてみるとあれは何だったのだろうとなる。その痛みを受けるのはたぶんJAであり、今農業をやっている60〜70代の方だと。そういう方たちは覚悟できているのでしょうか。

齋藤 難しい質問です。日本の農業をよくしていくためには、競争にさらされないとよくないという声もありますが、経済原理だけを追求しても最適な解が得られないこともあるのではないのでしょうか。例えば、米を作るうえで一番大事なのは水の管理です。水の管理をどうやるかで、米の出来不出来に大きく影響がある。今は水路の掃除を地域のおじいちゃん、おばあちゃんたちが出てきてやってたりしているわけです。草刈もやってくれる。これは、農村という共同社会のなかで米生産が維持されているからこそなせる技です。それが突然、東田農業株式会社が出てきて、水の管理をするとなった時に地域

のおばさんたちを雇ってコストに合うかといったら、絶対にペイしない。そうなると、東田農業株式会社が所有していない山のすそ野の方の水路の管理は一体誰がやるのかと。貿易の自由化をしたときに、そういったことも含めて、生産性を上げていけるのか、まだ誰も自信がないんです。

もう一つの問題は、土地の制約。簡単に集約しましょうという声が出る。圃場整備されて田んぼの大きさも大きくなってきています。が、地域全体に目をやると、まるでオセロのように作付けしているところとしていないところがばらばらに分布してしまっています。一気に集約して規模を大きくしようとしても、土地の所有者と相対で交渉しては時間も手間もかかる。

東田 農地の保有税を、ずっと高くすればみんな手放すでしょう。という話もあるけど…。

齋藤 それが難しい。先祖代々受け継いできた土地です。80歳ぐらいのおじいちゃんも、なんとかしなければならぬと思っている。ただ手放したくない。そういったときに、50歳代ぐらいの若い担い手の方が出てくると「おらいの土地でも何とか作ってけんねが（我が家の土地でもなんとか耕作してほしい）」みたいな話になる。実際、6次産業ビジネススクールに来ている元農水省のキャリアの方がある町で就農したんですが、当初の計画では3年間で5ヘクタールぐらい広げられればいかなという話でしたが、うわさが広がり、うちでもやってくれという引き合いが多く、結果的に約30ヘクタールま



中村 早利（なかむら さとし）経済学部3年生、東田啓作ゼミ。グループ研究で、農業の研究をしている。卒論では、食糧つながりで水産資源を研究の予定。明るく声も大きい。プレゼンテーションが得意。

で規模が拡大しました。でも、自分が耕している農地はバラバラに分散しているわけです。こっちでトラクターを入れていたのが、あっちの遠くまでトラクターを入れなければならぬとなる。その移動コストや手間を考えると海外に太刀打ちできない。

中村 土地に対する意識がすべての国で強いのであれば、同じような問題を抱えていると思うのですが、たとえば中国はどうなのでしょう。か。

山田 土地は国有ですが、中国は中華人民共和国が成立したときに農地解放で地主をなくした。当時は9割強が農民だったから、農地をみんなに払い下げましたが、一人当たりの農地面積は、例えば、上海の隣の江蘇省の農民の平均農地は日本よりも小さいんです。

● TOPICS

山田 中国も自由化でかなり打撃を受ける国です。トウモロコシも小麦も北米にはかなわない。日本の農産物が自由化で負けるとか勝つとかいう話がありますが、農産物は一種類じゃないので、勝てるものもたくさんあります。日本の農家が考えている市場は日本国なんです。北米とか南米とかと比べて圧倒的に有利なのは距離が近いということ。例えば、絶対に北米や南米が日本に進出できない分野というのは生鮮野菜です。鮮度の問題があります。細かく言えば、キャベツやレタスも、穀物に次いで需要のあるジャガイモなどのイモ類もたない。こういうものは自由化しようが何をしようが、入ってくるのは難しい。新米が入荷しましたとあって、お店に何日間置かれていくか。あれは最長2週間くらいです。2週間過ぎたら店頭からなくなる。そういう世界です。そういった意味では、ブランド化というか差別化は可能で、農作物一般で全部負けちゃうことは絶対にありません。また、閉じちゃった場合に日本がやっていけない商品もいっぱいある。例えば、トウモロコシはほぼ100%輸入品。トウモロコシはもう買いませんといったら、日本の食が回らない。これは人が食べるよりも飼料が中心で、日本の神戸牛や松阪牛はみんな北米のトウモロコシを食べて育っています。自給自足できているのは米と野菜類など、鮮度の高いものです。代表的な日本食である豆腐や納豆もほとんどが輸入原料に

頼っています。こういうものはいまさら自由化しようがしまいがどうか、もう入ってきていますので、TPPに入ろうが入るまいがあまり影響は受けません。北海道のものが好きな人は北海道のものを食べます。

武智 アメリカは何となくイメージがわきますが、例えば、中国は農業生産性を上げるといふ努力はしてきているのでしょうか。

山田 中国は戦後ほとんどが農民でしたが、いまは都市の人口が農民を超えました。だから農業の観点からというよりも都市化がどんどん進んでしまっていて、中国も農業は衰退している。

中国も食糧安全保障を意識しています。戦後自給率100%でやってきましたが、ここに来て成長の速度に農業生産が追いつかなくなりました。いくつかの商品はあきらめてしまった。例えば、大豆も10年ぐらい前まで輸出国でしたが、今は輸入国で断トツです。5年、10年ぐらい前までは日本が最大の大豆の輸入国だったんです。現在、日本の大豆の輸入は300万トンを超えています。中国は昨年の大豆の輸入が一桁違つて5800万トンでした。日本の10倍以上を輸入している。それこそ10年前までは、大豆の国際価格は日本が決めていた。日本が何トン買うかで価格が落ち着いていた。今相場を決めるのは中国です。中国が買わなくなったら、日本は安く買えるということで、食糧の安定調達という意味では、日本は工夫をしなければならぬ時期にきています。トウモロコシなどはいまでも世界で一番輸入していますが、徐々に一番じゃなくなってきている。実はトウモロコシ



東田 啓作 (ひがしだ けいさく) 教授、研究テーマは資源と貿易。現在は、循環資源貿易と水産資源管理を中心に研究。

はほとんど北米から買っていて、自然災害のときに打撃を受ける弱い仕組みになっています。トウモロコシや小麦、大豆は実は世界中でつくれますが、北米のトウモロコシの競争力が高すぎるため、他の国が輸出用に作っていないだけです。世界の農業は、日本よりもビジネスライクで、政府が決めるというか、やっている人たちが企業マインドを持っていて、高く売れるものをつくるという傾向にあります。ですから、商品によっては作っている地域が偏る傾向にはあります。

東田 それは先ほど出た6次産業化と重なっている感じですね。日本の米でも、生産調整をやめて、これまで減反で生産をやめていた土地でも自由に作っていいよといって、自由に作りは

じめれば、たぶん価格は下がるけれども、逆に輸出商品になるんじゃないかと。中国はこれから確実にコメの輸入国になっていくので、そこをなぜ狙わないのか不思議です。そういう感覚を現場の人は持っていますか。地域の研究所とかが、そういうことを支援しようとしている戦略があるかが聞きたいです。

齋藤 減反に協力する否かは別としても、規模拡大や輸出志向の強い積極的な農家はたくさんいます。ただ、農家の高齢化が進んできているなかで、積極的な農業を展開できる若い担い手が少ないのも事実です。弊社は地域金融機関のグループ会社ですが、銀行では販路開拓などの面で積極的に支援活動を行っています。

●TPPがもたらす日本への影響とは？

齋藤 先ほど山田さんの話のなかで、海外のものが入ってきたとしても、日本の農産物にはあまり影響はないのではないかとのお話がありました。例えば、山形の米を見たとき、年間約37万トン生産しているうちの7割が実は業務用米です。一般家庭用として出されているのは3割ないぐらいです。アンケート調査を一般消費者の方に対して行ったところ、輸入米が入ってきたとして、価格が仮に1割安くなった場合、3割安い、5割安い、8割安いと設定したときに、何割安くなったら国産米から外国産米に切り替えますかと質問したら、ほとんどの一般消費者の方は切り替えませんと。多少安くなった

分、海外産米は買いますということだったので、おそらく家庭用という意味では影響はないでしょう。ところが、問題なのは7割を占める業務用米です。業務用米を使っている先はどこかというところ、例えば、ファミリーレストラン、いわゆる外食産業、コンビニも含めたところ。そういうところに話を聞きに行くと、安い方を買いますよと。一般消費者に比べて価格弾力性がものすごく高い。そうなったときに業務用米を作っている農家の方々の受ける影響はおそらく大きいのではないかと思います。

山田 TPPを締結し打撃を受けるのは米の業務用だと分かったら、そこを聖域として交渉をすればいい。聖域なき関税撤廃というのはありえなくて、アメリカも絶対に入れないものがあります。例えば、ピーナッツや砂糖。砂糖はアメリカにとってはすごくセンシティブな商品で、砂糖そのものを入れるというのはおそらく不可能だと思います。TPPに加盟しようとしている国々それぞれの事情があつて、聖域ゼロは難しいです。では、日本は何？となったとき、日本で関税が高いものは、こんにゃく、米、でんぶん、小豆、バター、小麦。日本の平均関税率は21%ぐらいです。関税が高い商品を入れて21%ということは、ほとんどの関税は10%を切っています。一部商品を例外品目として交渉で守ればいいのです。関税だけではなく制度面の解放などTPPは簡単ではないのでしょうか。

日本は通商国家です。輸入してきて付加価値を付けて輸出して食べていかなければならない

んです。だから輸出が止まってしまうと、国内の人口が減っていくなかで、国が成長しない。ここで、他国に3%でも、5%でも関税をかけられてしまうと、世界の激烈な競争で圧倒的に不利になってしまう。交渉もしないのは本当にもったいない。TPPのかたちが決まったあとに入っても、オリジナルメンバーで決まっていまいましたからということになると、入っていないというか、完全に不利になります。

東田 私ほもつと極端で、米も自由化でいいと思っと思っています。少なくとも、先ほどおっしゃっていたぐらいまでのスタンスは認めるべきだろうと。その交渉に入るところまではと思います。**齋藤**むしろJ Aは地域の実態を知っているわけですし、そういう交渉をしなければならぬということをはっきり言うべきでしょう。なんとなくTPP、黒船、ちよつと怖いなどいう、センチメンタルなところで反対しているだけのような印象です。だから、守るべきところはどこかなのいうところをもつとはっきりさせて戦略的に交渉しましょうと言ってほしいです。

山田 交渉が弱いのでしょうか。韓国の農産物の関税平均はたしか約40%で日本の倍です。その国がアメリカとFTAを結べるといのは、どれだけ例外項目を引き出したりしたのかと。その辺りはしたたか。TPPにも入りたがっている。国を挙げて、農業だけじゃなくてほかの国に打って出ようということ、南米の土地を買うとか。南米で東京23区分ぐらいの土地を買って、そこでつくったものを全部韓国に持つてくる。そういった意味ではもう韓国の領土で

すよね。日本のなかでもそういう意見はあるかもしれないけど、韓国はアクションが早い。やつてみようみたいなところがあつて、日本はいつも後手後手に回ってしまう。やっぱり利害調整にすごく時間がかかってしまっていて、トップダウンの政治ができていない。

東田 先ほどの韓国の農地買収の話のように、農家、農業生産法人が他国の土地での農地を経営するなどの経営感覚が必要です。利益は誰かというところ、日本企業が持っています。製造業と同じように考えて動けばいいと思います。

齋藤 米だつて、これだけおいしいものを作る技術があるのなら、それをきちんと法人化したかたちで、現地でもつと大きなところでつくらせて収益を上げて、それを国内に還元させるというやり方も当然できると思います。その辺りはやっぱり商社の方と地域と連携できる場所かなと思います。

東田 商社はやつていいと思います。米は。**山田** 法律上難しいことも色々あります。ただ、日本の米は美味しいですから、出ていることは出ている。台湾や香港、シンガポールは、とにかく世界中から農産物を買ひ付けるんです。日本からも実際に数十万トンぐらいですがいい値段で売られています。

商社は穀物類を中心に大量に日本に輸入してきていますが、だからといって日本の農家はどうでもいいと思っっているわけではありません。むしろ日本の農家を生かすためにどういう組み合わせが最適化かを考えている。持つてこなくなつたら、日本自体が立ちゆかなくなる。日本

のなかでの自給自足をどうやって、農家がやっていけるようになるのか。その先に日本が打って出るにはどうしたらいいのか。長期的にみれば、日本は必ず為替は円安になっていき、あるところで輸出競争力が付きます。黙っていてもいまの量よりも少しずつ増えていきますが、もっとビジネスとして日本の作物がどうやって海外で勝てるのかということを考えている方もいます。今はあまりにも規模が小さすぎるのと、やっぱり農家の人たちとの連携がまだまだできていない。そのため、構想はあったとしても、戦略戦術に落とし込むところにはいっていない。

●日本の農業の戦略

中村 日本は保守的な国ですね。特に日本の農業に関しては、先ほども言われていましたが、生産したら終わりという考えが強くて、いいものを作っているけれども世界に取られてしまっている。農業の生産に関して、もっと経営意識を持つために6次産業をやってほしいと感じました。

山田 日本は保守的だというのは、「日本」が主語じゃなくて、「日本の農業」が主語です。日本は世界レベルの企業が山ほどあります。例えば、トヨタやキヤノン。有名な消費材の企業もあれば、コマツや東レといった材料を作っている会社や業者しか知らないような会社も山ほどあります。世界に通用する企業はあります。

今の日本は、強い分野と弱い分野が極端に分かれてしまった。農業に関しては、今までは国内の大きな市場に甘んじていた部分があるのかなと。

これからは、6次産業スクールのような取り組みは重要だと思うし、これが大きな流れになって、商社なんか巻き込むようなかたちで戦略として組み立てることができれば、面白い話なのかなと思います。

齋藤 山田さんのような方とつながりを持っている、中間コーディネーターのような人物が地域に必要だと思っています。やっぱり農家は生産することに對してもすごい経験やノウハウを持っている。そのような農家をどうやって集約して、山田さんのような方につなげられるのかという取り組みが必要。個々の農家がバラバラに商社とつながれるかと思ったらそうではありません。

山形の庄内地域という沿岸部に、ある米商社があります。そこの方がいまそういった取り組みをされています。地域に点在する田んぼは田んぼでしかないのです、そこでつくっている米を買い取って、ある程度、ポリariumを確保して商社の方につなげて、米を輸出している。それが農業法人という株式会社ができるまでの過渡期のような気がしています。そういうイメージの会社が地域にできて、商社とつながって、例えば、国内の関西方面に売れるとか、あるいは中国の上海で売れるというような道筋がついていくと、もう少しいまの農業は変わってくるのではないかなという気がします。

山田 一例ですが、何か制度的な仕組みや、日本のものを輸出する動機、こうしたら輸出したいという仕組みなど、米に限らず何か作ってほしいのかなど。

齋藤 いま米を輸出しようとする、事前に輸出用米だということで、作付けの前に申請しなければなりません。これはかなりリスクがあります。震災があったときに、これは輸出用米だということで作付けをして、もう出荷を待つばかりだとなったときに原発の問題があって、中国から入ってはいけないということになった。輸出用米だとして作っていたものが全部パーになった。ようやく国の方でも輸出を言い始めていますが、まだ制度がそれに追いついていない。

東田 輸出を特別なものと考え、こと自体がそもそも間違っていますよね。マーケットは一つだと考えればいいだけの話だと思いますね。

●消費者目線の情報とは 農家を守ると農業を守るは違う

武智 知らないことが多すぎです。そういう事実って世の中に出ていないですよ。学者さんとか専門家の方は知っているけれども、消費者レベルにまで情報が落ちていきません。

東田 本屋さんに行くときTTPPはこんなに怖いという本がたくさん出ています。『TTPPは日本を滅ぼす』というような表現で。マスコミはそういう切り口が好きです。客観的にはこうかもしれないというような話、こういう条件だと

駄目だけどこういう条件だといひよねという話は、消費者は飛びつかない。何が危ない！というコピーがあると、買って読んでしまう。だから冷静な本質的な話が見えてこない。

武智 先生がお米は自由でいいというのはなぜですか。今、お米は制限を付けるべきだという意見もあります。

東田 武智さんはどう思いますか？僕が今言ったら、ああ、そうなんですかで終わるでしょう。
武智 今の話を聞く限りは、業務用が8割を占めるのであれば、制限を守らないといけないかなど。日本はお米が強い。その8割が危険にさらされるのは危ないかなとは思いました。

東田 なるほど。国際経済学では、機会費用とすることを考えます。それを守るために、どれだけ他の産業に投入されるはずの土地と資本をあきらめなければならぬのだろう、と考える。学生によく言うのは、今の農家を守りたいのか、今の日本の農業を守りたいのかどっちなのと。今の日本の農家を守りたいなら、それは社会保障政策になるので、どれだけコストがかかってもし守りましょうということになる。でも、農業を強くしたいのであれば、現在いるすべての農家を守るべきではないと思うんです。現状の大部分の農家を守っていたら日本の農業は強くない。生産性の高い農家が生産を拡大し、また生産性が高ければ外からでも入ってこられるようにするのがいいのではないかと思います。
中村 経済学という競争原理を導入しながら、強い農業を作るということでしょうか。
東田 農業だけじゃなくて、今の日本の社会の

仕組み、いろんなところで全部だと思えます。既得権益で固まっています、動きが取れない産業が多い。

山田 日本の全産業で国際的に絶対負けないぞというの、たぶん2割とか3割ぐらいで、自動車、工作機械とか決まっています、残りは決して世界で伍していける競争力があるわけではない。それをいままでは守れたんだけども、この仕組みがいま限界にきている。

東田 大学もそうです。

山田 大学？

東田 大学も、昔のままの制度が根強く残っている。今のままでは、日本の大学は世界の大学と張り合うことができない。例えば、韓国、中国では、教員は、2、3年間論文を書かかない状態が続けば解雇になるところがあります。日本以外は基本的にそうなりつつある。クビにならなくても、少なくとも給料は減る。基本的に日本の大学の世界はぬるま湯です。

だから、農業のことをあれこれ言うけれども、実は自分の足元のことを最初に言わなければならぬと思います。だから、農業だけではないです。日本が強くなるためには、一回既得権益を壊さないといけないだろうと思います。農業はまだ競争力があると思う。80年代、牛肉とオレンジを自由化するときに、日本の畜産農家とみかん農家は壊滅するといわれていた。たしかに利益幅は減っているし、やめていった農家もいるけど、実際、壊滅していない。だから、そんなに心配する必要はないような気がしています。

山田 牛肉なんかは、どちらかというとブランド化を進めていて、松阪牛は、東南アジアではよく知られています。あれは成功事例だとは思いますが。

東田 みかんにしても、北米のスーパーに山積みにして日本の温州みかんが売られている。

武智 意外。オレンジしかないイメージでした。

齊藤 農家の所得構造を見ると、専業は別として兼業農家では、おじいちゃん、おばあちゃんがたんぼと畑をやって、小遣いかせぎをしている。その下の私ぐらいの世代が近くの工場に行つてサラリーマンをやっている。こういう兼業農家が多すぎる。農業を生業としてやっていない。そういう意味ではプロ意識がないといわれても仕方がない。いっそのこと、自由化したときに、そういう農業のあり方ががらりと変わって、すべてがプロフェッショナルになったとき、おそらく生産性や出荷額も反転するときがくると思います。そこまでどういふふうに制度を変えて、そこで出てくる調整の痛みをどのようにしていくのかを示してあげないと、いざ変わらなさいといわれても、それに対する恐怖心というか、恐怖感のようなものが先走つてしまう。そのため抗議行動しか起こらない。政府はそういうところをきちんと言つてあげるべきです。
東田 大学もそれぞれが言いたい放題言っている。日本の農業、日本の農家という世界が大学の世界に似ているなと改めて思いました。個々の零細農家が、大学でいうと個々の教員みたいなことになる。

●進む小売業の世界展開

山田 日本の純国内産業のなかでも外に出ていく業種と、ずっと国内とどまっている業種とはつきりしてきました。典型的なのは小売業です。いまインドネシアはローソン、セブンイレブン、去年はファミリーマートも入ってきて、この3つのコンビニは東南アジア中で競争を繰り返しています。インドでも出店準備をするとか、ミャンマーでも検討するとか、ベトナムはどうするのかと。20年ぐらい前までは、どこも外に出ていかなかったのです。

●安全と安心は違う

齋藤 日本の食品の安全性は高いと思います。農業にしても、生産のときには登録農業を申請する。農業普及指導員のもとで農薬カレンダーを作って、農家に個別に渡して、この時期はこういう農薬を使いなさいと、徹底した指導がある。出荷も、生産者団体で自主的につくった団体が、出荷時のサンプルチェックで農薬が残っていないかチェックする。また、食品衛生研究所で実際に物流に乗った農産物のサンプルチェックをしていて、どれだけ残留農薬があるのかということまできちんとやっている。食品に対して安全だと思える。それって強みだと思っっています。そういう仕組みや制度も含めて、日本のやり方で作ったものを売れるようにする

ためにはどうしたらいいのかなど。こんなに安全なものを作っている。海外でも売れると単純に思ってしまうんです。

武智 日本人というのは安全にこだわります。だからそれを売りにしたら、いいかと思うけれども、海外の人はそこまで安全を必要としてるんでしょか？

山田 例えば、中国の基準と日本の基準は違います。飲み物の菌の話で言えば、菌数の管理について日本はかなり厳しい。日本の会社は、海外でもその基準に合わせてつくりまます。ところが中国は中国の基準に合わせて作ります。もちろん基準を満たしたものは安全です。それで安くても多い。どちらが売れるかといえば、後者です。国によって安全基準は違います。日本独特の基準もあるし、中国とアメリカも違います。全部日本基準でやると、余計な設備投資がかかってしまう可能性があり、その部分で競争力を落としてしまうこともある。

もう一つの例は粉ミルクの話。子供に与えるものは安心・安全の部分の、どちらかというと安心の部分重視している。そういうマーケットにおいてはメイドインジャパンは評価が高い。信頼があるので、日本製なら何も問題は起こらないだろうという安心です。安心と安全は違います。安心は測れないもので、安全は基準値があるもので、この部分をどういうふうに設定して海外でやっていくのか。幸いにして日本製の安心の部分が高い。安全のところをどこに設定するのが大事です。

東田 安心とリンクさせないといけない。

武智 数値だけでも駄目だということですか。

山田 駄目です。

武智 ちょっとの違いでも、向こうの基準をクリアーしていたら、向こうの人には受け入れられちゃうからということですか。

山田 そうです。幻想に近いものがありますが、やっぱり長い間培ってきた評判というのがないかと、それは繰り返し消費する財ではすぐにはばれます。繰り返し消費される財はちゃんと客観的基準がクリアーされている必要があるけれども、良いイメージをつくりだすともっと売れる。それがブランドです。

齋藤 日本の農産物とか食品は、そこまでやりすぎているから、逆にコストが高いんじゃないかなというけれども、僕はまったく違うと思います。

東田 違う…。

齋藤 例えば、リングゴをヨーロッパに持つていこうとすると、ヨーロッパのギャップという生産管理方式で作られたものしかヨーロッパは受け入れませんという話になる。日本人は日本の生産管理の仕組みで作られたものを安全だと思っっているわけですから、その仕組みを広げる努力が必要なのではないでしょうか。VHSとベータの話は有名ですが、どうやってデファクトスタンダードにしていくのか国はもつときちんとやるべきです。Jギャップといって、自分たちの生産管理方式をもつとよいものにするということをして日本の生産者団体がやっています。一方、チャイナ・ギャップというものもある

りますし、ヨーロッパではユーレップ・ギャップ（EU REG GAP）というものがある。どこのやり方がいいのかというのは、これは工業品と違って土地の問題がありますので、難しいでしょうが、消費者の目に見えるかたちの制度とか基準をきちんと形作っていくというところを戦略的に進めることで、日本のやり方で行ったものももっとより多く、これから人口が爆発するといわれる東南アジアなどでもっと安心して受け入れられていく。そして、輸出が増える。日本の農業バンザイということになるのではないかなと思います。

東田 それはそうかもしれないですね。

齋藤 反対に、日本のやり方で作っていないものは受け入れませんよということであれば、消費者にとってもっと安全な中国の食品を安心して食べられるという環境ができてくると思います。

東田 それは面白いね、安全基準をグローバルスタンダードにしていくというのは。

齋藤 そこをもっと戦略的にやってもいいと思います。

東田 なるほど。

山田 実は中国の安全基準は結構厳しいんです。項目によっては日本よりも厳しかったりする。

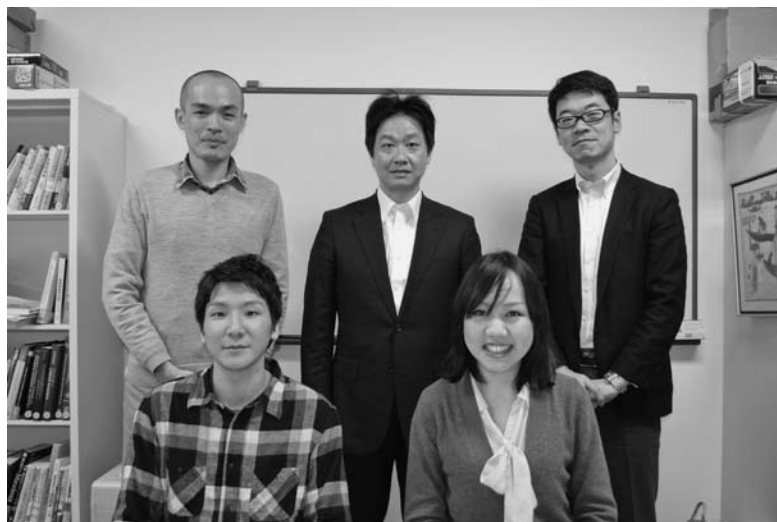
東田 環境基準なんかも全部そうですね。数値に関する限りは、中国はそこそこ厳しいです。

東田 さて、ここまでお話をしてきましたが、「日本の農業を強くする」と言っても、改めてさまざまなポイントがあるのだということが分

かりました。食品と農産物共通の課題に、「売力」というものがあることもわかりました。このマーケティング能力を高めていくという点は、比較的抵抗なく多くの農業関係者が協力しているのではないかと思います。当然のことながら、生産性を高める変革には痛みが伴います。ただ、その痛みを最小限に抑えることはもちろん必要だと思います。農業の現場では、その覚悟を持って取り組んでいる人がたくさんいることも分かりました。

実は、対立しているように見える多くの農業関係者や研究者は、目指しているところは同じなのではと感じます。あとは、うまく個々の力が農業を強くするために働くような仕組みが必要なのかもしれません。

座談会の最中には、つい勢いづいてしまい、多くの頑張っておられる方々に失礼な発言などもあったかと思いますが、ご容赦いただければ幸いです。



その学部長職在任中（1993年4月～96年3月）に、学部活性化の一つとして並々ならぬ熱意を以て本誌創刊を企画、推進し、初代発行人となった山本栄一先生（経済学部名誉教授・財政学専攻）。先生は学部長退任後には、本誌第2号の編集長として、また第3号以降の編集委員として本誌の編集・刊行に永く貢献を重ねてこられた。

山本先生は、昨冬（2011年）の師走十日に天に召された（享年七十二歳）。2013年度には第20号の節目を迎える本誌は、ここに創刊者の一人であった山本先生を偲び、編集長経験者の寄稿も収めながら追悼のページを設ける（本誌企画編集委）。

（似顔イラスト：岸本裕美子 本誌第10号学生編集委員）



山本栄一先生を偲ぶ

本誌初代発行人

1966年4月～2008年3月 経済学部在職

「エコノ・フォーラム」の草創期

山本先生は阪神・淡路大震災の年（1995年）に経済学部長でした。新学期開始まもなく、山本先生は震災後の混乱に立ち向かうように経済学部の学部活性化のアイデアを矢継ぎ早に出されます。ディベート大会（ゼミ討論会）も、ゼミ対抗スポーツ大会も、ゼミ連絡会も、そしてこの学部誌『エコノ・フォーラム』もその時に産声をあげた企画です。どれもが今なお続いていることには驚かされます。『エコノ・フォーラム』という誌名は当時まだ奇抜に響きましたが、山本先生はほくろのアイデアにすぐ賛成してくれました。雑誌ができる前には準備号として壁新聞のような『フォーラム通信』を、ワープロ（「書院」！）打ちの書面の切り貼りで作ったことを懐かしく思い出します。草創期の情熱がさらに引き継がれることを祈ります。

（田村和彦 国際学部教授・本誌初代編集代表）

“永久編集委員”格・山本先生！

落語や俳句作り等々、多趣味の文人的存在の山本栄一先生は活字の虫でもあった。その先生が様々な学部活性化策の一つ、本誌創刊を第19代学部長として選択・決断したのは当然の成り行き、といえるかもしれない。

創刊を果たした後も先生は第2号から第11号までの編集委正規メンバーであり続け、いわば“永久編集委員”格として、当方担当の第9号編集でも多彩な企画を山本提案として供して頂き、新米編集長を助けて下さった。

本誌も“エコノフォーラム21”と改称し大判化して、当初の「学部の新鮮なデータブックとしての機能」（第10号）より、「学部から社会に向けてメッセージを発信すること」（第11代・藤田友尚編集長）へと舵を切る。本誌の深化する自己成長を、天上の先生にこそ、再び永久委員として見つめて頂こう。

（市川文彦 経済学部教授・本誌第9代編集長）



* 発刊の言葉：“エコノフォーラム”創刊号の表紙裏に登場

以後、第10号までの各巻に掲載される。なお現在の<エコノフォーラム21の言葉>は、本誌表紙裏に掲載。

「フォーラム」とは

フォーラム (FORUM) はもとは「市場」を意味するラテン語。古代ローマでは市の中心のフォーラムに様々な公共建築が建てられ、広大なフォロ・ロマーナの遺跡を今に残しています。原義そのままに屋外の公共広場を指すほか、現在では公開討論や座談会の場も意味します。「エコノフォーラム」は、ゼミを中心とする経済学部の活性化の広場です。この「広場」が風が行き交う、新しい提言に満ちた、活発な往来の場になることを期待します。

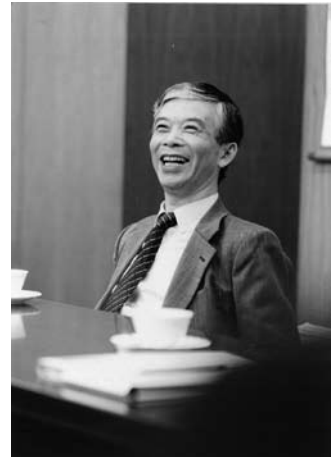
〈巻頭言〉：「ゼミナールを学生生活の中心に」

山本栄一学部長

「(前略) 一年の総まとめとして、本誌を発刊するに至ったのも、全く同じ思いからです。本誌を通じて、学生諸君も教職員も一つになって、経済学部がゼミナールを中心とした「知の祝祭典」の場となることが確認できればと願っています。

また、本年を第一年目として、経済学部の情報満載されたフォーラム誌の発行を積み重ねることによって、経済学部が喜びと活力のある「知の祝祭典」の場となるための方向を定める羅針盤の役割を果たすのではないかと、秘かに願っています。(後略)」

“エコノフォーラム”創刊号、1996年3月刊。



“エコノフォーラム21”第11号 編集後記から (2005年3月刊)

「形だけとはいえ、『エコノフォーラム』誌発刊以来、編集委員を変わずつとめさせてもらったのは、わたしをはずすまいと思ってなのか、惰性なのか、いずれにしても、この10年、楽しい経験をさせてもらいました。今号から版型も大きくなり、装いも新たになって、第2期という感じです。今号の編集長藤田先生とは、梅田の太融寺での桂吉朝落語会ではからずも一緒になって以来、フランス・リール大学に大学間提携のために一緒に出かけたりして、無駄口を叩く間柄になっています。今号を革新したいという熱情を、昨春聞いて、「やる気十分」、大いに期待していました。皆さん出来はいかがでしょうか。これからも、変幻自在、『エコノフォーラム』の今後も続く展開を、期待して待っています。(栄一)」

←本書は山本先生を追想する「追悼文集」。寄稿40篇ほどを収めて、企画から刊行まで僅か半年足らずで完成。(関西学院大学出版会、2012年12月刊)

2012年
5月17日
木曜日

東田啓作 教授 (資源経済学)

生態系サービスの価値

生態系は、水質浄化や大気調節などの環境維持活動を行うとともに、自然資源を生産します。この自然資源は、我々の生活や経済活動にとって必要不可欠なものである場合が多く、これらは「生態系サービス」と呼ばれます。それぞれの生態系は独自の様々な動植物種が存在することによって形成されるものです。

生態系サービスは、大きく以下の4つに分類することができます。食糧、繊維、燃料、遺伝子資源、生化学物質(自然薬品)、淡水などの「供給サービス」、大気質の調節、気候の調節、水の調節、土壌浸食の抑制などの「調整サービス」、文化的多様性、精神的・宗教的価値、知識体系(伝統的、慣習的)などの「文化的サービス」、土壌形成、光合成、一次生産、栄養塩循環、水循環などの「基盤サービス」です。

生態系の利用価値を経済的に捉

えると、利用価値と非利用価値に分けられます。利用価値は、さらに直接利用価値(食糧や水などの物質的消費を伴うものと、ネイチャーツアーのように物質的消費を伴わないもの)と間接利用価値(気候調節機能や水質浄化機能など)とがあります。自然に生息する野鳥や虫が受粉を行って、農作物の生育に良い影響を与えるケースはこの間接利用価値に該当します。一方、直接経済活動に利用することはなくとも、そこに生態系が存在するだけで幸せを感じることがあります。これが非利用価値です。例えば、新潟県の佐渡では長年トキを自然に戻す努力が行われていますが、トキが存在するだけで効用を得る人々が多いはず。南極にペンギンがいてその姿を見るだけで、効用を得る人もたくさんいま

す。

現在、この生態系の価値を正確に捉えていくことの重要性が増しています。正確に捉えるとは、その貨幣価値を計測することを意味します。では、なぜ貨幣価値で表すことが重要なのでしょうか。

我々は、しばしば開発が自然保護かを選択しなければなりません。道路を建設したり、宅地を造成したりすることは、経済便益をもたらす一方で生態系に負の影響を与えることが多いです。正しい意思決定をするためには、開発を行った時の純便益をきちんと評価しなくてはならないのです。生態系の喪失は、開発を行うことのコストであると考えられます。したがって、純便益を正確に計測するために、生態系の価値を貨幣単位で把握することが重要なので

これは希少野生動植物の保護に対していくら支払いを行うべきかを判断する際にも、重要となります。絶滅危惧種を保護するためには費用がかかります。その費用を支払うかどうかを意思決定するためには、非利用価値を正確に貨幣単位で計測することが大事なのです。

「価値の計測」と「社会の合理的な選択」は、どちらも経済学が貢献できる課題です。資源経済学が対象とする分野は広く、他にもたくさん課題を研究対象としています。生態系サービスの価値の計測とその利用の選択も研究課題の1つです。生態系そのものは市場で取引されることがないため、その価格を知ることとは簡単ではありません。この価値の正確な計測のために、客観的でバイアスのない方法を生み出していくことが求められています。

2012年
5月18日
金曜日

市川文彦 教授（経済史学）

〈快適さ〉追求史の中での 私たちが・・・花粉症Ⅱ文明病論

*聖句…「この世で富んでいる人々に命じなさい。高慢にならず、不確かな富に望みを置くのではなく、わたしたちにすべてのものを豊かに与えて楽しませてくださる神に望みを置くように。」

史的に経済社会間の多様性を明らかにするのが我が専攻領域。そしてお話のテーマは文明病としての花粉症。今朝、舟木 譲先生に読んで頂いた聖句「テモテへの手紙」6・17（*）が問い、我々が注意すべき

は物質的に満ち足りた社会にあって、我々はそれを当然のものとするだけでなく、人にとっての豊かさ総体とは何を失って何を獲得した帰結なのか、時には冷静に、経済学的に自問する必要があるかと思えます。

さて花粉症の発症原因は個人差があるようですが、花粉症には文明病としての側面もあり、近年では文明の発達と花粉症の拡がりとの関係に注目する医学研究も進展。現在では発症例も含めると約2000万人、つまり日本国民の16%が花粉症であると推計されます。花粉症蔓延を

巡り、①先ず1990年代初め以降に重症の花粉症例が増加すること、②次に、この花粉症例急増期以前の、1980年代半ばから公衆衛生上の清潔化Ⅱ下水道整備が著しく進行していた事実が存在します。

この二つの観察結果は、実は相互に関係しています。経済成長と生活水準向上に連動した下水道整備をはじめとする人々の暮らしの着実な清潔化進展が、花粉症への人々の抵抗力、より正確には免疫を低下させていったのであり、この状態が花粉症人口を増やす大きな原因の一つとなっています。

それでは、なぜ衛生上の清潔化、つまり快適な生活スタイル追求化が、アレルギーへの免疫を弱めてしまふのか？ この疑問には、経済史

研究はじめ歴史的接近法がヒントを与えてくれます。下水道が未整備の、つまり現在のよう清潔化された時代以前の、高度成長期、またそれ以前の時期の日本の住居では農村部ばかりか都市部近郊でも自宅の庭や家屋内で家畜の牛、馬を飼う事例が極く普通でした。つまり当時の日本人の多くは、日常生活の中で家畜と接していて、その結果、肥料としても用いられる家畜の排出物も身近に。

この清潔化以前に生まれた日本の乳幼児たちは、家畜からの排出物に含まれるエンドトキシンという細菌に幼い頃から晒されることよってアレルギーに対する免疫システムを体内に確立していたのであり、この清潔化時代以前に生まれた人々の花粉症発症は今でも相対的に少数に止まっています。反対に花粉症になり

やすいのは幼い時にエンドトキシンに接することなく育った場合で、家に家畜のいない、水洗トイレが当り前の清潔化された時代の、1960年代末以降に生まれた人々に花粉症が目立つ傾向があります。

この現象が我々に問いかけるのは、人間は自然界の中で元々暮らしていた生き物であって、その中で生かされてきた存在であるという原点。我々人間の都合によってヒトと動物や自然との関係を変えてしまうと、人間の側に却って新たな生物学的負荷もかかってしまう逆説に思いを致しながら、人にとっての豊かさとは何か？を質す今朝の聖句の問いかけへ応えていくのは、他ならぬ皆さん自身です！

2012年
5月22日
火曜日

限定合理性と「つつ仕事」

小林伸生 教授 (産業構造論)

最初にお聞きします。あなたは①今1万円を受け取るのと、②1年後に1万5000円を受け取ること、どちらを選びますか。次に設定を少し変えて、①10年後に1万円を受け取るのと、②11年後に1万5000円を受け取ること、どちらを選ぶでしょうか。拳手の状況を見ると、最初の問いでは今1万円を受け取る方が圧倒的に多く、2番目の問いではほぼ半数ずつだったと思います。

これは「時間割引率」に関する問いです。具体的には、今もらえる金額と将来もらえる金額を比較して、将来どの程度多めにもらえるなら、同価値と考えるかということを示す割合です。今の1万円と1年後の1万5000円が同価値であると考えられる人がいるならば、その人の時間割引率は年5%ということになります。ところで今回の2つの問いかけ

は、共に時間割引率は年5%です。合理的な経済人を前提とすれば、同じ人はどのタイミングでも、同じ時間割引率で判断すると考えられます。つまり、全ての人は同じ方を選ぶはずですが、しかし多くの場合、こうした質問をすると今回と同様の結果になるようです。近い将来の割引率の方が遠い将来の割引率よりも高くなる傾向を、行動経済学の用語で「双曲割引」といい、今を楽しむことにより高い価値を置く傾向が強いことを表しています。

経済学では従来、合理的な個人が完全情報の下で選択する状況を前提に議論がされるものが多くありました。しかし、従来からの経済学が前提としていた合理的な経済主体が、実社会では必ずしも大多数を占めない可能性があるのです。また完全な情報が与えられることはむしろ稀で

あり、限定情報の下で思い込みに基づき行動することも多くあります。それらがしばしば、期待通りに経済活動が機能しない原因となるのです。

反面、こうした人間臭い思い入れが、世の中の進歩を促してきた面もあります。自分自身の経験を思い起こしても、他の人から評価される仕事は、基本的にコスト意識を度外視し、何か新しいことを達成・発見したいという動機から達成される場合が多かったように思われます。小手先の効率性からは、人を感動させるような成果は生まれません。

勿論、市場メカニズム自体は否定されるべきものではありません。効率的な資源配分の実現のために市場を正常に機能させる、またその実現に向けた制度設計・環境整備を進めることは、極めて重要な課題です。反面、現実社会では市場が失敗する

場面は多くあります。市場メカニズムを最大限生かしつつ、併せ持つ限界を補完するために、市場外での「こだわりのある」活動が、社会のあらゆる場面で必要になってきます。例えばそれは、社会のあちこちで行われるボランティア活動であり、社会の進歩のために日々追求される研究開発であったりします。それらは全て、よりよい社会の実現に向けて自分の力を行使したいという、使命感に基づいて遂行されるものでもあるのです。

皆さんがこれから行っていく様々な選択は、決して完全情報の中で行われるものではありません。だからこそそれを受容した上で、与えられた場で最善を尽くし、また時には短期的・表面的な効率性をわきに置き、使命感を持って「いい仕事」を追求していくことが重要だと思えます。■

2012年
5月24日
木曜日

河野正道 教授（理論経済学）

スミスの「見えない手」と聖書

新約聖書ローマ信徒への手紙8章28節には、『神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くということをし、私たちは知っています。』（『新共同訳』文語訳では『万事相働きて益となる。』と書かれています。ここを読むときに、経済学の父、アダム・スミスの「見えない手」を思い出す。この「見えない手」とは国富論の中に一度だけ出てくる言葉である。

『人は自分自身の安全と利益だけを求めようとする。この利益は、例えば「莫大な利益を生み出し得る品物を生産する」といった形で事業を運営することにより、得られるものである。そして人がこのような行動を意図するのは、他の多くの事例同様、人が全く意図していなかった目的を達成させようとする見えない手

によって導かれた結果なのである。』（『国富論』第4編「経済学の諸体系について」第2章）

このアダム・スミスの言葉の現代的解釈として、次のようによく言われる。人はすべて利己的である。これを現代の経済学では合理的経済人という。この、ばらばらに動く利己的な人たちの行動が、あたかも神の見えない手に導かれて、全体としてうまく調和し、最適な結果がこの社会に実現する。だから、「自由放任がよい」と。

この最適な結果とは、パレート最適のことと解釈することができる。つまり、緩やかな価値観の下で、無駄なく社会の資源が配分され尽くしているという最適な状態のことである。確かに、国富論の原典に当たってみると、「人が全く意図していなかった目的を達成させようとする見

えない手によって導かれた結果」とのみ書かれており、それがパレート最適へと導くと解釈できるか否かは疑問が残るかも知れない。しかしながら、「見えない手」とは神の手としか解釈できず、神が導くところならば最適などところであろう、との信仰を働かせて以下のように論理を進めよう。

神が利己的な人々を導くということとは、利己的な人も利他的な人も、そのまま社会に貢献しているということを意味する。つまり、すべての人は神の御支配の中にあり、神の手に導かれている。このチャペルの最初に歌った讃美歌は「主よ、み手もてひかせたまえ」という歌詞であった。しかし、そのように自分から神様に「引いて下さい」とは思わなくても、実は引かれている。その結果、最適な状態がこの社会に実現

している。これが神のみわざである。ここでスミスの「神の見えない手」とローマ書の「万事相働きて」が結びつく。

この「万事」とは何か。今日の全てのことのみならず、過去のすべてのこと、と解釈できる。つまり、過去に起こったすべての出来事、つまり、過去の自分自身の失敗であっても、現在や将来の自分自身の益になる、という解釈が可能である。例えば、第一志望の〇〇大学に落ちた。これはマイナスの出来事であるが、しかし、これが将来プラスになるかも知れない。それらの過去の失敗もすべて、プラスに変えて益としてくださる。これが神の愛である。どうにもならない過去の失敗も、益に変えてくださる。万事相働きて益となる。ここに神の御愛がある。

2012年
5月29日
火曜日

猪野弘明 准教授 (産業組織論)

ピークロード料金 二つの誤解

原発の再稼働が難しいなか、夏の節電の必要性が唱えられています。この状況下で、関西電力は7月からピークロード料金といわれる料金メニューを導入することになりました。このメニューを選ぶと、電気料金が昼間のピーク時には高くなる代わりに、夜のオフピーク時には安くなります。今回導入されるメニューでは、ピーク時の価格はオフピーク時の実に6倍となる予定です。

このピークロード料金に関しては、世間での捉えられ方を見るに、時に2つの誤解があるように思えます。1つ目は、単なる一時的な節電達成のための手段であるというイメージです。この考え方に従うと、長期的に代替電力などで必要な発電キャパシティを確保した後は、ピークロード料金は不要になるはずで、2つ目は、電力需給逼迫を解決

する代わりに消費者の負担になるという議論です。つまり、ピーク時に高価格で電気使用を我慢しなければならぬ消費者は犠牲になるというわけです。しかし実は、いずれの議論も経済学的には誤りです。

まず1つ目の議論に関しては発想が逆です。ピーク時の値上げによってピークの電力需要が減少するため、ピークロード料金を長期的に続けられれば、必要な発電キャパシティの上限自体が減るはずで、この結果、単一価格のときほど巨大なキャパシティを用意しなくてもよくなります(原発の再稼働もいくらか抑えられるかもしれません)。同時にオフピーク時の値下げにより、需要変動は小さくなり(電力余りの夜間などに需要が増え)遊休設備も減らされます。この料金体系は、発電設備が用意されれば不要になるのではな

く、長期的に続けることで発電設備のあり方を「より小さく、より効率的に」変えるのです。

次に2つ目の議論ですが、確かに、需要の大きいピーク時すなわち「電力を使いたいとき」に料金が高くて我慢しなければならず、需要の小さいオフピーク時すなわち「電力を使いたくない」ときに少しばかり料金が安くても、下手をすると損する場合があります。これは認めません。しかし実は、ピークロード料金をうまく活用することで消費者は必ず得できます。普段の講義では図などを用いて、経済学的にきっちりこのことを説明しているのですが、以下では簡略にはなりますが直観的な説明を試みましょう。

電力料金は総括原価方式と呼ばれる規制方式で、電力会社に必要な「費用」を賄わせるように設定されてい

ます。単一価格でこの「費用」を賄っているときに比べて、ピークロード料金のお金を想像してください。必要な額を捻出するのに、ピーク時にはもともと需要が大きいため、相対的にあまり価格を上げないで、オフピーク時にはもともと需要が小さいからこそピーク時の値上げを補って有り余るほどに価格を下げる事ができるので、この方法で消費者の利益を確保し増進させることができます。つまり、発電設備の効率化の利益は料金体系を通して分配され、消費者も享受することができるとです。

2012年
5月31日
木曜日

平山健二郎 教授（金融論）

経済小説のすすめ

二〇〇七年二月から三月にかけてNHK土曜ドラマで「ハゲタカ」が放送されました。普段はドラマなどあまり見ないのですが、たまたま見たこのドラマはいわゆる外資系ハゲタカファンドをめぐるエピソードを生き活きと描いており、引き込まれました。そしてドラマの原作と言われる真山仁『ハゲタカ』を読んで、経済小説の魅力にはまってしまったのでした。私は企業に勤めた経験がないので、企業内でどのような会話が交わされ、どのような駆け引きが行われているか、よく知りません。

経済小説はそういう知らない企業社会の内情を教えてください。この『ハゲタカ』では一九九〇年代以降の日本経済の軌跡に合わせて、不良債権と化した銀行の貸出債権を安く買ったたくハゲタカファンドや、放漫経営の同族企業をめぐる再生劇が銀行

の内紛とともに生々しく描かれています。しかし単にビジネスの描写にとどまらず、主人公の一人が元ジャズピアニストだったためビル・エバンスのジャズ音楽が登場したり、老舗ホテルの経営をついだ若き女性のフライフィッシングの場面があったりと、ストーリー展開に幅があり、広く楽しませてくれる上質のエンターテインメントとなっています。

その後、私のゼミに年間百冊は本を読むという優秀なN君が入ってきました。彼が「先生が金融の専門家なら、これは面白いですよ」と薦めてくれたのが黒木亮『トップレフト』と『巨大投資銀行』です。前者は日本の銀行とアメリカの投資銀行とが国際的なシンジケートローンをめぐって丁々発止のせめぎあいを描いた作品です。後者も国際的な投資銀行の各国での案件をめぐる活躍な

どが活写されています。著者の黒木亮氏は海外での経験も豊かです。で、ニューヨーク、イスタンブール、ローマ、モスクワ、カイロなど世界各地の歴史・文化・食事などの話も交えながら、多くの主人公の生き様も含めて、奥行き深く企業・人間を描いています。（彼のエッセー集『リスクは金なり』もイチオシです。）

最近読んだ作品としては山崎豊子『不毛地帯』があります。これは陸軍参謀だった瀬島龍三氏がモデルとされており、彼の十一年に及ぶシベリア抑留の筆舌に尽くしがたい難辛苦と、日本への帰還後に採用された伊藤忠商事での大活躍を描いています。以前から瀬島氏の名前だけは知っていました。昨年（二〇一一年）九月の日経新聞「私の履歴書」欄を元伊藤忠商事会長の室伏稔氏が執筆しており、その中で室伏氏が上

司だった瀬島氏を絶賛していたので、色々と調べたところ、この『不毛地帯』のモデルが瀬島氏と知り、読んでみたのです。これは五巻に及ぶ長編ですが、原作が週刊誌に掲載されていたためか、次から次へと息を飲むようなドラマが展開し、全く長いと感じさせない作品でした。航空自衛隊のジェット戦闘機選定をめぐるきな臭い政治劇や、社内での抗争など、戦後日本の闇と光が活き活きと描かれています。

経済小説を読むことで、現実や過去の経済・ビジネスの実態を知ることが出来るし、大人の会話を耳を傾け、上司への口の利き方、宴会での作法等々、大変勉強になります。若い諸君にも是非、経済小説をお薦めする次第です。

2012年
6月1日
金曜日

寺本益英 教授 (経済史)

経済学の「常識」を再考する

2012年3月期の決算で、パナソニック、ソニー、シャープの日本を代表する電機メーカー3社が何千億円もの赤字を計上し、大規模なリストラを余儀なくされたことに言葉が失いました。

これまで日本経済を支えてきた優良企業が、どこで計算を間違えたのでしょうか。私は次の2点を指摘できると思います。すなわち第1に、日本経済・世界経済の不況や、円高による需要不振が想定以上に深刻であったこと、第2に、韓国や台湾のライバル企業の台頭が予想以上に目覚ましかったことです。結局、安定的な成長を前提とした生産計画は通用せず、想定外の複合的ショックに翻弄されました。

加えてより根本的な原因は、家電製品のデジタル化がもたらす変化を読めなかった点にあります。家電製

品はデジタル化により、半導体や液晶パネルなど部品主導の組立産業化を促進し、価格破壊を引き起こしたのです。さらに、製成品技術は平準化・マニユアル化され、特にテレビは誰が作れるコモディティ（汎用品）になってしまったのです。アナログ家電時代には、ハイエンド（技術をふんだんに採用した高機能・高性能）性があり、日本企業は優位に立つことができたのですが、コモディティ化した商品は、価格競争という消耗戦を招いたのです。

厳しい状況を目の当たりにしながら、私はこれまでの経済学の「常識」を改める必要があると考え始めました。まずは経済成長第一主義です。その市場でトップになるため、経営者たちは無理な設備投資を行って生産能力を高め、製品のモデルチェンジを頻繁に実施して、まだ使える製

品まで買い換えさせようという戦略をとってきました。しかし経済環境の激変で、「作れば売れる」というシナリオは通用しなくなったのです。これからの経済学や企業経営は、成長や販売数量拡大を追うのではなく、質の向上や収益性に焦点を当てるべきです。

いまひとつ、企業の行動原則や競争についても見直すべきではないでしょうか。競争は経済発展の原動力であり、競争のない経済・社会は活力を失うという考え方は経済学の定説です。日本企業が圧倒的優位を誇っていた時代には、あまり意識しませんでした。こうしてアジア勢との競争において日本勢の敗北がはっきりしてくると、「優勝劣敗」に象徴される資本主義経済の原則に疑問を感じるようになりました。そしてこの競争は、どこかが倒れるま

で続く消耗戦であるのは、あまりにも過酷です。

最近では、競争に打ち勝つこと、あるいは利益を追求し、株主価値を最大にするという企業の行動原則を再検討する必要性を感じています。参考にしたのは、利益追求と道徳の合一を説いた渋沢栄一の経済思想や、市場第一主義と決別を説くサントル教授の見解です。

経済学部で学ぶ意義は、私たちひとりひとりが善き社会とは何かを構想し、健全な議論に根差した言説を形成してゆくことです。経済学の常識とされていた論理も、時代の変化に応じて修正が求められています。関学生のみならずには、どのように改善すべきか説得的な主張を展開できるよう、日々の研鑽を重ねてほしいと願っています。

2012年
6月5日
火曜日

土井教之 教授（産業組織論）

学生の「基本」

——大学で学ぶことの意義——

最近注目されている曾野綾子著『人間の基本』（新潮新書、2012）に関連して、「学生の基本」について考えます。学生の基本は学ぶことです。近年の社会や経済の停滞に直面して、教育、あるいは広く学ぶことの意義が問い直されていることから重要な問題です。

例えば、最近学生のインターンシップが「就職に役に立つ」として注目されている。しかし、日本のインターンシップには違和感をもちます。インターンシップが「目的化」してしまっているからです。「面接での話題作り」のように見えます。今の就職事情が許さないのかもしれないが、一考の余地がある。事実、今の就職面接は、「作られた話題」が中心で、その話から本当の学生評価になっていないのでは、という懸念が企業の方でも出ているらしい。

インターンシップがよくないと言っているわけではなく、教育上の有効性は認めますし、外国でも重視されている。そのさい、一つの科目として単位認定されることが重要ではなく、大学での勉学にその成果を生かすことが強調される。

ところで、学生の自分は「学ぶこと」です。インターンシップが本来学生諸君の自分である研究にどのように生かされたかをよく考えて、そしてその結果を基に、大学で何を学んだかを、面接担当者に伝えるのが望ましいのではないか。インターンシップは研究の一つの過程・手段である。こうしたインターンシップと研究の相互作用から、学生にとって重要である「悟性」（理解力、要領）と「感性」（問題意識、判断力）が養われるのです。特に感性が重要です。それが養われると、問題を究明

したいという思いが生まれ、「挑戦」、「革新」の能動的、前向きな精神がでてきます。それがないと、語呂合わせ風に言えば「惰性」の世界となる。

それでは、学ぶ、あるいは学問するとは一体何か。最近、科学の世界で、これまでの常識を覆すような議論が出されている。例えば、アインシュタインの相対性原理とは異なる実験結果が話題になった。文系の人間からすれば、科学の世界ではただ一つの理論、真理があるようにも思いますが、どうもそうでもないらしい。ましてや、社会科学では、一つの事象に複数の理解・理論がある。例えば、なぜ日本経済は低迷から抜け出せないのか。ある政策は効果を示さないのか。これらの問題にはいくつかの説明が出されている。この問題に取り組むためには、そう

した多様な議論を理解し、それを基に自己の意見を組み立てなければならぬ。先に取り上げたインターンシップでの経験からそのヒントが得られるかもしれない。そのレッスンを研究の中で生かすことが重要です。

従って、多様な議論を理解し、それに基づいて議論することは、要は、我々が「心の余裕」をもつことにつながる。心の余裕は人生にとって不可欠です。例えば、「すぐキレル」、あるいは「社会性が欠如している」のは心の余裕のないことを反映している。大学で学ぶことは確実に心の余裕を生む。

最後にあらためて、「学ぶことを通して感性を身につけ、心の余裕をもつ」ように心がけてほしい。

2012年
6月7日
木曜日

井口 泰 教授 (労働経済論)

「あなたに必要なリーダーシップ」

「リント人への第Iの手紙 2・12-16」

関学では、スクールモットーである「Mastery for service」を語るときに、長年、リーダーシップの問題を避けてきたように思います。最近、文部科学省の「グローバル人材」と、関学の「世界市民」を並べて掲げる文書で、リーダーシップという言葉が登場するようになりました。

しかし、関学生のほとんどは、大学でリーダーシップについて考える機会はなく、まして、「リーダーシップ・トレーニング」を受ける機会もありません。それに対する反論は、「リーダーシップなどというものは、教えれば身に就くものではない」というものです。しかし、「リーダーシップ・トレーニング」がきっかけとなり、自分なりのリーダーシップを発見する場合も少なくありません。

2008年秋以来、欧米経済の停滞のなかで、新興国経済が台頭しています。そうしたなかで日本は、急速に発展する中国やインドなど新興

国とも対等に付き合ひ、協力する関係を築くことが不可欠です。

ところが、最近公表された、アジア展開する日系企業の日本人社員のマネジメント能力に関する調査結果は衝撃的です。日本人トップや管理職の多くは、本社とのパイプ役又は調整役にとどまり、現地従業員から、説得力や信頼性に欠けていると評価されているからです。

実は、リーダーシップを根底で支えているのは、「なぜ」や「何のために」を徹底的に問う精神です。日本語人だけの日本語の論理で決め、目的も論理も明示せず、ただ従えという感覚では、言語、文化や価値観の異なる人々が構成する組織を牽引することが困難です。

多くの日本人は、中学・高校ばかりか大学でも、「受動型」授業に順に参加するのが普通で、自分で問を立て自分で答を出す「探究型」の授業は例外的です。

そもそも学生の皆さんは、大学に

入った目的を問い直す必要がありません。現代の大学は、就職や出世など、経済的成功のための手段に化していません。しかし、アメリカの「アイビリーグ」(ハーバード、イエール、プリンストンなど)など、リベラルアーツを重視する大学の伝統によれば、大学とは人生の目的や価値、意味を探索する場所なのです。

イエール大学の卒業式の資料には、卒業生が大学で何を学んだかが率直に綴られています。それは、探究する情熱であることが判ります(『*In love with study, study with passion*』)。これら大学の卒業生が、その後、経済的にも成功している例は少なくありません。しかし大事なものは、高い所得や地位と同時に、高い責任感と実行力も求められる点です。これを可能にするのが、探究に心を燃やす能力です。

最近、世界中で「幸福研究」が盛んになっています。そこでも、経済的利益だけを追求した人は、社会貢

献を追求した人に比べ、結果的に幸福度は低いという結果がでていのも、興味深いことです。

本日の聖書の箇所には、「わたしたちが受けたのは、この世の霊ではなく、神からの霊である。それによって、神から賜わった恵みを悟るためである。」と書かれています。「霊」という言葉は、何か神秘主義的で、科学的な説明を許しません。そのような用語法が、現代人の聖書に対する拒否反応を生むのなら、それは、「クリスチャンの無策が原因です。霊を賜る」というのは、私の言葉で言い換えれば、人生に目的又は価値あるいは意味を与えるものを探索するパッションを持つことです。自分の生きる意味や価値を自問し、これを積み重ねながら生きることこそ、あなたのリーダーシップの源泉であり、それが、新しいイニシアチブを生み、組織や社会を変える力になるでしょう。

2012年
6月11日
月曜日

林 宣嗣 教授 (財政学)

日本人の幸せと東京一極集中

ブータンが国づくりの理念として掲げる「国民総幸福量」(GNH) (グロス・ナショナル・ハッピーネス) が注目されています。こうしたなか、日本でもさまざまな視点から、日本の幸福度を測り直そうとする動きが盛んです。法政大学大学院が「幸福度」の都道府県別の順位を発表しました。「生活・家族」「労働・企業」

「安全・安心」「医療・健康」の4つの部門から指標を選んで幸福度を評価した結果、福井、富山、石川の北陸3県がベスト3を占めました。東京は38位で大阪は最下位です。

私たちが効用の最大化を目指して行動するなら、生活満足度が高い地域では人口が増え、低い地域では人口が減少するはずだと、ところが、最近の人口の動きを見ますと、幸福度で高いランクに位置する福井県、富山県、石川県の人口は減少してい

るのに対して、幸福度の低い東京は増加、全国で最下位の大阪の人口はほぼ横ばいです。

このような現実を生み出した要因は2つ考えられます。第1は幸福度の計り方が間違っているのではないかとということ。しかし、調査で取り上げられた自然環境、家族との関係、安全、健康といった項目は、すべて幸福度に大きく影響するものであり、調査項目の選択が間違っているとは思えません。第2は、世代によって項目間で優先度に違いがあるのではないかとということ。高齢者にとつての重要な項目と、若者が重視する項目は違うでしょう。つまり、若者にとつてとくに重要なのは働く場であり、人口移動の傾向を見ると、若い人たちの移動が顕著で、高齢者の移動はそれほど多くはないのです。したがって、第2の要

因がどうも効きそうです。

ただ、若者にとつて、家族や地域とのつながり、自然環境、安全といった項目が大切でないはずはありません。となると、東京をはじめとした大都市で生活することは、「幸福度」に関わる他の項目を犠牲にしていることになります。働く場所があれば、出身地で暮らしたいと考える若者は多いのです。つまり、住みたいところは住めない。このことが、日本人の幸福度を低めていると考えることはできないでしょうか。

東京はたしかに活気があって、魅力的な町です。しかし、東京一極集中には大きな落とし穴が隠されていることに注意しなくてはなりません。イギリスをはじめとする欧米先進国では、地域活力を強化するために、各地域が工夫できるような仕組みを作ることにエネルギーを注いで

います。その結果、ロンドン、パリ、ニューヨークといった大都市人口の対全国シェアは将来的にはほぼ一定と予測されています。これに対して、日本では東京圏のシェアはますます高まっています。

日本がブータンのようになることは不可能でしょうが、日本人の幸福度をあげることはできます。それは、選択肢を拡大することです。右肩上がりの経済成長が望めなくなった日本においては、選択肢のある豊かさを求めることの重要性はますます大きくなっています。

幸福度指標を作成し、ランキングを行うだけでは、日本人の幸福度は大きくなりません。なぜ、私たちは幸福度の大きい地域で暮らすことができないのか、その原因を考え、望ましい方向に持って行くことが求められています。

2012年
6月12日
火曜日

野村宗訓 教授(経済政策)

弔いの儀式を考える

① 生と死をつなぐ納棺師

山形県を舞台にした映画『おくりびと』で、「納棺師」という仕事がクローズアップされました。管弦楽団でチェロ奏者をしていた主人公はリストラに直面し、再就職を試みる中で、「やすらかな旅のお手伝い」という広告にひかれ、葬儀社で修業を積んでいくというシナリオです。

原作にあたるのは、青木新門さんの小説『納棺夫日記』で、作者自身の実体験をベースにしたシリアスな内容ですが、映画は別作品としてコミカルな描写も取り込んでいます。両方に共通するメッセージは、「人間は生き物の死の上にはしか、生を享受できない」という点です。

② 生死の区切りとしての儀式

お葬式は結婚式と同様、ビジネスとして成り立っています。生前葬として、本人主導のパーティにするこ

ともできます。近年、お墓は少子化の影響から都心部を中心に、森林葬や樹木葬といったメンテナンス・フリーの形態も出てきました。お葬式ではなく、医学の発展を願って、大病院に献体する人もいます。地味なクロージングですが、前期の社会貢献としての儀式と解釈できます。

「冥途」という表現は暗いイメージですが、英語の「ネクスト・ワールド」は明るい未来を感じます。ベトナムでは死者もあの世でお金がいるからと、儀式用のお札を燃やす習慣があります。悲しいことですが、東日本大震災の被災地ではお葬式ができていないケースが多く、親戚はもちろんのこと、突然の死に直面した周囲の人達も、心の整理ができていないのが実情です。

③ 「中陰・中有」という世界

仏教では、「三途の川」が生死の

境界と言われます。大病を患った人から、まどろむような夢うつつ状態が続いた、と聞いたことがありません。自分は朦朧としていたために、喋れないけれども、周りの声は聴こえるとのことでした。芥川賞作家で僧侶の玄侁宗久さんの小説『中陰の花』は、生と死の中間状態である「中陰・中有」をテーマにしています。

福島県在住の玄侁さんは、大震災以降、グリーンフ・サポートに力を注ぎ、東北大学で「実践宗教学」という科目を立ち上げ、宗教学者や僧・牧師の連携を図っておられます。亡くなった人も日常を支えている点から、悲しむ場所と時間を共有する弔いの儀式の重みを強調されています。

④ 戦争と震災に向き合う

大林宣彦監督は戦争と震災を重ねて、映画『この空の花 長岡花火物

語』を制作しました。長崎と新潟の新聞記者が交流し、死者との会話から命の尊さを語るという設定です。原爆投下候補地だった新潟は、2007年の中越沖地震に遭遇しました。花火で有名な長岡は、開戦時の連合艦隊司令長官・山本五十六の生誕地であり、パンプキン爆弾(原爆と同型の通常爆弾)が投下された町です。

毎年8月に開催される花火大会は、空襲からの復興祈願のみならず鎮魂の儀式と位置付けられています。映画では、空から落ちてくる爆弾を、夜空に輝く花火に替えるという希望が込められているのです。キーワードは「まだ間に合う」。東日本大震災からの回復には時間を要しますが、様々な立場で建設的な行動を継続すれば、平穏な社会に復帰できるということを認識させられました。■

2012年
7月3日
火曜日

根岸 紳 教授(計量経済学・経済統計学)

デジタル社会を考える

経済学を学んでいると、答えが一つではないことがよくあるし、正解がはっきりしないことがある。経済学で有名な話、10人の経済学者がいると、ある問題に対して11個の答えがあったという。ある一人が2つの答えを言ったのである。経済問題に対して答えというのは幅が広く連続的、アナログ的である場合が多い。しかし、時代はデジタル的である。試験のやり方も変わった、何々について述べなさいから、マークシート上で1、2、3、4から正解を選ぶ。問題を作る側もはっきり正解の出る問題しか作れない。それでも解答しているとき、答えは1でも2でもいいのではないか、あるいは答えは1と2の間ではないか、と考えていたら、時間が来てしまう。1と2の間の答えは排除される。ただし、しばしば1も2も正解にしなければなら

ないこともあり、これはデジタルでは測れない証拠である。授業評価も1、2、3、4である。あいまいなものが排除される。しかし、一般的に、物事には幅がある。統計学でいえば平均が正解ではなく、平均を中心に幅(標準偏差)がある。あいまいさ(標準偏差)は大切である。人間は、ときどき、こうしようと思いを固める。しかし、固まった意思というのは一定だろうか。体の調子のいいときと体の調子の悪いとき、考え方は変わる。一人の人間の意思にも幅があるのである。日本人はyes、noがはっきりしないと昔から批判されることがあるが、枕草子や徒然草を学び、わびさびを重んじてきた日本人には1か0はどうもなじまない。

しかし、時代はデジタル、そして日本経済はこれに遅れをとってきた

といわれ、コスト削減のためにのみIT(あるいはICT)を導入するのは後ろ向きで、積極的に付加価値を生み出すためにITを利用できていないらしい。日本はITをうまく使っていないことを、この10数年、経済財政白書は絶えず分析し、ITのわかる経営責任者を置くことを訴えている。デジタル化で世界は英語化し、中国はどんどん米国籍門大学に国費留学、英語と中国語は言葉の並びが同じであることを味方に、欧米流を学び、欧米人をうまく使いこなしているという。新興国はデジタルで台頭し、液晶テレビは半導体や液晶パネルなどのデジタル部品を購入すれば、だれでもほぼ同じ性能の商品ができ、世界は一気にグローバル化し、同じ技術のモノを安く作ることができる。とくに我々中高年はデジタルにとまどい、翻弄されてい

る。しかし、センター試験で1、2、3、4に慣れている若者はデジタルを巧みに使いこなさず、彼らが日本を元気にさせる可能性をもっている。若者が活躍できる場所づくりがこれからの日本の課題のひとつだろう。デジタルは、日本人同士、海外の人とリアルタイムにコミュニケーション、多様な若者がつながり、新しい付加価値を生み出していく。日本が得意とするモノ作りはアナログ中心で勝負する、そしてその製品の良さはデジタル技術を使い世界に発信する。素材型製造業は長い間我慢をし、常に研究開発を怠らなかつた。高機能繊維、炭素繊維、レンズなどが面白い。おもてなしの心によるサービス業のイノベーションもある。デジタルとアナログのバランス感覚を持った若者が、今後日本に十分期待される。

2012年
10月29日
月曜日

中川慎二 教授(言語教育研究・異文化コミュニケーション)

ドイツと日本の交流 ハンブルクとデュッセルドルフ

幕末の万延元年十二月一日(一八六一年一月二十四日)プロイセンと徳川幕府の間で修好通商条約が結ばれた。近代国家建設に必要な医学、法学、哲学などの学問や法制度、教育制度をドイツから学んだ。ハンブルク大学でドイツで最初の日本研究が始まる。ハンザ同盟港湾都市ハンブルクに第一次大戦前の一九〇八年に設立された植民地研究所が、大戦後一九一九年にハンブルク科学財団(一九〇七年設立)と統合されてハンブルク大学が設立された。植民地研究所は、当時の貿易にとって重要であった熱帯病の防疫のための研究所で、アフリカ・アジアはヨーロッパからすると貿易と防疫の対象であった。

デュッセルドルフで育ったルイス・クニッラー(1827-1886)はハンブルクの商会に入り、長崎・出島

に来る。当時はオランダと中国だけが商館を置くことを許されており、オランダの庇護の下一八五九年に商会を設立、これが一八八〇年にカール・イリスに引きつがれ、伊理斯商会(横浜)となり、一八九八年ハンブルクに本社を移す。ドイツ人が日本に設立した最初の商社で、琵琶湖疏水、八幡製鉄など明治期の殖産興業の大事業に関わった。

土佐藩の九十九商会を引き継いだ岩崎弥太郎は海運業に進出し日本郵船を設立、欧州航路を明治二九年(一八九六年)に開設、大正八年(一九一九年)にハンブルク航路を開設した。第二次大戦後の昭和二六年(一九五一年)に欧州復航同盟、翌年欧州往航同盟に再加入した。

第二次世界大戦後はサンフランシスコ講和条約(一九五二年発効)の後に、日本企業のドイツ再進出がハ

ンブルクから始まる。一九五四年には東京銀行(旧横浜正金銀行)がハンブルク支店を設置し、一九五九年にはルール工業地域を背景に持つデュッセルドルフに支店を設置する。これ以降、日本とドイツの貿易は、輸出はハンブルク、輸入はデュッセルドルフとなる。一九七一年には北米とヨーロッパでは初めての日本人学校がデュッセルドルフに設立され、日本人社会が発展した。

ダヴィット・ハンゼマン(Dauidt von Hanzemann)はドイツ銀行を設立した人物で、その名を冠する研修所がデュッセルドルフに一九五四年に設置される。ヴェストファーレン・ライン銀行(現、ドイツ銀行)の施設で、第一期生の中に第一銀行(東京)行員、Tsuneshaburo Satoの名前がある。

齋藤常三郎は一九五三年十一月七日から翌年十一月三〇日まででの予定で

デュッセルドルフに滞在し、セミナーハウスには七月三十一日から十一月二十九日まで逗留、出発の前日に不慮の事故に合い、翌日死亡したことが記録文集に記されている。齋藤が滞在した一九五四年二月一日には「第一回デュッセルドルフ日本人会(Zweibrückerhof)行はる」(原文のまま齋藤の手記から)とあり、ボン大使館から三名の参加、八幡製鉄の砂堀氏が司会を務めたとあり、総勢二十一名の参加者の氏名が記されている。第三回手記には大使館書記官から日独貿易の説明があり「各商社の奮闘を望む」とあり、当時の輸入超過の状況を悲観し激励した旨の記録がある。これがデュッセルドルフ日本人社会の礎となった。

2012年
10月30日
火曜日

舟木 讓 准教授（宗教哲学、キリスト教学）

人間を考える ——歴史の忘却がもつ危険性——

2012年は、日本において人権

問題に関する本格的な取り組みが始まるきっかけとなった「水平社宣言」が京都において提唱されて90年を迎える記念の年である。「水平社宣言」は当時差別されるのが当たり前のようにされていた「被差別部落」に住み、理不尽な状況に置かれていた人々の血の叫びであった。そこから始まる「当たり前」の権利獲得への長い戦いは、「部落差別」の解消と人権の回復を目指すだけでなく、その後大きな広がりを見せ義務教育における教科書の無償化をはじめ、様々な果実を生み出すこととなった。

さらに、その運動は、その後の歴史の中で様々な変遷を経て、「部落差別」問題に対する考え方をはじめとして人権に係る様々な「考え方」も含めて、日本における人権問題から国際的な視野をもった運動へ

と「発展」を続けている。

しかし、その一方、そうした運動を実際に担った人々や、そこから明らかになった諸問題に関わった人々が世代交代する中で、その歩みの「正確な」歴史を「知らない」人々が増加しているという現実がある。また、当時の高度経済成長時代とは異なり、「貧困」が社会構造として日本においても存在していることが明らかとなっている現在では、人々の社会や人生に対する構えも大きく変わらざるをえないという現状もある。年金制度のひずみや、貧富の差が生み出す貧困のスパイラルは、希望のある将来が見えない状況を作り出し、他人のことを思う「余裕」がなくなっているような雰囲気は私たちを覆っているように感じられる。高度経済成長時から大学「紛争」を経てもたらされたバブル経済によって「一億総中流化」という幻想

がねつ造される中で切り捨てられてきた多くの人々の存在に対する感性を、私たちの多くが失ってきたことは、「マネー・ゲーム」という残酷な言葉を生み出したことから明らかである。すなわち、バブル時代、「地上げ」という残酷な「経済行為」が多くの貧しい人々の日常のみならずその後の人生やいのちすら突然奪い取るものであったにも関わらず、その悲惨さが今も語られることは少ない。

日本がこれまでたどってきた多くの人々の「いのち」を蹂躪し、「人権」をはく奪してきた歴史と、その反省の上で社会を変革しようとしてきた人々が行ってきた活動を丁寧になんげに検証し、現代と将来に良き形で継承することが焦眉の急であるはずだが、現実には目の前の生活で精いっぱいというのが現状となっているのではないだろうか。

日本に限らず、人間の歴史を振り返れば、社会の中でその存在を軽視され、無視され否定さえされるのは、例外なく権力から最も遠い人々であり、富から最も遠いところにある人々であり、社会の中で「少数者」と呼ばれる人々であることは紛れもない事実である。しかし、その歪んだ社会を何とか変えようとする現実に真摯に向かいあってきた人々がいっつの時代にも存在しそして、現在も存在していることもまた事実である。

今、改めてそうした歴史を丁寧に振り返り、私たちが気づき、向き合う中で、新たに暴力的な歴史を生み出すことを防ぐために何を知り、何をなすべきかを「我がこととして」とらえなおすよう、一人一人が問われていると言えよう。

2012年
11月8日
木曜日

星の王子さま

本郷 亮 准教授 (経済学史)

サンレテグジュペリの『星の王子さま』(Le Petit Prince, 1943)という物語に、星が輝いているのは各人が自分の星を見つけたためだ、という言葉がある。しかし残念ながら、この種の目的論的説明は、現代科学では誤りとされる。科学とは実に恐ろしいものであり、例えばその教科書によれば、宇宙はビッグバンという偶然によって生じ、地球や太陽の誕生も偶然であり、何億年か先には太陽が膨らんで地球を飲み込むらしいのだが、これもまた偶然である。偶然だから、何の意味もない(ニナンセンス)。私はこの世界観を科学的には認めざるをえないが、その一貫した無意味さをとても不気味に感じる。ふるさとも性別も結婚も、障害も病気も事故も、地震も津波も、なんにもかも偶然である。私たちは偶然に弄ばれる存在でしかない!

「人間はね、急行列車で走り回っているけれど、何を探しているか自分でもわかっていない。ただ忙しうにぐるぐる回るばかりなのさ」。生物の本にはDNAのことは載っているが、生きる意味は載っていない。生きることや死ぬことの意味はどこに見出されるのか? 想像力(心の目で見える力)を失わなければ、ここにも、そこにも、すぐ見出せるはずである。それは一種のおとぎ話を創作する力、自由に意味を創り出す力であり、知識のない子どもの方が、かえってこの力に長けている。意味を見つけないのが上手な人は、不幸にも意味を見つけないかもしれない。そういう人はたとえ不幸でも、心にいつも慰めがあるだろう。この世界に意味を与えるものは何か? それは皆さん一人一人の能動的精神のほかにはない。

人生の意味とは、要するに「人生の目的」のことである。目的のない人生とは、喩えて言えば、的を定めずに矢を射る、あるいはゴールを定めずに走るようなものである。その場合、どこに向けて射ようが、どこに向かつて走ろうが、ある意味では常に正しい。なぜなら、「正しい/誤り」(right/wrong)という概念は、目的に照らさなければ判断不可能だからである。例えば「正しい道」とは、目的地に通じる道のことであり、「誤った道」とは、目的地に到達できない道のことである。これをより一般化して言えば、ある行為(そして行為の集まりが人生)が正しいか否かは、何らかの目的に照らさなければ判断不可能である。

科学知識は、どれほど発展しても人生の「目的」の代わりにはなりえず、むしろその「手段」にすぎないだろう。もし人生の「目的」を与えてくれるものを広く「宗教」と呼ぶならば、人生には、科学と「宗教」の両方が必要になるだろう。それぞれの領分があり、どちらか一方だけで済むような問題ではないだろう。

さて、王子は自分の星を飛び出した後に、色々な星の住人の「宗教」を見て回った。①権力志向の王様、②人から賞賛されたくてたまらない「うぬぼれ屋」、③ペシミストの酔っぱらい、④底なしの所有欲をもつ資本家、⑤律儀な労働者、⑥知識を追求する学者。そして王子はついに地球にやって来て、そこで自分自身の「宗教」を見出した。いや、決断したと言うべきだろう。本物の「宗教」とは、常にそのような人生の決断を伴うものである。

2012年
11月13日
火曜日

ユーロはなぜ危機に陥ったのか？

春井久志 教授 (国際金融論)

欧州連合 (EU) が 2012 年のノーベル平和賞を受賞した。その受賞理由は、「過去 60 年の EU の歩みが欧州の平和と和解、民主主義と人権の促進に貢献したことである」とされている。「ユーロ危機」が世界経済に悪影響を与えているという欧州統合の負の側面ばかりがマスコミにぎわしてきた最中に、EU の統合進展が再評価されたことの意味は大きい。「リーマン・ショック」、「ユーロ危機」に続いて「世界経済危機Ⅲ」に発展する危険性が高まっている現況下での、平和賞の受賞の意味を高く評価するべきであろう。

それでは、「ユーロ危機」はなぜ発生したのであろうか。EU はジャン・モネをはじめとする欧州の指導者たちが過去 60 年にわたって智慧をこぼり、統合へむけたためまい努力を払って来たことの結果である。欧州統合に対する彼らの信念と実行力に基づく、独仏の和解と資源の共同管理を目指した欧州石炭鉄鋼共同体の創設は EU 設立の原点になった。その後の東西冷戦の終結を受けた共通通貨「ユーロ」の創設は、域内関税の撤廃や共通市場 (common markets) の創設による「ヒト・モノ・カネ」の自由な移動を可能にした欧州市場のいっそうの進展と

統合を目的としていた。しかしながら最初に着手されたのは 1988 年の欧州中央銀行の創立による金融政策の一元化にとどまった。通貨同盟 (a monetary union) を先行させて段階的な統合を優先した結果、EU 加盟国のうち、一部の国はユーロを採用しないことになった。また、財政主権に基づく財政政策も銀行の認可や規制・監督などの銀行行政も預金保険制度も各加盟国に委ねる現状維持にとどまった。

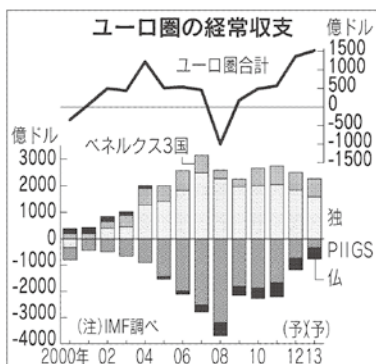
共通通貨「ユーロ」は、多くの悲観的な評価にもかかわらず、極めて円滑に導入され各国に受け入れられた。一方で、従来の為替レート変動の不利益や通貨交換の手数料などの解消によって、各国の金利水準やインフレ率の低下が実現し、域内の貿易取引や金融取引が急激に拡大し、経済成長に大いに貢献した。他方で、金利水準や物価水準、財政収支や政府債務残高、経常収支の不均衡 (図を参照)、経済成長率などの面では、加盟国間に格差が存在し、また格差の拡大が生じた。いわゆる「リージョナル・インバランス」 (regional imbalance) の拡大である。このリージョナル・インバランスの拡大は、金融政策のみが共通化されたのに対し、それ以外の財政政策、銀行行政など

は各国バラバラという制度的欠陥の必然的な帰結であった。

「リージョナル・インバランス」の拡大を解消して、欧州統合をさらに進展させるためには、どのような課題があるのか。今後のギリシャ危機に端を発する国家債務 (ソブリン・デット) 危機を経験したユーロ圏各国は、現在、新たに 4 つのビルディング・ブロックの構築に歩み始めていると評価することができる。すなわち、①ユーロ圏の金融システムの安定化を図る銀行同盟 (a banking union)、欧州共同債券を発行して「財政移転」 (所得移転) を可能にする財政同盟 (a fiscal union)、労働市場などの改革 (汎欧州的な失業保険制度の創設など) と競争力の向上を目指す経済同盟 (an economic union)、および EU のあらゆる側面にこれまで以上の民主主義的な合法性を与えることができる政治同盟 (a political union) である。特に、現時点で最重要視されるのは、上記 5 つのビルディング・ブロックを結合して EU 域内の財政移転によるリージョナル・インバランスの縮小と解消であろう。イソップ寓話を引用して「蟻」にたとえられるドイツなど北欧諸国から、「キリギリ」にたとえられるギリシャなど PIIGS 諸国への財政移転による経済成長率格差や

経常収支不均衡の縮小と解消を実現することであろう。

この目標の達成は決して生易しいものではなく、また十年単位の長い時間を要することは否定できない。しかしながら、EU 諸国は、今後とも紆余曲折を経つつも、新たな欧州統合への道を新たに歩み始めていると見る事ができる。「揺蕩 (たゆた) ども沈まず」が EU の強みであり、過去 60 年の実績である。まさに、ノーベル平和賞を受賞したゆえんであると言えらる。コリンズの信託への手紙 (12 章 7-10 節) ■



出所：『日本経済新聞』、2012年10月7日付け。

2012年
11月15日
木曜日

田 禾 准教授（人文科学、中国語学） 現代の外郎と西施

この間友人から名古屋の名物「ういろう」を頂きました。蒸したもち米で、絶妙な甘さを加えた美味しいお菓子です。食べながら、その名前の意味を尋ねました。解釈は、元の時代に当時の中国から日本に来た陳宗敬が漢方薬を日本人に紹介しました。陳さんの身分は「礼部員外郎」であるので、その薬を唐音のまま「ういろう」と命名しました。お菓子の名前になるのは、外郎菓を飲むときに、口直しに添えたお菓子に由来するということを教えて頂きました。このような歴史の人物に由来するのは中国にもあります。中華料理の「マーボ豆腐」の「マーボ」はその料理を作ったおばさんの名前という伝説があります。「マ」は「あばた」のことで、「ボ」はおばさんと言う意味です。「豆腐」とゆかりがある女性がもうひとりいます。「西施」

という美人です。豆腐屋さんの看板娘のことは「豆腐西施」と言います。西施は中国古代四大美人「春秋時代の西施、漢代の王昭君、三国演義にも登場した貂蟬（後漢）、と唐代の楊貴妃」の中の一人です。西施の名は美女の代名詞としてその後も広く人々に語り継がれ、今でもよく使われています。中国では「情人眼里出西施」という諺があり、恋する男の目にはだれもが西施のような美人に映るという意味です。西施の美貌は日本にも伝わっています。松尾芭蕉は「奥の細道」の中でこんな俳句を残しました。「象潟や 雨に西施 ねぶの花」。西施は美人の代名詞として中国現代文学にも登場しました。中国現代文学史でも高い位置を占める有名な作家魯迅の小説『故郷』の中に現れています。豆腐屋さんの看板娘楊さんのことを「豆

腐西施」と言いました。この作品の影響で、店に客を引き付ける魅力な娘のことは「〱〱西施」というようになりました。食べ物以外に、現在日常生活の中には歴史人物の名前をつけるものもあります。例えば「中山服」と言う服装は孫文の名前を使っています。「中山服」は日本語で「人民服」と呼ばれるもので、孫中山先生が日本留学中に日本の学生服をモデルにデザインして、封建社会の清王朝と決別する新しい中国の象徴となりました。その服装の腕に3つボタンがありまして、それぞれ三民主義の「民族、民権、民生」を象徴しているそうです。毛沢東はこの服を愛着して、外国要人と会う際に必ず「中山服」の姿で現れたため、英語で「Mao suit」とも訳されています。ある人物の名前を付けて、中国で一時的に

流行した服装がもうひとつあります。70年代山口百恵が出演したテレビドラマの主人公幸子が着たワンピースを「幸子スカート」と命名され、結構人気がありました。以上の例は言語コミュニケーションの語用論でいうと、語彙活用の「範疇延伸(category extension)」や「換喩(anetonymy)」などの現象です。言葉が実際に使用される時、本来の意味から離れて、活用される現象です。西施は春秋時代の人物から「美しい女性、風景」まで拡大され、美しい女性、風景がその関わる人物の名前で入れ替えて呼ばれるようになってなのです。そして、どの言語も同じ現象が存在し、人間はコミュニケーションする際に自動的にその語彙の変化を把握できる。これは実にすばらしい人間の能力であるといつも感じています。■

2012年
11月16日
金曜日

山田 仁 准教授（イギリス文学）
Y・東京・人間

イタロ・カルヴィーノの小説『宿命の交わる城』が楽しそうに実践したタロットカードの恣意的な解説に触発されて、横尾忠則の写真集『東京Y字路』（国書刊行会 2009）を繰る。始めも終わりもなく、次々に同じ造形が目突き刺さる。Y。分岐する街路。Yによって貫通され引き裂かれる地面と建造物。大都会に刻まれたYの刻印集である。

写真集のタイトルを「Y」と「東京」に引き裂いてみる。何事も人生に置き換えて考える人なら、Yに人生の岐路をみるだろう。あるいはYは血管の分岐ではないだろうか。さらに猥褻を好む人ならYに大腿部の分岐を見出し、分岐路に挟まれた現象にエロチックな妄想を膨らませるかもしれない。Yが生命に近く身体性や肉体の暖かみを伴うのは、Y染色体を予感させるからかもしれない。

い。Yは性の分岐と確定、あるいは男性の自己主張か。Yの必然性について考えてみる。十字路やT字路、一本道のIではなくなぜYか。いずれの字体も90度乃至は180度に支配されていて効率的であり現代の都会にふさわしい。それに較べてYのなんと非効率なことか。鋭角的な二股に挟まれた家屋の内部は、おそらく部屋の一角が尖っていていびつな輪郭を呈しているに違いない。家具を置くわけにもいかず、いかにも非効率で空虚な空間を住人は持て余している筈である。また、大地を引き裂く形態としてYをみるならば、Yは暴力的でありグロテスクでさえある。拡散の起点としてYを想像してはどうか。二股に分岐した道が、限りなく分岐を重ねて高層ビル群の中に分け入り消尽する……。空間は無限に断片化され、区画はねずみ算

式に拡散し増殖する。これは、ホルヘ・ルイス・ボルヘスの「八岐の園」を彷彿させる。さらに、十字路やT字路はその平凡さ故に日常に浸透していると考えれば、Y字路は非日常を代表するかもしれない。非日常性を補強するのは、被写体としての人間の不在である。住民とその生活感が粘液のように糊着した街から、人間が排除される。日常がこびりついた空間に、瞬間的に非日常を現出する。

このように想像すると、東京であることの必然性も理解できる。田舎の道には、そもそも人間が不在であることが日常なのである。人間の充満する都心であるからこそ、人間の不在が非日常を喚起する。日本の、そして世界の首都としての東京。世界中の人、物、そして情報が集結し、機能性と効率性を極限にまで追求す

る東京にYが巣くう。ミクロ経済学の要諦は「最小の費用で最大の効果をあげること」（最適化行動）にあるらしいが、世界経済の中心を形成する東京で、Yが最大のコストから最小のベネフィットを抽出しているという現実をどう受け止めればよいのか……。

だが、これこそ人間ではないか。Yが刻印を残す大都会東京こそ人間なのである。Yは世界中にある。Yは人間の中にある。人間はYを忘れた。人間にはYが必要だ。

2012年
11月26日
月曜日

因果について

宮脇幸治 専任講師（計量経済学）

私は計量経済学を教えています。計量経済学とは、データを分析することを通じて、経済学の理論を検証したり、経済政策においてより定量的な意思決定を行ったりすることを目的としています。計量経済学には重要な概念がいくつかありますが、最も重要な概念は因果です。

字義的には、因果とは原因と結果もしくはそれらの関係を表すものことです。例えば「暖房をつけると暖かくなる」は、因果に関する一つの言明です。つまり暖房という原因があり、その結果として部屋の気温が上がることを表しています。この例においては、因果というものは明らかであり、疑問の余地がないように思えます。しかし本当にそうでしょうか？実は、因果とは目に見えない関係であるため、科学的な検証が難しいことが多いのです。

そのことを理解するために、具体的な例を考えてみましょう。皆さんが製薬会社に勤めていると想像して下さい。ここでは病気を治すための薬が日夜開発されています。しかしそれは本当に効果があるのでしょうか？もし本当に効果があれば、「この新薬は、目的とする病気に対して効果がある」といえます。これは因果であり、原因は新薬で、結果は目的とする病気の治癒となります。

この因果を確かめるにはどうすればよいでしょうか？最初に示した暖房の例とは異なり、すぐには分かりません。なぜなら、新薬を投与した人が新薬を投与しなかった場合と比べて、どのくらい良くなったかが分からないからです。同じ人に対して、新薬を投与した場合と投与しなかった場合を同時に観察することは出来ません。投与してしまえば前者

が、投与しなければ後者しか観察できないからです。それでは、新薬の効果はどのようにして確かめられているのでしょうか？もしくは、このような因果はどのようにして確かめられているのでしょうか？

イギリスの統計学者ロナルド・フィッシャーは次のような方法を提案しました。手順は次の通りです。新薬を試すために似たような背景の被験者を集めます。それぞれの被験者に対して、新薬を投与するか偽の薬、プラシーボ、を投与するかをランダムに決定します。そして、新薬を与えた被験者の平均的な効果とそれ以外の被験者の平均的な効果を比べます。もしこれらの間に違いがあれば、因果があることとなります。このような手順のことを無作為化比較試験と呼び、投与したグループを実験群、投与しなかったグループを

対照群と呼びます。この手順において重要なことは、実験群と対照群への割り付けに偶然性を用いることです。

なぜ偶然性が重要なのでしょうか？新薬を用いるかどうかを被験者が自由に決定する場合を想像してみましょう。それぞれの被験者には選好がありますから、それによって新薬を用いるかどうかを決定するでしょう。それと同時に、その選好が被験者の健康状態に影響を及ぼしている可能性もあります。このように別の要因があつて、薬を服用することとその結果に影響を及ぼしている可能性を制御するために偶然性を用いているのです。

因果という目に見えない関係を浮き彫りにするために偶然性を用いる、という点は大変興味深いと思います。

2012年
11月27日
火曜日

嚴 廷美 准教授 (社会言語学)

「韓国若者の就職事情」

今日は韓国の若者の就職事情について考えてみたいと思います。ここ数年ネット上で10代の青少年の相談をしてきているのですが、最近、珍しく20代のソウル在住の大学生からの手紙をもらいました。手紙の内容は以下のようなものです。

「10代の時は勉強を頑張っていたいい、塾などに通いながら一所懸命に勉強しました。そんなによくはなかったのですが、一所懸命に頑張った入ったソウルの**大学の経営学科。しかし、大学に入って周りの語学研修に行く波に流れ語学研修にも行ってきました。語学研修から帰ってきた後はすぐに軍隊に入隊しました。除隊してからは就職のためのTOEICの勉強に励みました。塾に通いながら頑張り、TOEICの点数は900点台。しかし、就職のためには資格にインターンシップもや

らないといけないというので、テレビ講義を受けながら塾にも通い資格も取りました。インターンシップも何とかやることができました。学校の勉強もいい成績を取めましたし、そして、いざ就職しようと就職活動をするときIMF時代より厳しい就職難が待ち受けていました。この前、毎経(韓国の経済新聞の一つである「毎日経済新聞」の略字)によると、SKY(韓国トップの3大学の英語のイニシャル。SはSeoul National University、KはKoryo University、YはYonsei University)も就職ができないそうです。あ、あ、では、面接の塾にも通わなければならぬのか、塾にお金を注ぎ込むために就職しようとするのか、本当に分からないこの世の中。ナニを、ドノヨウニ、もっと準備をすればいい就職先が見つかるのでしょうか。美容整形

もしなければならぬのかなあ……」
韓国政府統計庁の発表によると2012年度10月の20代の雇用率は43カ月ぶりの最低値である57%であるそうです。20代の半分くらいは仕事がないということです。韓国は周知の通り、教育熱も高く、高校生の大学進学率は世界トップの80%を上回っています。また、2011年度「OECD学業成就調査」から、2011年度青少年の学習時間は、韓国の青少年が最も長く、8時間55分に及んでいました。日本の場合は6時間22分で、韓国同様、学歴社会といわれている日本とも2時間半の差があるのです。また、統計庁の調査によると、青少年の悩みのトップは勉強や成績で、38.5%を占めています。韓国の青少年たちは長時間の学校や塾などで大学進学のために勉強し、大学進学後は就職のために膨大な量の資格や英語などの勉強を

強いられています。その代償として良い就職先が見つかるわけでもないのです。就職先が見つからないと恋愛も結婚も難しくなります。結婚したとしても出産をあきらめざるを得ないこともあるのです。このような現状に追いやられていく若者を総称し「サムボセデ」といい、三つのことをあきらめた世代という意味です。三つとは恋愛、結婚、出産のこと、年代としては25歳から33歳くらいまでの世代を意味します。このような厳しい社会環境の中で、相談者の若者に対して、もっと「頑張ってくださいね」とか、「あなたは周りの流れに流されてやってきたのであって、本当に何がしたいのか真剣に考えて勉強をしたの？」と批判することは私にはできません。皆さんならこの相談者の手紙に何と答えるのでしょうか。答えをそれぞれ考えてみましょう。

2012年
12月11日
火曜日

大高博美 教授 (言語学)

ユージン・ナイダの聖書翻訳

本日お話しするのは、アメリカで「聖職者」兼「言語学者」として活躍したユージン・ナイダ (Eugene Nida: 1914-2011) による斬新な聖書翻訳理論についてです。ナイダは昨年8月に96歳で亡くなりました。聖書翻訳という分野で不動の業績を上げた言語学者なので、この機会にぜひ一度彼について話しておきたいと思えます。

ある宗教が人種や国籍の壁を越えて多くの人々に支持されるようになること、使用言語が複数に跨ることになるために、その経典(聖典)はどうしても翻訳される必要性が出てきます。しかし、しばしばそこには困難な問題が生じます。翻訳一般の問題として、文法や語彙体系あるいはまた社会環境や文化的背景などが異なること、原語から翻訳語へ変換することは極めて困難だからです。つま

り、対応する語句が存在しない、あるいはどういう語句を当てても意味がずれるということがどうしても起こってしまうのです。16世紀のイエズス会による日本布教で、「仏教用語を借用して教義を説明したためにキリスト教が仏教一派であると一部の人々に誤解された」と、以前、何かの本で読んだ記憶があります。

このように難しい翻訳ですが、キリスト教界にあってナイダは、「動的等価翻訳理論」(functional equivalence)と呼ばれる新翻訳理論を用いて聖書翻訳に新風を巻き起こしました。1943年のことです。ゆえに彼は、今では「現代聖書翻訳の父」と呼ばれています。彼によれば、聖書翻訳に使用される言語表現は、理解しやすいだけではだめで、文化的にも意味をもつものでなくてはなりません。ナイダ以前は、聖書翻訳は主にヨーロッパキリス

ト教界の指導者たちの手によってなされてきました。彼らはキリスト教の教義には造詣が深くても、必ずしも翻訳のプロではありませんでした。結果、彼らに依る様々な言語への聖書翻訳はほとんど逐語的で、修辞技法も顧みられないものでした。このような状況であったために、せっかく翻訳しても言葉を通して聖書の教えを読む人の心に響かせることが困難でした。例えば、聖書の中で語られる出来事は温かい地域で起こったことが多く(しばしば砂漠も)、登場する動物は羊、らくだ、ドンキーなどが中心です。これらの題材はすべて、この地域に住む人にとっては独特の文化的意味(比喩も含めて)をもっていると考えられますが、例えば雪深い北極圏に住むイヌイットの人々に読まれた場合はどうでしょうか。セイウチやアザラシ、アシカなどの他見たことのない人が、聖書に出て

くる「羊」をうまくイメージできるでしょうか。この言葉のもつ比喩的意味「従順」なども理解できませんでしょうか。深い文化的理解なくして良い聖書翻訳はできないと考えたナイダは、イヌイット語 (Inuktitut) に翻訳するために24年間を費やしたそうです。これまで聖書を800語以上に翻訳しているナイダですが、異例の長さです。ちなみに、アフリカの一部では、「羊」はやっかいもの扱いされる動物なのだそうですが、こうなると聖書で語られる羊と羊飼いの感動的な話も否定的なニュアンスをもって読まれてしまう可能性があります。翻訳の難しさをあらためて教えてくれる事例です。最後に、ナイダがかつて語った印象的な一言を引用して本日のお話を終えます。

No matter in what language one read the Bible, the goal was "to read it, to understand it and be transformed by its message." ■

2012年
12月17日
月曜日

韓 燕麗 准教授（映画史）

海の向う側の浪

二つの曲について話そう。一つは、誰もが一度は耳にしたことがあるクラシック音楽の名曲で、ベートーヴェン作曲の「歓喜の歌」。もう一つは、おそらくここにいる皆さんが誰も聞いたことがない、チベット民謡で「シガツェワ」という曲である。

中国では、文化大革命の10年間、西洋由来のクラシック音楽が「資本主義敵国の文化」として禁止されていた。文化大革命が終結した1970年代末から、再びクラシック音楽が庶民に享受されるようになり、ラジオではクラシックの名曲を録音させるための長時間番組が毎日のように放送されていた。そのおかげで、私は小学校に入る前から、クラシック最高の名曲を一通りぜんぶ聞いた。一生の友になるこれらの名曲の数々のなか、その当時に好きだったのは、ベートーヴェンの交響曲第9番「短調の第4楽章」、「歓喜の歌」として親しまれる合唱の部分であった。音楽史におけるその記念碑的な意義について知ったのは、無論だ。ぶ後のことだが、幼少時代の私に

は、単純にその歓喜に満ち溢れ、気持ちを高揚させるメロデイがとて心地よく感じられた。

それから約20年後のことである。ある日テレビから「歓喜の歌」のメロデイが聞こえ、大好きな曲なのでテレビに近づいてよく見たら、コマリーシャルにその曲が使われていた。ただ歌詞は中国語によるもので、およそ以下の意味になっている。「私は、海の向こう側で、波がどうなっているのか見てみたい。私は、自分と同じような、好奇に満ちた目と見つめ合いたい」。馴染みのあるメロデイと相まって、中国少年合唱団によって歌われたその歌詞は、私の心に響いた。

このコマリーシャルを見た一年後、私は京都であらたに学生生活を始めていた。以来十数年、世界中の海辺でさまざまな波を見てきた。自分と同じような、あるいは異なるような、さまざまな目と見つめ合ってきた。人生って不思議なものである。さて二曲目の話しよう。今年の5月、川辺ゆかさんという神戸生まれ神戸育ちの日本人女性と知り合っ

た。ご自宅で開かれる小さなコンサートに招かれた私は、はじめて乗った神戸電鉄に揺られ、たった十分後には都会の喧騒から脱出し、藍那駅の近くにある築200年の古い民家の座敷に座っていた。チベットの伝統衣装を身にまとった川辺さんは、ダムニエンというチベットの弦楽器を弾きながら、「シガツェワ」などチベットの民謡、そして日本の田植えの唄や東欧の民謡などを歌った。5月のお庭は緑にあふれ、心地よい風の中に草のおいが交じっていた。遙か遠いチベットからのメロデイが、日本の伝統家屋の空間のなかで響き、不思議なことにもよくマッチしていた。優しい時間が流れるなか、私は心の中でひそかに決めていた、「よし、今年会った素敵な人ランキング、女性ベストワンは川辺さんでしょう！」と。

川辺さんは大学在学中、家庭の事情で心が傷つき、どこでもいっから遠いところに行きたいという一心でチベットに出かけた。そこで出会ったチベットの民謡に魅了され、今日のチベットでは失われつつある伝統

民謡を、チベット語で歌い続けている。川辺さんは現在、日本国内をはじめ、オランダ、ベルギーなどで演奏活動もやっている。「うた旅行家」と自称する彼女は、自分がやっていることを「自らの足で訪れ、時間をかけて、宝物のように拾い集められた歌を異国の言葉と美しいメロデイで表現」と言う。

ふとしたことで、世界へ足を向けた私と川辺さんがいた。あなたが海外に出かけるふとしたきっかけはどこにあるのだろうか。創立以来、世界市民の育成をミッションとしてきたわれわれの大学は、多文化と共生し、国際的に通用する人材を育成するために、海外への学生派遣プログラムを拡充・整備している。また、文部科学省は2012年の「グローバル人材育成推進事業」に関西学院大学の構想を採択したことを、ご存じだろうか。世界へ新たな窓を開けるために、海を渡って、この海の向こう側の波を見に行こう。その行動は、多少の苦勞を伴うかもしれない。しかしそれは、人生をより豊かなものにするに違いない。

2012年
12月20日
木曜日

井口 泰 教授 (労働経済論)

若い世代が担うアジアの未来

マタイによる福音書11章25—30節

経済学部では、春学期に「経済学トピックス—経済と倫理—」という授業を実施しています。経済学部で学ぶ人たちに、経済の問題と併せ、倫理の問題に目を向けてほしいからです。

2012年6月から9月にかけて、竹島をめぐる日韓の対立が、また尖閣諸島の問題を巡って日中の対立が激化しました。特に中国では、満州事変の記憶を呼び起こす9月18日前後に反日デモが発生し、日系企業に被害が及んだ事件は生々しい記憶として残っています。

こうした厳しい状況下で、経済学部の井口ゼミと国際学部の志甫ゼミは、2012年10月下旬に、中国・浙江大学の樂教授のゼミを15名で訪問し、現地で、日中共同国際ゼミナーを開催しました。また、11月下旬にも、韓国・延世大学のキムサンジュン先生のグループを24名で訪問し、第9回の日韓合同ゼミナーを実施しました。中国では、安全確保のため

杭州市内での行動には浙江大学の学生が付き添い、トラブルは全くありませんでした。

共同ゼミナーで、日中韓の学生に共通する関心は、どうしたらグローバルに活躍できる人材になれるのかというテーマでした。学生たちは、英語がもはや外国語ではなく、「共通言語」だということを体験しました。また、日本の侵略戦争の負の遺産があっても、中国人学生と日本人学生が、若い同世代の人間として互いに共感しあえると判ったことも貴重な成果です。日韓のゼミナーでは、延世大学の学生が、日本の植民地支配は過去の事実としても、日本の同世代に対し悪い感情はないと発言し、救われる思いがしました。

なお、2013年2月18日、閑学経済学部に、浙江大学と延世大学の学生を5名ずつ招待し、「学生ラウンドテーブル会合」を開催し、日韓の政治、経済、社会問題について3大学が一緒に議論することができ

ました。

さて本日の聖書は、有名なマタイの福音書の箇所です。そこには「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとにきなさい。休ませてあげよう。」と書かれております。イエスは、自分中心の尺度ではなく、イエスの教えに従って生きるよう、私たちに要求します。これこそ、まさに倫理に関する勧めです。

実際には、このように聖書について語ると、かえって皆さんをイエスから離れさせてしまうことあります。それは、イエスが私たちに要求することがあまりに困難で、実行できる人はいないと思えるからでしょう。

確かに、イエスは、私たちが通常負っている「重荷」に加えて、「くびき」を背負うように求めます。重要なのは、イエスに従うということ、私を現在悩ませ苦しめている重荷を解消する訳ではないという点です。

それでも、イエスが招く通り、私たちがもっと大きな課題を背負って生きる勇気をもつなら、次第に、自分が日常抱えているちっぽけな困難や苦しみなど、深刻に思えなくなると思います。こうして、私たちはこれら重荷から解放され、創造的な生き方ができるようになるのです。

現在、日本経済は、解決困難な困難を内外に本当にたくさん抱えています。しかし、アジアワイドで周辺の新興国と協力し地域の問題を解決するという、大きな課題に挑戦することが大事です。若い世代が、この課題に挑戦することは、未来に挑戦する勇気を生み、目前の困難に屈しない力と知恵を持てるようになります。そのためには、政治摩擦が激化しても、日中又は日韓の人的交流や経済交流を縮小させてはならないはずで

2013年
1月10日
木曜日

舟木 讓 准教授 (宗教哲学、キリスト教学)

経済と倫理

——人へのまなざしを喪失した社会——

2012年12月20日に今年度最後の大学人権問題講演会が開催された。本学では1971年に発生した

「教員による「部落差別」発言をきっかけとして本格的な人権問題への取り組みと教育が開始され、その一環として春・秋それぞれ2名ずつ外部より講師を招いての人権に関する講演会を行っている。そこで取り上げられる主題は、その時々問題となつてくる事柄をはじめ、部落差別問題・貧困・セクシャルマイノリティに関する問題等である。また、特に後者に関してはこれまで継続的に、講演会だけでなく研究会等を開催してきている。そして、今回の講演では貧困「問題」を取り上げることとなったが、その講師としてお招きしたのは、湯浅誠氏であった。

湯浅氏は、日本におけるホームレス「問題」を契機に日本の貧困問題に対して1995年より今日まで活

発な活動と発言を続けてこられた方である。今回の講演は自らの貧困問題への関わりが主たる内容で、特にこれから社会に出ていく若い学生諸君に向けての貴重なメッセージが込められた大変意義深いものであったが、その中で最も驚いたのは、日本に構造的な「貧困」が存在していると認められたのがごく最近のことであつたという点である。

現在、マスコミによって日本の貧困率が話題にされる際、特に若者の貧困や非正規雇用の問題が当たり前のように取り上げられているが、湯浅氏が活動を開始されてから約15年は、日本に「貧困」が存在していることを公に認めさせることに費やされたことである。すなわち生活保護等の社会保障が「整っている」「豊かな」日本において「貧困」に陥り、ホームレス状態にまで陥るのは、あくまで「特別」な「個人的」

理由があつてであり、あくまで個人の責任であるとの認識がまかり通っていたということなのである。

関学ではホームレス「問題」に関してはすでに当事者をお招きしてのトークセッションや懇親会等を幾度か開催し、またパネル写真展等を通じて、その現実を知らせてきているが、そこで出会うホームレスの方たちが、決して特別な存在でないことは言うまでもない。しかし、我々は、自らが望まないことや回避したい事柄に関してはいわゆる「切断操作」によって、思考を停止し、それに対する「まなざし」を閉ざしてしまいがちである。眼前にある「貧困」に関わることを避けるあまり、明らかに存在しているものを存在してないと言いつける恐ろしさをそこには感ぜずにおれない。経済活動は、ともすれば一見経済「発展」に不必要あるいは足かせとなつたり、時には

障壁になるものを厭い、また、否定したりしがちである。それは2011年の原発事故以降に明らかになった日本の原子力行政から見ても明らかであろう。

しかし、経済はそれのみで存在しているのではなく、あくまでも人の営みが背後に存在し、人が軽視されるところに本来の経済（発展）はあり得ないというのは自明のことである。しかし、そのことから目を背けて、自らに都合の良い現状認識で済ませたいという誘惑は常に我々につきまとう。その誘惑に気づき、自らが本当にこの社会の現実、また、現実の中に存在する一人一人の人間の存在と営みにそそぐ「まなざし」を忘れないことの重要性に今日あらためて気づきたいと思う。

2012年
12月5日
水曜日

●退任教授最終チャペル講話／篠原 久 教授

上ヶ原半世紀

——仁川、甲山、アダム・スミス——

私が関学経済学部に入學したのは1963年の4月ですので、来年2013年の3月には、それからちょうど50年目になります。生まれたのは1944年の5月ですので、

来年3月には満68歳として定年退職となります。入學した4月に現在の「基礎演習」が開始されましたので、私はその第1期生、今年入學した学生諸君は第50期生となります。昨年からの基礎演習を担当しておりますので、当時第1期生であった学生が、現在第50期生を教えていることとなります。

今年の7月に、来年3月発行の『エコノフォーラム』に掲載したいというアンケートがエゴゼミ委員から届けられましたので、本日はその回答の紹介という形で半世紀の一部を振り返らせていただきます。アンケートには文章で答えるべき問いが七つ

ありました。以下それぞれの問い「1」と、その回答『』およびコメント「」です。

(1)「経済学がおもしろいと思う理由を教えてください。」

『18世紀に「モラル・フィロソフィー」(道徳哲学)という学問体系の分野から「経済学」が誕生したという、ひとつの「ルーツ」が存在するという事実があるから。』

「この「ルーツ」の担い手がアダム・スミスで、私は学部の卒業論文では『国富論』(の資本蓄積論)を、修士論文では『道徳感情論』(新しいコミュニケーション論としての)倫理学をとりあげ、その後スミスの遺著『哲学論文集』と学生ノートとしての『修辞学・文学講義』を精読したあと、博士論文では「スコットランド啓蒙思想」のなかにスミスを位置づける努力をしました。」

しかしながら現在に至るまでアダム・スミス思想の「核心」を把握できたようには思われず、「日暮れて道遠し」という感じですか。」

(2)「学生時代、どのような学生でしたか? (自慢したいこと、頑張っていたことなどを教えてください。)」

『出来るだけ多様な(英・仏・独・西・中というような)言語を(とりわけspeaking&hearing能力を中心に)修得しようと「がむしゃらに」頑張っていました。』

「多様な言語のうち英語の学習は職業柄(研究上)ずっと継続しておりますが、仏・中は中断したまま現在に至っています。」

(3)「今の日本をぶった切ってください(日本のダメだと思われることを教えてください。)」

『中学校(および高等学校)での

英語教育で、「筆記体」をまったく教えていないという、非常に驚くべく、悲しむべき(かつ憤慨すべき)事実。』

「したがって私が担当した「英語経済書購読」では全身全霊で「筆記体」を教えました。」

(4)「先生が今までの人生で一番、幸せを感じたエピソードは何ですか?」

『長期間の訓練によって修得したフランス語の「アール」(R)の発音を確認しながら、はじめて孫娘と手をつないで歩いた休日の散歩道。』

「正確にはフランス語の「R」は「エル」と発音されますが、この喉の奥を連続的に震わせる「ルR」の音は娘と孫娘をあやすときにひじょうに威力を発揮しました。」

(5)「これから挑戦したいと思っ

ていることを教えてください（理由も添えて）。」

《長年の教員生活のあいだに入手した多種多様な（未読の）「書籍」のうち、これはと思われるものを、少しずつ征服していこうと「思っ

て」いること。（理由は、そこに「読んでほしい」という本が存在するか

ら。》
「読んでほしいという本が存在するから、というの

はきざな表現ですね。まず研究室から「書籍」を運び出すのが最大の問題点になってお

ります。」
（6）「人生の中で一番考えて工夫したデートの場所はどこですか？」

《大和路とアイス・スケートリンクと卓球場。》
「これはコメントの必要はないと思われ

……。》

「委員の意図は、デートに関する「1日のプランや一番工夫したこと」を書いてほしいということだと、あとで気づきましたが、私は「デートの話題」は前の質問で終わって、通常のルーティーンとしての1日のプラン等を書いてほしい、という意味に誤解しておりました。

しかしこの誤解回答内容が38年間の教員生活ルーティーン

の一端を物語っており

ますので、当該回答内容についてのコメントをさせていただきます。……仁川の左岸に沿って関学に向かうと甲山が右岸から左岸に移動してくるのです。甲山はまず「翁橋」に近づいたあたりでその姿を現し、右岸をゆっくりと前方に進んで

いったあと、やがて遠方の「蓬莱橋」を渡って左岸の住宅群の背後にその姿を隠します。その「蓬莱橋」を前方に見ながら関学正門に連なる「爪先上がりの道」を登ると（House No.1からHouse No.9までの）「外国

人住宅坂」に到達します。この外国人住宅のそれぞれの「邸宅」にはみごとに松（赤松と黒松）が生い茂っています

が、これらはかつての仁川の土手の松林の一部だったということです。荒川としての仁川が多量の土砂を運び、その土砂の上に現在の

住宅群が入ったということなのでしよう。House No.3とHouse No.4の間の細道を左に折れるとF号館と関学会館との間に位置する「竹林」を右手に臨むこととなります。5月ころには「タケノコ」が芽を出し、その急速な成長ぶりを毎年ここで誇っているように思われます。「昭和34年卒業生……」という石碑——

「34年卒業生」以下の文字は現在では土のなかに埋まっていますが、その部分の文字は「有志寄贈」であったように記憶しています——がある

その竹林をあとに見やるころにはやがて中央芝生の「時計台」が右手に現れ、その背後に、仁川を渡ったあとと住宅街に身を隠していた「甲山」

が、一気にその勇姿をあらわにします。そのあとはキャンパス内の諸処にクスノキの大木を目にすることに

なりますが、そのうちのいくつかに「保護樹木・西宮市・昭和49年」という標識がつけられています。昭和49年（1974年）、この

年に私は経済学部の助手に採用されたのですが、それから38年目、第50期生の基礎ゼミでは「自然と人間と哲学のルーツ」を探る『ソフィアの世界』をテキストに用いております。専門科目の「社会思想史」では、試行錯誤の末、現在ではアダム・ス

ミスによる「哲学史」（遺著の『哲学論文集』所収）の枠組みを参照しつつ、古代のギリシャ哲学（その二つのルーツとしてのイオニア学派とイタリア学派）からスミス思想体系にいたるまでの歩みを講義の主題にしてきました。「外国人住宅坂」に沿って並ぶ松の木がかつての「仁川」土手の松林の一部だったように、「ルーツに思いをはせる」ことがアダム・スミスの課題でもあったのです。」

2012年
12月18日
火曜日

●退任教授最終チャペル講話／竹本 洋 教授（経済学史）

私たちに地平線は見えるか

私たちは例外なく「時代の子」である。人は親を選んで生まれてくる。とはできないから、いつの時代のどんな社会に生をうけるかは運命としきれない。とはいえど、時代の人も与えられた自分の命をいづくし、真つ当に生きぬきたいと願って、にちがいない。いまでもその願いに変わりはないであろう。しかし真つ当に誠実に生きることが今日ほど難しい時代はないのかもしれない。世界大に広がった競争の圧力のもとで精一杯手を抜かずに生きようとすればするほど、人はいつのまにか目にみえない巨大な機械の歯車の一つとなり、ただ闇雲に回り続けるだけということになりかねない。ユダヤ人をガス室に送り込んだアイヒマンは、その責任を問われた裁判で、「私は揺るぎない義務感に従って、自分で課された仕事をかたづけただけにすぎない」と反論した。かれの自意識では、ガス室送りをする分にあたえられた任務と思ひ定め、それを忠実に滞りなく遂行したにすぎない。かりにその責任が問われるとしたら、かれにその「仕事」を命じた者が、あるいはナチズムという怪物のような強大なメカニズムにあると抗

弁したかったのである。してみると、かれにとつては義務と信じるその仕事の意味は彼の頭のなかに思い浮かぶことはなかったし、またそれを考えたくもなかったのかもしれない。現在でも私たちはそれぞれの場自分の仕事に精励し、その任務をはたそうとしている。原子力発電の開発に携わった研究者や技術者たちも、効率性の高いしかも「安定した」新たなエネルギー源を供給したいという社会的な使命感をもっていたはずである。またiPS細胞の研究開発にたずさわる人たちも、一刻も早く成果をあげ難病の治療に役立ちたいと述べている。その熱意と誠実さを疑う者はいない。経済学者もそうした技術開発競争や企業間の競争の経済的有益性を説き続けている。しかし残念なことに当の研究者や技術者は、そうした技術やその開発を促す競争という制度の目前の有用性を主張しなくても、その技術開発や競争の行き着く先を、とりわけ画期的といわれる社会的影響力の大きい成果ほど、その思わぬ破局的結果を予見しえない。いいかえれば最先端の科学技術の開発者だけでなく、社会の

片隅でルーティンの仕事にたずさわっている者も、競争にせかされながら、その仕事に誠心誠意うちこみ当面の成果をあげようとするのでかえって、未来への無責任という逆説的帰結を背負い込むことになりかねないのである。科学研究や技術開発と一見無関係なところにいるとおもわれる私たちもそれに賞賛の拍手をおくり、さらにはその結晶である商品やサービスを愛用することで、間接的にこの時代に加担しているといえる。これが自由競争と科学技術万能（各種の「力」への信奉）時代のつらい背理のようにおもわれる。

ブータンの首相ジグメ・ティンレイは、「私たちは地平線を見つめる人のように、どこに行きたいのかは知っています。私たちは小さな国ではあるけれども、そこに向けて道を造っていません。急ぎ過ぎず、むちやをせず、人間性をたもって」と語っています（朝日新聞2012年8月1日インタビュー）。一国の指導者の背筋を伸ばした美しい言葉である。ひるがえって私たちがといえば、地平線を望める風景をとうに失ってしまったし、精神の地平線あるいは未来へのはるかな眼差しも見失っている。私にも地平線はみえないが、地平線をさえぎっているものを想像力で乗り越え、そこから私たちの生（この時代にともな生まれてきたことの意味と根拠）を眺めることができたなら、と夢想している。このころは、見たいものだけを見、聞きたいことだけを聞き、つき合いたい人だけとつき合う、という気風が強くなり、異なる意見や嫌いなものなどには目も耳も心も閉ざし、一方的に自分の意見や好みをしゃべり続け、それをおしつけるという場面にでくわすことがある。あまつさえ自分より弱いと見込んだ者を「異物」のようにみなして、攻撃し排斥することが日常化している。こうした状況のもとでは、あえて聞き、読み、そして見るという強靱な意志を取りもどすことで、地平線を垣間見ることができるとはならない。かのカントも「あえて賢くなれ」と説いていた（啓蒙とは何か）。賢明たらんとすれば、常識と化したものの方や社会の目にもみえない掟やあらあらしい時流にときには背を向けることになるかもしれない。しかしそれが未来の人たちに背を向けることになるかどうかは誰にもわからないことではないだろうか。

2013年
1月11日
金曜日

利光 強 経済学部長

4年間の学生生活を振り返る ——社会人としての第一歩——

過ぎてしまえば、大学4年間の学生生活はとも早かったと思われるでしょう。入学して間もなくの頃は、初めて体験すること（さまざまな説明会、Web上での履修登録、サークルや部活の勧誘、大学の授業、など）ばかり。右往左往しているうちに、初めての定期試験。夏休みでやっと一息。秋からどうにか学生生活（バイトや旅行、友達づきあい、など）をエンジョイしはじめ、2年生の秋学期から研究演習でのゼミナール活動。少しばかり経済や経済学に興味を持ったところで、3年生も終了し、シューカツ（就職活動）に突入。やっと内定をもらったと思ったら、卒業研究論文の作成。そして、単位の数を気にしながら卒業式へ。めまぐるしい4年間であったと思います。

そこで、卒業を目前にして、自分

がすごしてきた学生生活4年間を振り返ってみてください。サークルや部活動、そしてバイトばかりの4年間では、少しさびしいと思いませんか。あるいは、ある新書のタイトルではありませんが、「学生生活の思い出はシューカツです」ということでは、あまりにも貧相な大学生活としか言えません。大学で確かな学びができたのか。社会に役に立つような力を身につけることができたのか。ぜひ、自己点検・自己評価してみてください。

確かに、短い4年間では、経済や経済学のことを深く学べなかったと思います。ただ、社会や経済についてわずかながらでも興味や関心を持ち、自分で調べ、考えた経験が社会に出てから、きつと役に立つときがくると思います（そうといった経験談が、経済学部ホームページ「われら

関学経済人」に掲載されています。将来、皆さんもこの欄に登場してください）。

さて、経済学部では、学位授与方針（ディプロマ・ポリシー、略してDP）に基づいて、卒業必要単位を取得したものに学士号を授与します（経済学部ホームページに掲載されているので、卒業前に必ず見てください）。そのDPに書いてある基準を自分が果たして満たしているのか、どうか、社会へ出るまえに、きちんと自己判定をする必要があります。それが、社会人としての第一歩であると考えます。自分がどのような人間であるかをきちんと分析できていれば、社会に出てからも恐れることはありません。

大学の門戸は常に社会に対して開かれています。社会に出てからも、学びなおしの機会はいくらでもあり

ます。そしてまた「卒業したので、関西学院大学と縁が切れた」ということはありません。皆さんは関西学院大学経済学部の卒業生として、これからの長い人生を送っていくことになります。その長い人生を送るなかで、大学のモットーであるMastery for Service（奉仕のための修養）を忘れないでください。それは、世界市民として社会のために何らかの形で貢献をしなければならぬ、というmissionを意味しています。そのための学生生活であったことを振り返り、自身の4年間を総括してください。

1組 篠原教授

長谷憂也 キリスト教に関するルーツ及びお話
 中野美咲 甲子園球場のルーツ
 古山貴大 サザエさんの人気の謎
 大西一澄 ルーツを求めて『少年ジャンプ』について
 萬谷利華 「ルーツを求めて」[名字について]
 杉原 蓮 コーヒーのルーツについて
 久保和也 貨物列車と鉄道コンテナ輸送のルーツ
 座間慶彦 世界に変化をもたらした男 スティーブ・ジョブズとその会社「Apple」のルーツについて

押谷直樹 自転車のルーツ
 石尾拓也 ペットのルーツを求めて
 熊取圭佑 ルーツを求めて [自動車のルーツ]
 田中健太 オリピックの歴史
 山下高弘 ルーツの求めて——数のひろがり——
 和久沙織 ディズニーランドのルーツ

臼井千紗 テレビのルーツ
 坪根健悟 小林一三と阪急電鉄
 西條翔大 カラオケの歴史
 斯波美早 ウォークマンのルーツ
 石本稚香子 パンのルーツ
 妹尾宗紘 THE BEATLES のルーツを求めて
 藤本勝也 宇宙のルーツ
 ★坂井雄貴 宝塚歌劇団のルーツ——小林一三の挑戦——
 江南真由子 ルーツを求めて [バーバリーについて]
 大垣裕祐 ラジオのルーツ
 中田有香 ルーツを求めて [コンバースについて]
 中根諒哉 Google のルーツ
 三島由華子 クリスマスツリーとイルミネーション
 北岡佑弥 ルーツからの成功と可能性 [ユニクロについて]
 佐々木真理 サンフレッチェ広島島の歴史について



2組 根岸教授

井上貴文 新たなエネルギーの導入
 糸井 誠 自殺について
 中島謙太 京都府は経済的に発展している府だと言えるか

岩田和也 日本の領土問題
 後藤優希 外国とのコストパフォーマンスについて
 ★森 毅 なぜガンダムは長寿アニメとなりえたのか
 佐々木竣平 なぜ CD は売れないのか
 津田健登 韓国はなぜ反日なのか
 吉田衣里 スターバックスとドトール
 前田健太 人々の消費活動に心理学はどのように影響するののか

三村拓也 IT 化が日本にもたらす影響
 阪井正浩 遺伝子とは何か？
 内田龍之介 日本と中国のこれから
 高橋悠真 iPhone のもたらす経済効果
 神山尚人 コンビニ経営戦略
 内田光樹 世界一幸福な国デンマークについて

田川明日香 資生堂と花王
 三木有紗 キャラクタービジネスについて
 礪谷友太 東日本大震災後の日本経済
 長続 悟 朝バナナダイエットの研究
 櫻井真也 今の教育現場について
 砂川祐子 ワークシェアリングが日本にもたらすメリット：オランダを例に

安井茉莉奈 九州経済について
 越智雅也 オリピックが開催国にもたらす経済効果
 井上晃伸 日本の原子力発電のこれからと新エネルギー
 谷口紀章 コミュニケーション能力
 大山剛史 今後の日本のエネルギー政策について
 元木 蒼 日本の大学の人気について
 大屋 匠 お酒について
 重川 暁 日本の新エネルギーについて
 美濃伊織 原子力発電のこれから
 河野将太 死刑制度は犯罪の抑止力になるのか

3組 舟木准教授

津村勇宜 応援の力
神谷朋宙 信長の天下統一 - できなかった背景には何があったのだろうか！

中井悠介 日本人の睡眠不足
門脇健二郎 日本人が使う日本語
織田美智子 錯視
重信亮介 日本の領土問題
中川永盛 違法ダウンロード刑罰化による現状と私たちへの影響

なぜ三国志という時代が成立したのか
森本つくし 原子力発電は必要か不必要か
坂東拓哉 政策の面から見た毛利家
横山知輝 ハダカデバネズミから学ぶ社会の生き抜き方
廣瀬美穂 スマートフォンが私たちに与える影響
内田由布子 グループ活動における当事者意識の欠如 - 傍観者効果から考える -

★蔡 侑霖 日本の雇用システムの変化と改革の行方
吉田綾乃 小学校早期英語教育について

川崎嵩優 リーダーシップ論について
細見健吾 特攻隊員の死を考える
金谷侑樹 アジアの音楽
石川健太郎 外国人の人権
二宮 誠 ファミリーレストランの経営
高杉勇人 なぜ人は音楽に魅了されるのか
梶田悠介 日本将棋の歴史 - 持ち駒使用ルールの成立時期について -

西谷流星 色彩が人に与える影響
井上尚也 アスペルガー症候群の実態について
大汐航平 民主主義の歴史
酒井芳浩 音楽療法の現状とこれから
竹村悠也 日本人のブランド意識
深津 椋 地方自治体の財政状況
村下将梧 良き指導者とは
吉川直哉 ファッションから見る流行の循環
川野光志 バドミントン
松本浩一 尖閣問題の歴史と論点について



4組 宮脇専任講師

片岡航平 人の気持ちを引きつけるプレゼンとスピーチ
白木雄大 日本の領土問題とその影響
小山雄太郎 日韓の領土問題は解決するのか？
大橋侑季 LCCとは何か - LCCを知ることで快適な空の旅を考える -

木下彩美 今日におけるいじめ問題について - ネット社会の観点より -

上田隆之助 スポーツにおけるメンタルの重要性
森岡拓也 オスプレイの諸問題
林 滉輔 TPPが日本に与える利益と損失
中岡佳苗 キリスト教と日本人
篠田彩月 ルワンダ紛争 - 紛争が起こった背景とその復興について -

田村航大 陸上競技
山田浩大 THE CLUB
★石垣翔基 オリンピックと経済
細尾太郎 スマートフォンが変える就職活動
足高雄哉 JALの経営破綻と再生について
藤岡真央 児童虐待の真実

辻 晴花 なぜIKEAやCOSTCOの人气が上昇しているのか
久保翔紀 国際問題 - 尖閣諸島はどこ国の領土か？ -
阿部乃樹 バレーボール女子日本代表のオリンピック、メダル獲得の快挙の裏側

酒井汐理 出版業界の将来
間島久美子 アイドルブームについて
浅田伸策 薬物に対して僕が思うこと
本田 優 ロンドンオリンピックによる経済効果
八木啓太 消費増税について
小田原亮介 宮崎アニメはなぜヒットし続けるのか
那珂大心 効率のよいトレーニングを行うためには
宇田翔真 テレビCMに効果はあるのか
長沖弘子 携帯電話
向 翔平 日本でオリンピックを開催すべきか
藤井翔也 就職活動早期化における囚人のジレンマ (改)

横手 蘭 飲食店での喫煙と禁煙

5組 中川教授

大上紗璃
村垣音和
小谷咲希
西原広大
百合本泰広
魚谷冨佳
上間陽平

外国人労働者の差別
定住外国人の日本語教育
最終レポート
定住外国人の参政権を国際比較で考える
太平洋戦争時の強制連行・労働
米兵による犯罪は少なくなるのだろうか
中国経済の発展に伴う中国国内での出稼ぎ労働者と海外への移民
在日外国人の医療・母子保健の問題
現在の日本企業の外国人労働者問題
在日外国人に参政権を与えるべきか
日本における外国人労働者問題
フィリピン女性との国際結婚
外国人の労働における格差問題
「外国人参政権」の国際比較

飯田匡祐
★谷本 卓
岩波開人
佐野将太
市丸優希
芳田裕紀
武藤 節

高濱翔平
勝川 周
岡田直大
角野 亘
西澤慶輔

東海優衣
中村優介
羽地ひかり
濱田 光
関谷 駿
東城則之
黒田慎弥
欠野仁美

移民問題と選挙 フランス
在日朝鮮・韓国人の文化継承
外国人労働者は受け入れるべきか
在日韓国・朝鮮人に関わる国籍法
1990年前後の入管問題と在外外国人の労働環境
在日コリアンの新世代
外国人参政権
在日朝鮮人の言語・生活意識と共生社会
「外国人」と海外駐在員
在日韓国・朝鮮人と参政権問題
国政選挙権
日本の難民問題
日本と外国の参政権問題と今後の日本



6組 西村教授

高井昂毅
福家みのり
藤田自由
瀧川美咲
★宮城 綾

領土問題は解決するのか
日本の「おもてなし産業」の可能性
「ちゃんとした福祉国家」にしませんか。
年金は本当にもらえるのか？
脱原発後の日本社会—原発立地自治体から日本経済の未来を考える
日本はTPPに参加すべきか、否か
生活扶助と貧困
日本における労働問題に対してどのように対処するか
これからの子どもたちに何が求められているのか
～ゆとり教育と脱ゆとり教育の観点から考える
環境問題は、経済にどのような影響を及ぼすのか
これからの日本のエネルギー体制はどうあるべきか
終わらない人種差別にどう対応すべきか
ニート・フリーターの増加と日本の将来
大阪維新の会の政策の真意とその利点や弱点について

栄沢省吾
鎌田爽優子
清久卓也

斎藤恵理菜

菊本一輝
高谷周志

梶原久暉
大迫秀政
平松 梢

小林 慎
中村昂喜
宮田健人
山根 花

青木慶一郎
島 大介

笹木萌絵
山田大輔
福里道広
大野正貴
小泉勇輝
村田幸弘
安里遥香
森 千紗
川島 大

ゆとり教育は学力低下を産み出したのか
いじめをなくすには
無料で潜む魔力
オリンピックが「商業主義」を実践するのは是なのか非なのか
日本は原発を続けていくべきか
日韓通貨スワップ協定の拡充措置は廃止するべきものだったのか
子ども手当は必要なのか
若者の早期退職を止めるためには
タンス預金が日本経済に与える影響について
Jリーグの空洞化と問われるクラブ経営
韓国経済と韓国が日本経済に与える影響について
学歴は必要であるか
沖縄から基地はなくなるのか
学歴と就職率との相関性
日本は終身刑を導入すべきか

7組 本郷准教授

石丸けい 経済学的思考のセンス：お金がない人を助けるには
 能田瑤子 「騙されない！」ための経済学
 梶山竜司 日常に潜む経済学
 徳永一貴 労働経済学入門
 有吉 夢 ブラック企業：日本を食いつぶす妖怪
 渡辺嵩侑 実生活における経済学的思考
 ★神原醇次 BRICsの底力
 鈴木彩華 『自分を守る経済学』
 川端ひかり 日本経済の奇妙な常識
 樋野良輔 日本の経済格差：所得と資産から考える
 清水健吾 金融危機のカラクリから知ったこと
 六田 翔 2012,世界恐慌：ソブリン・リスクの先を読む
 榎本朝香 エコノミック恋愛術
 大前実沙 日本経済の底力
 小林達矢 景気と経済政策
 石井優介 経済学的思考のセンス

今江明梨 日本経済の底力
 星加修吾 人間回復の経済学とは
 勝井祐貴 経済学的思考のセンス
 谷野風美 TPP 亡国論
 藤井亮平 無税生活から学ぶ税の実態
 山本ゆい 無税生活
 福井恵輔 『新・国富論』
 後藤江里奈 一目でわかる！世界経済のからくり
 末常 葉 ひとりビジネス
 金平晃生 日本はなぜ世界でいちばん人気があるのか
 北島大樹 統計学入門（基礎編）
 勝本泰地 よい経営者とは
 中野克紀 消費税増税について
 加藤琢也 間違いだらけのTPP
 『行動経済学』（依田高典，中央公論社，2010）を読んで



8組 松枝教授

植田敦子 数値化がもたらしてくれること
 筏信一郎 スマートフォンの発展は適切なものか？
 崔 世昊 なぜ“ONE PIECE”はおもしろいのか：「おもしろさ」の正体を探る
 門脇大地 方言事情とその変化
 戸田昌秀 関西弁と関東弁，どちらが標準語
 佐藤史康 いじられキャラの特徴と自分
 河野つばさ 食の安全性
 杉山智哉 腕時計と人生について
 田口 諒 地域性と自分
 近藤達貴 私が興味を持ったアニメ
 平嶋ゆい 私にとっておしゃれて何？
 増田 瑛 地元を活性化し有名にするには
 竹内 雄一 ソフトテニスをメジャーなスポーツにするには
 松瀬裕也 賞味期限
 石 虹 Is China a New Destination for Luxury Brands?
 竹内花奈 雑貨屋でまちの活性化

加茂田知沙 私にとってバレーとは
 高崎彪志 Green Dayと私
 ★平田晋太郎 奈良はなぜ観光客が集まらないのか
 宮本のぞみ コンビニエンスストアの現状とこれから
 神戸 耀 アルバイトの作業効率の上げ方
 阿部結芽乃 熱狂的なファンの特徴とは
 山岡佳祐 LCCに身長が高い人でも快適に乗るためには
 小野晃弘 微妙な三重県
 寺山航平 人間関係の円滑な進め方：上手なコミュニケーションのとおり方
 上田有希 高校卒業後の進路
 立石佳津斗 和食とフランス料理
 渡邊亮太 祈りとその効果
 田中健太郎 妖怪の地域との関係性
 中川日向 WBC 問題
 松元 諒 英語・コミュニケーション能力獲得：殻を破ろう

9組 竹本教授

玉井遼平 税金とは何か
 梶 晃樹 東京ガールズコレクションからみる経済学
 牧岡広樹 日本はTPPに参加する必要があるか
 吉田達揮 競争社会に生きる私たち
 木村優太 原子力発電の必要性
 小山将平 日本の人口変動と社会に及ぼす影響
 ★岡島利恵 ワシントン大行進
 阪本麻貴 コンペティションとエミュレーション～アダム・スミスを再読する～
 山裾知春 競争は経済の発展に必要なものか
 澤崎帆波美 競争社会をどう生きて行けばいいのか
 天野可南恵 二つの競争論を比較して
 久保田章義 ビジネスで一番大切なこと
 藤田良平 競争社会を生き抜くために
 藤澤勇希 環境経済学とエネルギー問題
 土井将希 現代の競争論について
 小泉剛平 ギリシャ危機問題を考察して
 中西 奏 アダム・スミスの考える競争論

小林直貴 近年の自動車産業はどのような変化をしているのか
 井上堯大 「ゲーム理論」について
 山本響己 「利他心」を持った経済学
 阪本和也 二つの競争
 川島拓朗 完全競争論と現在の競争論
 戸田佳織 経済における「競争」の意味
 若宮康佑 日本と世界における2001年
 細川和暉 大学をめぐる問題
 斉藤博一 東日本大震災を経済的に見る
 松尾美由貴 『二つの「競争」—競争観をめぐる現代思想—』を読んで
 奥島康司 二つの「競争」について～淘汰と模倣～
 牧 拓哉 日本万国博覧会が及ぼした様々な変化
 井上厚志 「スポーツ」と「経済」の関係性
 奥長堯久 世界の不況とリーマンショックをはじめとするアメリカの問題との関係性



10組 春井教授

清水文菜 アダム・スミス：『経済学の巨人 危機と闘う』
 木村真之介 アダム・スミス：『経済学の巨人 危機と闘う』
 平岡哲平 リカード：『経済学の巨人 危機と闘う』
 小川熙樹 ジェヴォンス：『経済学の巨人 危機と闘う』
 ★都倉由香子 マーシャル：『経済学の巨人 危機と闘う』
 榎本瑞貴 ケインズ：『経済学の巨人 危機と闘う』
 北村時皇 アダム・スミス：『経済学の巨人 危機と闘う』
 堀江正人 フランク・ナイト：『経済学の巨人 危機と闘う』
 山田大介 J・S・ミル：『経済学の巨人 危機と闘う』
 井筒康介 『貨幣論の系譜』：『経済学の巨人 危機と闘う』
 久保唯斗 ケインズ：『経済学の巨人 危機と闘う』
 山本ゆりえ アダム・スミス：『経済学の巨人 危機と闘う』
 前川晋平 アダム・スミス：『経済学の巨人 危機と闘う』
 松原圭佑 フランク・ナイト：『経済学の巨人 危機と闘う』
 藤原拓也 アダム・スミス：『経済学の巨人 危機と闘う』
 旭 直樹 ケインズ：『経済学の巨人 危機と闘う』

坂 亮一 シュンペーター：『経済学の巨人 危機と闘う』
 鈴木祐希 マーシャル：『経済学の巨人 危機と闘う』
 松浦亮平 「貨幣論の系譜」：『経済学の巨人 危機と闘う』
 才野裕太 アダム・スミス：『経済学の巨人 危機と闘う』
 吉野由祐 ケインズ：『経済学の巨人 危機と闘う』
 検見川陵 「貨幣論の系譜」：『経済学の巨人 危機と闘う』
 新井弘泰 アダム・スミス：『経済学の巨人 危機と闘う』
 角田 友 アダム・スミス：『経済学の巨人 危機と闘う』
 佐々木耀佑 マーシャル：『経済学の巨人 危機と闘う』
 村岡千晃 ケインズ：『経済学の巨人 危機と闘う』
 田中万理奈 アダム・スミス：『経済学の巨人 危機と闘う』
 鎌田脩汰 フランク・ナイト：『経済学の巨人 危機と闘う』
 平野真志 シュンペーター：『経済学の巨人 危機と闘う』
 山崎烈真 マーシャル：『経済学の巨人 危機と闘う』

11組 増永教授

西村幸介 ディズニーから見るアメリカ
小林加奈 ディズニーからみるアメリカーディズニーア
ニメーションからみるアメリカの文化・歴史
松山弘紀 ITから見たアメリカ
★松村美保 マクドナルドの経営戦略ービジネスモデルか
ら見るアメリカ
山本 耀 マクドナルドについて
増田 瞬 アメリカ文学から見た差別
今村勇介 ファーストフードとアメリカ人
孫 銀珠 メジャーリーグから見るアメリカ
伊東義敬 ディズニーランドから見るアメリカ経済
山本大遙 ファーストフードの健康と経済格差
西嶋綾香 日本とアメリカの健康ーサプリメント
中村千晶 マクドナルドの経済学
田中 聖 アップルとグーグルー2社から見るアメリカ
荒牧由香 差別から見るアメリカー女性たちの行き方は
どのように変わったのか

丸山大智 黒人差別からみるアメリカ
倉橋怜子 大学教育から見るアメリカー日本と比較して
見る
宇都宮健太 メジャーリーグの経済学的構造から見るア
メリカ
多林 晃 アメリカの教育から見る国民性
善塔達也 「企業理念」からみるアメリカ
取淵慎治 医療から見るアメリカ
木村圭佑 フィットネスから見るアメリカ
中野悟史 映画『クレイマー・クレイマー』から見るア
メリカ
石田斐佑雅 ITから見るアメリカーなぜアメリカはIT
産業が強いのか
山野裕紀 ディズニーリゾートの人気の秘密ー経営理念
那須井美咲 IT産業を通してみるアメリカ
佐々木庸祐 ディズニーワールドはなぜ人気なのか



12組 寺本教授

中尾智哉 通貨制度と経済
泰中久瑠実 モバイルコンテンツ市場とケータイ世代
竹崎智香 今後の日本の電子産業
毛利仁美 東日本大震災による原発事故が与えた経済影
響について
荒金照大 消費税増税すると不況ではなくなるのか
～現在の状況～
坂東篤磨 外国人労働者問題 ー日本の将来ー
大塚美奈実 EUと経済
★岡井美樹 ユーロ危機の今、そして日本の危機
川口真菜 ファッションと経済
森下貴央 消費税を考える
梶原大空 増税が経済に与える影響について
松尾翔平 東日本大震災と日本の経済
福永隆之 企業はどのようにしてSNSを利用するのか
ービジネスの場としてのSNSー
神木 聖 原発の未来について
宮路一史 サブプライム危機の正体

栗山侑大 リーダーシップについて
杉浦美穂 ファッションと経済
池田千尋 社会保障制度と経済の関係性
大西沙希 政治と為替相場の関係
福永安惟 消費税は是か非か
盛田翔平 EUの経済
丸吉洸太 ユニクロと経済の関係
高野晟智 原発依存脱却とは
松浦 光 21世紀における金融危機 ーリーマン・
ショック後からー
高妻進之介 円高は日本経済にとってマイナスなのか
上枝良多 資本主義経済とスポーツ
大上友里 音楽CDの売り上げ変化について
橋高勇太 東アジア共同体は実現可能か？ーアジアの経
済史・歴史的關係性と共同体形成への課題ー
株と経済
三谷一成 環境問題と地球温暖化懷疑説
山下晃志郎

13組 土井教授

中原直哉 世界経済の発展における日本の役割／日常生活で出会った疑問を経済学的観点から考える
 福田亜弓 世界経済の発展における日本の役割／エスカレーターの立ち位置が、関東では左側、関西では右側のように、地域によって違うのはなぜか？
 谷岡みのり 世界経済の発展における日本の役割／日本でボーナスが大多数の人に支給されるのはなぜか
 松本佳祐 世界経済の発展における日本の役割／日常生活で出会った疑問を経済学的観点から考える
 毛利文彌 世界経済の発展における日本の役割／なぜ大手企業が普通より多くの退職金をださず社員を減らすのか
 土屋聡蔵 世界経済の発展における日本の役割／なぜコンビニはスーパーより商品の値段が高いのか
 高島大輝 世界経済の発展における日本の役割／日常の疑問～居酒屋のお通しが有料なのはなぜか～
 中井 航 世界経済の発展における日本の役割／日常生活で出会った疑問を経済学で解く～ガソリンの方が少なく貴重なのになぜペットボトルの水の方が高いのか～
 中村朱里 アジア地域の発展から世界経済の発展へ／なぜ試着できない「ZOTOTOWN」で服が売れるのか
 山口 穠 世界経済の発展における日本の役割／なぜ居酒屋には「お通し」があるのか
 迫田靖人 世界経済の発展における日本の役割／日常の疑問を経済学で考える
 中山 聡 世界経済の発展における日本の役割／日常生活での疑問
 平田圭章 世界経済の発展における日本の役割／日常生活と経済学の繋がり
 川戸翔吾 世界経済の発展における日本の役割／なぜ通話無料アプリが存在し、ヒットしているのか？
 中島 佑 世界経済の発展における日本の役割／年始の売残りセールに利益はあるのか

富田真之佑 世界経済の発展における日本の役割と責務／日常生活の疑問に対する経済学的解説～鉄道料金の疑問～
 土田恭輔 世界経済の発展における日本の役割／牛井チェーン店のビジネス
 金森雄司 世界経済の発展における日本の役割／日常生活で出会った疑問を経済学的観点から考える
 高橋亜梨沙 世界経済の発展における日本の役割／日常生活で出会った疑問
 三枝将也 世界経済の発展における日本の役割／なぜ、通販番組は深夜に多く放送され、さらに放送終了後、一定時間内に商品を注文すると特典をつけるのだろうか
 鉄田悠貴 世界経済の発展における日本の役割～ASEAN地域のさらなる発展～
 伏喜陽祐 100円ショップの謎～どうしてあんなに安いのか～
 山下達也 世界経済の発展における日本の役割／視聴率競争が激化しているのはなぜか
 山下達也 世界経済の発展における日本の役割～アジア経済の発展について～
 ★演野野光 これからの世界経済に日本がどのように関わっていくのか／日常の疑問を経済学的に考える
 矢野智子 世界経済の発展における日本の役割／田舎で暮らすのと都会で暮らすのとではどちらがよいか
 山口拓真 世界経済の発展における日本の役割／アメリカの携帯と日本の携帯の差について
 善明直真 世界経済の発展における日本の役割／ノベルティの思惑
 部谷佳菜 世界経済の発展における日本の役割／SNSは、無料なのになぜ儲かるのか
 本田直之 世界経済の発展における日本の役割／なぜ都市と地方ではアルバイトの平均時給が違うのか
 麻田直也 世界経済の発展における日本の役割／日常生活での疑問



14組 宮脇専任講師

江上真司 大阪都構想について
 常森雄也 SNSがもたらす経済効果
 上武大輝 マイケル・ジャクソンのパフォーマンスはどのようなものであったか、またその原点は何なのか
 ★宮川理紗子 身近に迫る環境問題 - 寿司ネタから考える、漁業と環境問題 -
 藤田靖恭 日本における地球温暖化の現状
 福田晋一郎 宮崎県経済調査書
 安田峻紀 日中韓のもつれ
 土田拓馬 大学生の就職難とその原因
 田村 彪 クローン技術の是非
 河野 恵 欧州債務危機
 田中麻美子 高齢化社会
 田ノ内亮平 大阪都構想は実現すべきか
 大内一輝 映画業界の現状と日本人が好む映画
 山根郁摩 国内の廃棄物について
 南 賢志 私的違法ダウンロード刑罰化について

伊藤大貴 尖閣諸島問題
 望月貴耀 現代の少子化問題について考える
 松崎哲郎 日本のクラブと音楽シーン
 福岡優女 再生可能エネルギーについて
 後藤雅樹 クールジャパンと日本アニメ
 高月寛太 税金の使い道と無駄遣い
 大川裕生 日韓関係の領土問題の本質を考えてみよう
 臼谷侑利子 上場会社の株式について
 許 天任 中国経済の実情の観察報告
 京極架樹 今日における若者はどのように仕事をしているのか
 眞嶋伸豪 アルバイトの何たるか
 島ノ江勇太 原発は停止すべきか
 木村拓也 TPP参加は是非か
 藤井美穂 地方における第三セクターの役割
 荒堀貴文 英語の方言について、英語と米語の違い
 中村健吾 日航再上場から考える日本の公的資金投入の問題を考察する

15組 山田准教授

李 赫中
★磯江諒亮
宮尾伍郎
金子和樹

稲川希生
馬場俊一

内本峻太
山本崇博

内田彩美
山中寛子
山脇仁志

佐野勇介

古川颯馬
廣部敬之
我部直人

人手不足の日本：火消し役になるのは？
今だからこそ知っておきたい風評被害
なぜ日本人は英語が苦手なのか：日本に潜む問題
日本の借金を考える：政府・地方の二重苦を
どのように解決するのか
戦争責任は果たされたか否か
地球温暖化説の真偽：地球は温暖化に向かう
のか、寒冷化に向かうのか
Steven Jobs vs Bill Gates: Apple & Microsoft
日本国民の選挙参加の現状：望まれない政治
は国民の無関心が招く
綿花に潜む影：綿花農家の苦悩
大学生と就職活動：新しい就活の形
なぜ日本人は欧米人に表情が豊かではないと
いわれるのか
派遣労働者を救うにはどうすればよいのか：
非正規雇用の実態と課題
ニート：ニート問題と国民の未来
日米戦争：約60年の歴史
原子力発電と日本：原発の今、そして未来

今村朱理

山根翔太
丸橋昂平
古賀郁美

池ヶ谷憲吾
能登谷俊紀
濱野南実
米泉星香
廣畑 駿
大森あかね
宮本さやか
尾崎大輔
小倉球美

杉山祐哉
小原一輝

横山大希

日本の抱えるエネルギー問題：ナンバー1より
オンリー1を目指せ
いじめ問題
日本の領土をめぐる：日本の領土を守れ
激化する尖閣諸島問題：よく考えてみると何
かが見えてくる
地下経済の拡大：闇に広がるECONOMY
利益を上げるには
割れる尖閣
スポーツと社会の関連
中東ではなぜ政治的紛争が絶えないのか
TPP参加反対：日本の農業への影響
社会の縮図、「いじめ」とは：輪廻する「いじめ」
竹島（独島）か、独島（竹島）か
死刑制度における問題点と今後の展望：死刑
制度は廃止すべきである
ちょっと待て、再処理
原発問題をめぐって：人と環境にやさしい日
本をめざして
為替とは：日本にとって円高と円安どちらが
よいのか



16組 田 准教授

余田 壮
後藤紘樹

林 衿伽

大下智史
井之川達哉
中西令子
児玉樹康

山本勝也

井上枝里子
吉田彰宏

竹本大希
王 璐
鈴木健人

吉田憲一
山田健太

日本で電子書籍ブームは到来するのか
日本と世界の労働比較から考える日本の労働
問題改善案
世界と言語—日本の企業において需要のある
第二外国語は何か？—
現代の教師が求められているものはなにか
ソーシャルメディアと新市民革命
日本の店舗における労働面からみるユニクロ
アイドルの時代における変遷と未来のアイドル
像
悪化する地球環境—地球温暖化を食い止める
ために私たちに何ができるのか—
日本におけるカメラの在り方の変容
原子力から火力、次世代エネルギーへの転換
と日本経済
疑似科学から学ぶこと・できること
外国人児童生徒への教育に関する研究
派遣労働問題—理不尽な雇用打ち切りはな
くなるのか—
生活保護制度の課題
就職活動問題と就職難

服部文音
千徳那稚
西村郁美
福田吉功
樋口拓磨
湯浅文也

河野雄史
藤原尚紀
藤村奈津子
吉田周平
勝又周平
向井志礼

★杉本直樹

石井智也
中小路祥

ドコモの経営戦略—ドコモの未来は一
東日本大震災によって与えられる影響
日本の食生活の変化がもたらした問題
日本のアニメ産業—より発展させるには？—
四国から見る都市と地域経済
日本のレジ袋有料化政策における考察と今後
の課題
絶滅危惧種から学ぶ人間の過ち
Twitterの発展と問題からみる日本の経済回復
ドイツに学ぶブランドカー—自動車を中心に—
歴史と地域差から見た英語
日本へのLCC参入
ホスピタリティの重要性—サービス業との関
わり—
BOPビジネスモデルの考察—日本企業が参
入するために必要なものは何か—
少子化がもたらすおもちゃ業界への影響
ファンワード・ブランディングから購買意欲を
高めるには

17組 大高教授

上枝佑多 資本主義とボランティア
 千葉大輝 資本主義と金融
 元辻春菜 資本主義社会における現代の教育文化
 牧野由実 資本主義における広告の役割について
 谷 祥広 中国の資本主義
 黒木稀衣 戦争と資本主義
 田原 藍 資本主義文化における家族の在り方の変化
 石橋美佳子 資本主義と食
 森冲歩美 スポーツと資本主義
 中西翔馬 資本主義とユーロ危機
 芦谷太基 音楽と資本主義
 ★高見将平 「オタク文化」が日本経済にもたらす影響
 笠井里織 資本主義とスポーツ
 齊藤周斗 資本主義と環境運動
 塩井紗里 通販と資本主義
 堀之内円香 多国籍企業の光と闇

大谷和之 資本主義とN F L
 徐 希錫 資本主義の陰
 伊藤 暖 歴史から見たスポーツと資本主義の関係性
 谷藤隆真 資本主義における戦争と平和について
 内山直人 資本主義による地域格差とその是正
 森口佳名子 資本主義と中国
 村田 翔 資本主義におけるプロスポーツの変化
 西尾康平 資本主義と漫画
 櫻井佑季 資本主義社会においてオリンピックは必要か？
 H & Mの経営戦略からみる資本主義
 資本主義の未来
 守護友一 資本主義は社会問題を解決できるのか？
 岩部 真 資本主義と環境問題
 内田美弥 資本主義と教育



18組 藤田教授

北村標陸 ステルスマーケティング：一般人と業界人の乖離
 丹下貴子 食べ放題について：店側は果たして儲けているのか
 梶みのり K-POPの海外進出：日本と欧米諸国での反応の違い
 高田康平 興隆するアジア経済：世界の中でのアジア経済の変化、展望、位置
 藤澤純也 なぜ日本で医療崩壊が起こったのか：その対策とは
 丸山和宏 インターネットと音楽配信がCDの売り上げにもたらす影響と音楽のあり方の変化
 磯野紗幸 外来生物対策と遺伝子組み換え植物の危険
 岡田美雄士 慰安婦問題
 網野翔太 生活保護：どうすれば日本の生活保護は改善されるのか
 松村枝里乃 宇宙産業：日本の技術力と小型衛星が導く未来
 矢部恭隆 TPPへの参加：日本の衰退
 安田拓末 就職氷河期：企業が求める人材と英語力
 福岡紗代里 イオンとイトーヨーカ堂：両社の経営比較
 堯志弘輝 草食系男子と独身女性の増加：草食系男子で少子化を解決
 浦田幹人 沖縄に米軍基地は必要か
 西川拓毅 なぜヒップホップダンスは中学校の必修科目になったのか

松田康魁 余暇ビジネス：余暇の過ごし方、ディズニーランドの人気
 杉田浩彰 「レアメタル」は日本経済になにをもたらすか
 鶴田航大 オリジナルと経済戦略
 石田有佳理 ネット社会における物品販売：販売方法と経営戦略
 藤戸ゆり ネット社会：ライフログとその危険性
 ★日比野友美 女性の社会進出：保育所の増設は女性の社会進出を促すか
 山口世令奈 ファストフード：近代の日本の食文化にもたらしたもの
 芝本太一 たばこ税を引き上げるべきか：強力な税収源の活用法
 高月飛鳥 タクシー産業について
 上垣宏貴 スティーブ・ジョブズ：Apple社を復活させたイノベーション
 服部圭一郎 マインド・コントロール：日本の経済と政治
 矢野貴大 売れなくなったCD：違法ダウンロードとの関係は
 津田貴裕 テーマパークの経営
 岡崎陽介 クローン技術：再生医療と法規制

19組 ボイル教授

新井菜月 日本アニメとマンガについて
 木村倫人 自殺のススム
 末永貴大 Appleがなぜ成功したか
 松原由佳 AKB48が成功した理由
 篠原菜摘 現代のチェーン店で勝ち残るには
 鈴木 剛 オイルマネーとは
 武隈大輔 原子力発電は本当に必要ではないのかどうか
 熊井健人 夢と目標とは 一夢・目標を持っている人と持っていない人の違い
 岡田瑞希 宝塚歌劇 100年の伝統と魅力
 ★松下実加 マインド・コントロール ～なぜ人はテロリストに変貌するのか～
 小林昂太郎 あだち充はなぜ愛されるのか
 集 真優 東京ディズニーリゾートの成功とその経済効果
 安藤正樹 市場経済と道徳
 松本誠人 テレビ離れの実態
 熊本圭佑 ブランドは消費者にどのような影響を与えるのか
 大野仁也 AKB48がもたらした経済効果

照沼あかり 東日本大震災が社会に与えた影響
 森 啓吾 日本の経済事情とスポーツに起こりうる経済効果
 加藤紗生 LCCが変える世界の空
 川本一喬 日本とその周辺諸国との関係
 平野るり子 これからの日本農業
 下池 凜 エネルギーシステムの変化～将来のエネルギーはどのように変化していくのか～
 小倉正成 任天堂はなぜ大企業になり得たか
 竹内悠里 いじめ問題の解決策
 伊藤 淳 2020年東京オリンピック開催におけるさまざまなメリット、デメリット
 秋山晃次 日本におけるTPPの諸問題について
 阿南雄介 TPP参加と日本の農業における影響
 渡辺健弥 模倣のモラル
 古野智之 スポーツと経済効果
 青木悠太郎 花粉症について
 社家エリカ 本場に食品添加物は人体に影響を与えるのか
 音楽と経済 ～CD業界の昔と今～



20組 厳 准教授

三宅正大 SNSの発達と若者のコミュニケーション能力について
 上島康太郎 タバコはどうしてなくなるのかー世界のタバコ市場とJT(日本たばこ産業株式会社)を通じてー
 横道翔伍 「パラサイト・シングル」ーもたらす社会的影響とその改善策を考える
 有本 凜 旅行形態の変遷ー経済先の関連性ー
 榎野恵介 スポーツビジネスについてープロ野球産業の今後の課題ー
 船木俊佑 インターネットゲーム内における経済について考えるーRMTの現状と今後についてー
 平田優斗 エスカレーターの前側空けの習慣ーエスカレーターの前側空けの習慣はエスカレーターに乗ることを効率的にしているのかー
 高田隆司 ポケットティッシュが配られるわけとは
 坂本真吾 関西学院大学上ヶ原キャンパスの大学生協が運営する飲食施設の現状
 ★平田 剛 不買運動の分析からみる敵意の消費者行動に与える影響
 萩野沙紀 日本の宿泊施設ーなぜ分類の種類が多いのかー
 中村穰一郎 弱小球団が強くなるには？ーセイバーメトリクスーとインセンティブ設計から考えるー
 川嶋達也 学生国際支援団体ができることーNPO法人と比較してー

石川泰雅 学校制服の役割とは
 大谷一生 よりよく生きるための成功の指針ー成功とは何かー
 稲澤孝仁 なぜビッグミスは自発的に富を分配するのか
 徳井宗哉 人間の感情と表情表出
 神保舞香 スポーツで結果を残し続ける秘訣
 塚本有一郎 AKB48から学ぶセルフブランディング術ー指原はなぜトップアイドルになれたのかー
 腰高拓也 コンビニエンスストア社会ーコンビニエンスストアは私たちの生活にどのような影響をもたらすのかー
 新井悠介 アパレル業界に潜む資本主義
 色谷政芳 野菜と果物の違い
 林 森 中国における水環境問題
 齋藤 嵐 快眠をするにあたっての諸説ー心地よい眠りをするにはどうすればいいかー
 安岡 亨 レジ袋の有料化
 秦 拓也 「いじめと不登校の現状」ーアメリカとの比較ー
 安藤祐貴 プロ野球の人気は本当に低下しているのだからー様々な観点から考察してみるー
 佐藤友亮 阪神大震災ー被害を少なくすることはできなかったのかー
 平原廣子 日本の教育行政の実態についてー在日朝鮮学校における「朝鮮学校補助金問題」を通して考えるー

21組 韓准教授

中田陽太
富満直斗
土屋宗一郎

任天堂のゲームはなぜ売れるのか
なぜ iPhone はこれほど利用者を獲得したのか
日韓歴史問題を問うー韓国「反日」思想と歪
む歴史観

高畑諄子
山本翔二郎
酒井 翼
出原雅敏
入交智之
山口紗弥
池永侑稀
照井慎平
光森智紀
波頭亮佑
向井智輝

強いブランド作り
商品がヒットする要因とは何なのか？
成人年齢を引き下げるべきか
日本の自動車メーカーの強さと今後の成長
成人年齢引き下げについて
なぜブランドは売れるのか
日本が破綻しないのはなぜか
脱原発すべきか
日本財政はギリシャ化してしまうのか
観光による地域活性化について
なぜスマートフォンが普及したかーなぜガラ
パゴス化した日本市場に普及したのか

山本一輝
下山啓次郎

消費税増税すべきか
死と自殺と老化

設楽沙也香
今村貴史
松下智美
木下大二郎
片桐穂乃
辻 雄亮
中尾嘉之
福富孝也
森田絢子
笹谷知輝
吉田健佑
蔵 浩平
河内 亮
嶋越藍樹
★平林宗人

ルイ・ヴィトンの成功戦略
消費税は増税されるべきか
東京でオリンピックを開催するべきか
米の輸入を自由化すべきかどうか
消費税を増税すべきか
経済効果の算出は何のために行われ、役立つのか
音楽業界は不況なのか
日本の成人年齢引き下げ
日本でオリンピックを開催すべきか
関西におけるインバウンド観光振興のすすめ
日本が行うべき社会保障制度とは
日本は TPP に参加すべきか
消費税を増税すべきか
大阪にオリンピックを招致するには？
経済復興の中で NPO は何をすべきか
一災害ボランティアの視点から
成熟社会とは
マーケティング戦略の有効性

松田康人
安井克之



22組 西村教授

森田詩央
山本麻莉子
出口絢菜
高奥香澄
吉川千晴
棟居奈々
清水 梓
井上侑華
西井勝久
笠井智成
李 佳騏
小谷竜太郎
小林 純
廣瀬亮平
川村真由
羽坂健太

不合理と脳のトラップ
新しい時代に求められているモノ
少子高齢化と経済の関係
女性の品格は就職するために必要か
電子マネー時代は来る！
内定をとれる学生、とれない学生の違い
LCCの経済影響
高齢者の雇用は必要であるのか
死刑制度の必要性について
オタクパワーによる経済効果
日系企業の中国進出の動向
年金問題ー若者が持つ不信感ー
全てのサッカークラブが儲けるには
死刑は要るか、要らないか。
なぜレコード会社は潰れないのか
NPB と MLB と WBC の経営戦略

小林七海
井上恵介
瀬口知也
大出玲郁
★萩原健太
鈴木秀真
原 若菜
窪 宏樹
渡邊健人
西澤洸樹
清水菜々
江川琢大
雷 紳司
小野智哉
杉村祐樹

日本人はなぜ豊かなのに不幸なのか？
TPP が日本経済に与える影響とその考察
スペインが一枚岩になるためにすべきこと
音楽がもたらす心理的影響とその経済効果
日本はなぜ死刑制度存置国なのか
日本の就職 体育会は就職に強いのか
消費税増税は本当に必要なのか
ゲームの子どもへの影響
シェールガスと日本、そして世界
日本の笑いが世界で成功するには
いじめの深刻性
違法ダウンロードは防げるのか？
鳥を得ることによる経済的影響
なぜディズニーパークは成功を収めているのか
Apple 製品の社会的経済的效果

24組 本郷准教授

池上龍介 友だち地獄：「空気を読む」世代のサイバイバル
 芥川淳生 ケインズ経済学から見る、今の日本経済
 松村憧伍 『消費税のカラクリ』を読んで
 佐竹愛香 『日本人の消費行動』を読んで
 中川愛海 世界と日本の航空事情について
 伊藤茉莉子 買い物の中の心理戦
 橋本芽依 『経済学の犯罪』を読んで
 坂本一成 B層の行動経済学
 野中一樹 『ゼロからわかる経済学の思考法』を読んで
 磯野直輝 TPP参加に際しての農業の経済的影響
 武市菜奈 稀少性の経済学と過剰性の経済学
 ★小島宏基 双曲問題にみる自然選択
 横山隼司 『商店街はなぜ減るのか：社会・政治・経済誌から探る再生の道』を読んで
 安田千尋 働く女性が知っておくべきこと：グローバル時代を生きるあなたに送る智恵
 山岡千華 経済学の犯罪について
 依光里夏 社会問題として考えるブラック企業

杏橋 道 インターネットが社会に与える影響
 里中江哉 『金融入門』
 金本一希 将来のために
 白川桃子 迷惑メールは誰が出す？
 牧瀬康裕 インド IT革命の驚異
 西川奈津美 賞金差別
 立原信行 『経済論戦』を読んで
 高橋拓海 世代間格差と若者
 杉本遼太 無料ビジネスの仕組み
 大原直也 『日本経済 絶望の先にある希望』の要約と考察
 矢尾田雄一 金融技術の畏
 横山弘明 『ソーシャルゲームのすごい仕組み』を読んで
 山口恭平 佐藤百合『経済大国インドネシア』を読んで
 岩本一平 『ソーシャルゲームのすごい仕組み』を読んで
 兪 品福 中国の都市と農村の教育格差



25組 森田准教授

森田美和 東日本大震災の復興に向けての課題
 黒木 洸 ジョンソン・エンド・ジョンソンの経営戦略
 黒田里紗 現代におけるネットショッピング
 木下豪大 日本のプロスポーツを発展させるには
 高原 想 ドーピング
 村田賢大 竹島問題の歴史と解決策の提案
 村上絢名 限定からみつめる
 松野恵利香 日本の音楽業界の低迷
 芝田直人 ソーシャルネットワーク
 人間野唯 FX入門
 湯 孟超 太陽光発電システムの可能性
 工藤 允 日本における救急医療の現状
 阿知波敬子 ボランティア活動は自己満足に過ぎないのか
 橋本由香 LCCと航空市場
 横山拓哉 オリンピックと経済効果
 木下優吾 日本の領土問題
 中野 涼 サッカー日本代表の成長

坂本光浩 初音ミクによる経済効果
 木村一輝 世界のUNIQLO
 忠野隆太郎 大手家電企業の現状と市場
 ★初田美有 GNPとGNH—幸せとは何か—
 石田祥悟 世界を制したサムソンの戦略
 柿本知樹 少子化から展望する雇用課題
 池田早織 お化け屋敷ビジネス
 高山鎮巨 就職難はなぜおこっているのか
 佐々木智也 非正社員の現状
 青野 真 夢、睡眠
 藤本真希 監視社会の光と闇
 中壺成明 マイナンバー制度—平等な社会にするための番号による管理—
 波多慶丞 メディア・リテラシーに関する提言
 油谷 凌 中華料理の発展
 浜口敏明 小学校の英語教育

市川文彦ゼミⅡ

かんがく人＝“侃諤人”としての飛躍を期す！

市川ゼミ栄えある節目の、第X期生諸君へ贈る表題の造語こそ、学窓を巣立とうとする皆さんへゼミ教員としての期待を込めた、はなむけの言葉です。「侃々諤々」（かんかんがくがく、と読む！）あるいは「侃諤」（かんがく）とは、元来、遠慮せず議論を恐れずに自らが信ずるところを述べていく姿勢のこと。このような意味での“侃諤人”＝かんがく人として、皆さんが社会にあって、自らの主張を、論理的に、冷静に、そして明瞭に他者へ伝えられる人物になって欲しいと願っています。このゼミと経済学部で得た知識と経験を礎にした、論理立ててのメッセージ発信が出来る“侃諤人”として！

さて、この第X期はゼミ幹事のK.M君やK.Y君の尽力、取り纏めにより、3年生時には「ゼミ共同研究2011」としての成果＜日本企業CSR活動の国際比較史的検討＞を発表。CSR国内調査・高イメージ企業も国際基準では低順位であったり、その背景として各企業の経営特質が長期的な組織成長径路に依存することをも解明。長浜での夏のゼミ合宿での準備的議論やゼミ・ロシア研修での得難い経験、他学との数回のディベート、工場見学など、印象深い二年半でしたね。

第X期生諸君の“侃諤人”としての活躍をば祈る！
祝・ご卒業！

(F・いちかわ)

卒業論文一覧

山口公典	イギリスから学ぶ日本食料問題
★溝渕克馬	広がる電子マネーとその展望
下岩昇平	ソーシャルビジネスの経済効果
井上卓也	バラエティー番組のPR
小浜良太	CSR活動から見る会社内部への影響
橋本裕樹	ガラパゴス化が日本の携帯電話産業にもたらした影響
増重大志	日本の衛生陶器の変革
近藤慎太郎	関西学院大学生の電車での行動と吊り広告
湊 友亮	AKB 48、歴史でたどるマーケティング戦略
長島 真	タバコ産業が経済に与える影響
田村優樹	日本の医師不足と医療制度改革
上仲智也	大卒新入社員の早期離職の原因 ——過去と現在の比較——
太田晋也	強力なポテンシャルを秘める次世代自動車
松田大樹	行動経済学からみる消費者購買行動 ～スーパーミクロ経済学～
深山規宏	グローバル化の中の宗教信仰
吉積雄人	少子高齢化対策としての外国人労働者受け入れ
小川健史	サブサハラ地域における日本流アプローチの模索

井口 泰ゼミⅡ

アジア・ワイドな視野を持っているか

われわれは実は、大変な時代に生きている。世界経済危機で、先進国経済は深く傷ついている。ただし、欧州の債務危機は、最悪期を脱した。アメリカは、新エネルギー革命のなかで、経済危機を克服する可能性がある。ところが日本は、東日本大震災後の復興もなかなか進まず、内外に解決が容易でない複雑な課題を抱えこんだままある。しかも、グローバル化の主演は、アジアなどの新興国経済に移りつつある。

君たちは、井口ゼミの一員として、韓国の延世大学と交流し、日本政策学生会議にも出場し、日中韓ラウンドテーブル会合にも参加する機会を得た。あれらは、一体何のためだったのか。成長するアジア経済と協力し、日本が活力を取り戻すにも、アジア・ワイドの視野を持った人間が必要ではないのか。

もし、本当に有意義な人生を生きたいのなら、狭い利益ばかり考える人間になってはならない。知識を覚えこむだけの学習しかできない人間は役に立たない。世界の変化は早く、狭い知識など、すぐ役に立たなくなる。複雑な現実とメカニズムを探求する能力や、問題解決の戦略を構想する能力を身に付けたのか。就職するからと言って、自分に強い目的意識と優れた能力があるのか。自ら問い直してもらいたい。

卒業論文一覧

馬 麗麗	私の目からみた華僑世界とグローバル化
井上雄太	日本の製造業を救うには～取るべき対外経済戦略～
大岡倫久	コンパクトシティ実現による地域活性化～各地方都市からみるコンパクトシティ政策
★北田健人	潜在的グローバル人材の活用とその方策—「グローバルな人格ベースを持った人材の育成・活用という選択」—
瀬尾拓也	今後、銀行はどのように収益を拡大すべきか
陳 梅	中国の格差問題
菅野昌吾	国内農業を守るためにJAが今求められる政策
薛 秀娟	日中の経済発展と人材の移動
池下礼華	女性が正社員として働き続けるには
美馬卓弥	税における世代間不公平の是正
韓 陽	日中韓三国の家電業界について
土井俊一郎	住宅市場の今後と日本経済
葛上舞子	日本の平等社会の見直し～労働者問題や社会保障制度を考える～
石定佑介	大規模都市における環境都市実現に向けて
杉田 亮	インド経済～ネルナーの時代とネルナーの功罪～
谷口智紀	インド成長ビジネス

上村敏之ゼミⅡ

3期生に贈る言葉

今年1月の最後のゼミで、ゼミ生の皆さんには、2年半のゼミ生活を振り返り、最後の言葉を1人ずついただきました。あの場にいたゼミ生には分かりますが、とても印象的で感動的なゼミでした。上村ゼミ3期生の絆というのが、ここまで強いのかということ、改めて確認させてもらいました。

皆さんが2年半で得たものは、決して金では買えることはできない、素晴らしい絆です。強い絆と書きましたが、実のところ絆はもろいものです。簡単に捨てることができます。しかし皆さんは、ゼミの絆の本当の意味を理解していたと思います。

上村ゼミは、大学で単位をとるためにあるのではなく、卒業後に社会に貢献するために存在しています。今後の人生で、この絆が生きたときに、必ずやってきます。皆さんは、大学は卒業しても、上村ゼミを卒業したわけではありません。

上村ゼミは、毎年1月に新年会を行います。ぜひ、お互いの成長を喜び合いましょう。上村ゼミの絆は、3期生だけでのものではありません。ぜひ、皆さんの絆を、先輩と後輩を通した縦の絆に拡張してください。

大学卒業、おめでとうございます。次は来年の新年会で集まりましょう。

卒業論文一覧

山本佳宜	中距離旅客輸送の競争
頃安美那	ゆるキャラ・B級グルメによる地域振興および経済効果
松原実沙	環境税導入の効果 - 「地球温暖化対策のための税」の再検討 -
鞍谷早紀	日本の長時間労働
片山文加	ラグジュアリーブランドの本質と課題について
奥野真帆	女性の就業率と出生率との関連
吉森絢乃	少子化問題これから
新美貴文	日本のアニメーション産業の展望
高柳早希	若年層における日本の雇用問題 - 他国と教育や社会保障の観点から比較して見える日本の未来 -
山田一真	タイ経済の展望
吉見沙耶	日本農業の課題と今後の展望
★荒川浩平	関西の鉄道における新線建設ラッシュについて
内橋優一	国内医薬業界の行方
表具明宏	欧州財政統合 - ユーロ危機の現状と今後の展望について -
高瀬麻未	航空業界におけるLCCの変遷
塚田圭裕	データでみる教育 - 日本の教育の現状と課題 -
松山 翔	沖縄のサンゴ礁が経済に与える影響
湯口隼人	累進課税制と社会的格差について - 誰もが頑張れる社会を目指して -
川谷 愛	未来を繋ぐ環境ビジネス
鎌尾洋輔	M&Aにおける成功戦略についての考察
松野孝志	少年非行に対する経済学的分析
渡辺侑弥	メコン地域におけるミャンマーの可能性
野間皓雄	ビール業界の今後の展望

井上琢智ゼミⅡ

さあ、準備は整った。今、旅立とう！

経済学部の学生22名と文学部の学生1名とからなる研究演習。留学した学生や進路の関係から演習を去った学生もいて経済学部の学生は19名になった。それでも、ゼミ委員とそれを支えるサポーターとさらにその周囲に全員が協力をしてまとまった井上ゼミ。公用の関係でもともに学びあうことが十分でなかったため(ごめんさい!)、これまで以上に自主性を尊重した結果が、卒業論文のテーマの多様性。それでも現代を見る眼の確かさには驚く。論文としての形式は重要だが、「ものを見る眼」を養うことが大学教育の一つの目的であるとすれば、大成功か。「個性」とは与えられた「賜物」であり、「才能」である。それを自らが発見し、それを生かす道に気付いたとすれば、社会へ旅立つ最低限の条件は整ったこととなる。あなたたちが社会に期待している以上に、あなたたちの旅立ちと営みを家族、会社、社会は期待している。その期待に応えることが人としての責務である。

さあ、準備は整った。今、旅立とう。

卒業論文一覧

三反崎裕子	オランダとチューリップ-黄金時代のさなかに起きたチューリップ狂について
生田結花	リンゴのなる日本になるためには一混乱する政権の中で日本をどこへ導くのか
青山祐亮	日本カジノ構想
麻西 俊	原発廃止による問題点
安部由佳里	日本におけるLCC市場の開拓
小玉和樹	南アフリカW杯がもたらしたもの
堀 遼平	人口減少と日本経済
★川上菜納	絶対的貧困と相対的貧困の起因とその対策 - 諸外国の現状と開発経済学を踏まえて考える
田中将司	ケンブリッジ学派 - 経済学に与えた影響
平井祥太	自治体の観光政策による大阪・神戸の経済活性化
高吹健一	アパレル業界の現状においてとるべき戦略
鈴木将平	ユニクロはなぜ売れるのか
鈴木新也	将棋の歴史
井上大地	オタク文化の可能性
徳田祐介	福沢諭吉から学ぶ、これから先の時代の生き方 - 激動の時代を生きた偉人の教訓
荒木大河	音楽メディアの移り変わり、日本の音楽ビジネスの展望
戸田匡憲	ビールメーカーにおける企業戦略について
森高大貴	日本の中老年の自殺 - 「睡眠」からのアプローチ
藤谷昌樹	資本主義終焉論を考察する

河野正道ゼミⅡ

ゼミの総括

研究演習入門、Iとヴァリアン著「入門ミクロ経済学」勁草書房をテキストとして輪読を行った。研究演習Ⅱでは卒論の準備として自由研究に入り、卒論指導を行った。今年からの新しい制度として、卒業論文が必修科目ではなくなった。松本佑貴君は環境問題を研究し、かなりレベルの高い理論的レポートも書いていたが、卒論としては提出しなかった。しかし、ゼミには出席して基礎的な経済理論の学習に励んだ。今年の研究演習Ⅱの履修者のうち、卒論を提出したのは有馬佑輔君と石丸達也君のみであった。この2名の論文は共同論文であり、いじめ問題を経済学的に考察した。インゼミ大会では、有馬君が発表する予定であったが、都合で欠席し、急遽、石丸君が発表することになった。ボクシング部で鍛えた舞台度胸で無事に代役を果たした。一寸先は闇の世の中を、動じることなく歩む訓練の一助になったのではないかと。卒論を提出した後、桜宮高校の事件など、学校での暴力問題が報道された。これをきっかけに全国各地から指導者に対する告発の声が上がっている。卒論を完成するプロセスで、このような問題に対して論理的に考え、意見をまとめる力が多少は付いたのではないかとと思う。

卒業論文一覧

- | | |
|-------|----------------|
| ★石丸達也 | いじめの経済分析 |
| ★有馬佑輔 | いじめの経済分析 |
| 宮腰恭平 | 自民党政権発足～今後の日本～ |

岡田敏裕ゼミⅡ

思わぬ効果

最後まで卒業研究を続けた学生の卒業論文のほとんどは、形式や文章の書き方などの点で少々問題が見受けられたが、内容的には優れたものだった。成績上位のものは例年以上の出来栄であった。自信を持ってもらいたい。

卒業論文を完成させる一連の作業は大変辛いものであり、そのような苦勞をしてまで卒論を完成させるメリットは何なのかと疑問に感じた学生は少なくないだろう。しかし、しっかりとした（単なるレポートではない）卒論を完成させた学生は、近い将来、その思わぬ効果を実感し、その効果に助けられることだろう。卒業研究により修得した重要なものは、専門知識や論文の書き方ではなく、多くの情報から必要なものを抽出して分析を行い、論理的に思考し、自分の考えを効果的に伝える能力である。今は実感できないかもしれないが、必死に取り組んだ学生だけが、いつかこのことを認識できるであろう。やった人にかかわらずにやらない事である。

卒論のケースと同様に、正しい方法でしっかり行えば多くのことを得られるのに、自分の限られた知識や噂から、「割に合わない」と安易に判断してしまいそうになることが今後あるだろう。このようなときは、そのことに真剣に取り組んだ経験のある、信頼できる人の意見を参考にし、その効果を信じて最後までやり遂げてみることを勧める。

卒業論文一覧

- | | |
|-------|---|
| 清水崇弘 | 投資と企業価値の相関の考察 一企業はなぜ投資するのか |
| 毛利麻夏 | 投資と企業価値 一企業はなぜ投資するのか |
| 松尾安晃 | 日米における為替レート変動の分析 - アメリカのプライマリーバランスの赤字の影響を検証する - |
| 奥田雄馬 | 企業固定投資と企業価値の関係 一企業の投資行動の背景にあるものは何か |
| 中里憲弘 | 何が国の豊かさを決めるのか 一内生的成長理論による分析 |
| 藏本 司 | 投資と企業価値 |
| ★西浦克俊 | 人的資本モデルを用いた国別所得格差の実証分析 |

栗田匡相ゼミⅡ

My Endless Love

君たちの事をどうやって形容しようかと、言葉にしようかと、この文章を書きながら、昔の、つまりは沖縄とか、白浜とか、ベトナムとか、タイとか、そして何気ない授業の一コマとか、そんなことを思い出しています。ものすごく色々君たち一人一人の事を考えていた割には（本当です）、一方であまり後先考えずに突っ走るつきあいだったかもしれません（確かに）。イライラさせられることもたくさんあったはずなのに、そういうことはなかなか頭に浮かばず、楽しい、うれしい、笑顔に満ちた日々だけが次々と目の前に、そのときの気温や匂いや君たちの声と共にキラキラと浮上してきます。とてもとても愛おしく不思議で温かい日々でした。

僕たちが見た沖縄やベトナムには、深い怒りや悲しみがあり、それでいて人間の正しい尊敬と優しさが同居していました。だから、僕たちは世界の裂け目を繕うことの出来る人になるべきなのだと思ったわけです。そう、旅に出る準備はとくにできあがっています。なぜなら理解することは、すなわち旅立つことは、思い出すことに似ているからです。

でも、とりあえず、僕より早く死なないようにしてください。そういう親不孝はやめましょう。辛くなったら戻ってくればいいのだから。

卒業論文一覧

立石和己	中国における地方労働者の就業選択—農村部の労働者余剰問題と都市部の労働者不足問題の解決法—
長麻奈美	LDC教育におけるドロップアウトの要因について—家庭環境要因と学校環境要因が与える影響—マラウイの事例より—
柳 美妃	ベトナムにおける日系企業立地決定要因—トビット・モデルを用いた実証分析—
中須賀麗菜	海外労働移動の決定要因分析—ベトナムの事例から—
上山夏季	子どもの健康状態を決定付ける要因について—ベトナムの場合—
森岡美咲	社会保障制度を充実させる要因—ベトナムの現状を探る—
佐藤文香	情報アクセス機会が所得に与える影響
榮口徹哉	ベトナム農業における中間投資財の実質的効果—同時決定方程式の利用から—
後藤達也	ベトナム農村部における幸福度と米生産に関する値との関係—北部ホワビン省・南部ベンチュ省での現地調査から—
★福田彩乃	ベトナムにおける男女間賃金格差の要因分析—サンプル・セレクション・バイアスを考慮した分位点回帰による分析—
妙見憲彦	中国政府の教育投資を促す諸要因について—1級行政区を用いたパネルデータ分析—
荻野岬平	ベトナム農村地域における農業生産について—南部ベンチュ省・北部ホワビン省の例—
若尾理沙	中国女性の賃金上昇について—ヘックマンの二段階推定法を用いた実証分析—
木島卓耶	ベトナム農村地域の農村金融について—2011年ベトナム農村の調査結果より—
金澤健太郎	ベトナムにおける男女間賃金格差の規定要因—ブラインダー・ワハカ分解分析手法による分析—
田中健太	中国の電力需給量を増加させる要因—パネルデータを用いた実証研究—
松下武史	ベトナムにおける経済成長と労働移動の関係—同時方程式モデルを用いた実証分析—
宮間和香	ベトナムにおける貧困決定要因—インフラ整備による貧困削減—
松永万里	情報への投資が貧困者の所得に与える影響—ベトナム農村部世帯の計量分析より—
宋 雨函	中国農業の生産要因分析
前川あゆみ	ベトナムの医療の現状と課題—都市部と農村の格差を軽減させるために—

桑原秀史ゼミⅡ

経済政策の奥深さを求めて

私たちのゼミは、日本経済と経済政策をテーマに、合同ゼミを始めとする諸目標をもって、活発に勉強し、友達同志の交流を図ることに努めた。情報メディア教育センターを利用しての統計や計量分析のデータ処理の実習は、今後、有用かつ実践的な技術となることでしょう。情報センターでの学習から始まり、世界とアジア経済の動向、中国経済とマーケティング、流通と産業組織の研究、公益事業の企業戦略と競争政策、今後の社会保障のあり方、企業経営のケース・スタディなどを取り上げ、充実したゼミ生活であった。

とくにブランド・マーケティングの市場調査をめぐる勉強は、関心の深い、実践的なものであった。合同ゼミナール、課題レポートの提出、工場見学など、多くの有意義な時間をもつことができた。なかでも、京都河原町での発表、洛中でのディベート、烏丸東洞院通りでの夏季合宿などは、思い出深いものでしょう。阿弥陀堂、奥の院など連なる堂塔の建築美が山あい映え、貞観のころからの日本の伝統の美しさと経済政策のあり方について、語ったことを思い浮かべるであろう。

将来、ゼミナール諸君が、大きく羽ばたくことを祈って、「高啓」の詩をおくりたい。

「春風 江上（こうじょう）の路 覚えず 君が家に到る」

卒業論文一覧

川崎友紀	日本のベンチャー企業と海外進出先としてのベトナム
川越早耶香	花王の革新
★三ツ島伸晃	関西私鉄文化と地域発展
藤井凜平	本当に中国は成長しつづけるのか
谷澤祐介	日本の音楽業界はどうなっていくのか
白澤千明	農産物ブランドの中国進出の可能性
尾嶋湧二	ワコールとトリンプの比較に見るSPAの展望
則兼有輝	日中貿易の構造と日本産業
川崎麻以	グローバル経営
山本脩介	長瀬産業180年の歩み
辻丸優矢	チェーンストアの展望
上本周平	衰退するメガネ市場で成長するJINSの経営戦略
廣本一真	退職給付会計基準の改訂が投資家の行動に与える影響
中井愛子	中国化粧品業界におけるネット通販の動向
大谷祐介	旭硝子についての研究と今後の動向
前川裕太郎	医薬品業界の現状と生き残りの戦略
宮永翔太	鴻海精密工業の台頭の分析とEMS企業の将来
村田亜利沙	人口減少社会の到来
増本 健	ビッグデータから見るこれからのIT戦略
安高浩紀	中国における宅配営業

篠原久ゼミⅡ

最終ゼミナールと最終講義

経済学部専任教員として就任してから6年目の1980年(昭和55年)に、第1期生としての「篠原ゼミ」が始まりました。その9年後に1年間スコットランドに学院留学しましたが、それ以外にはゼミの空白期間がなく、今年の3月の卒業生は第32期生ということになります。

1月10日の最終ゼミの時間に(教室を変更して)、「アダム・スミスの思想体系」と題して「定年退職最終講義」を行い、私自身の卒論(「アダム・スミスの資本蓄積論」)から始まった「スミス研究」の一応の仕上げとなるような話をいたしました。私の場合、修士論文も博士論文もテーマはいずれもアダム・スミスですが、いまだに彼の思想の核心には迫り切れておりません。今年度のゼミ生は3名が卒論にアダム・スミスを選び、それぞれ経済理論、修辭学、教育論をとりあげ、スミスから何かを学ぼうという姿勢を示してくれました。当該「最終講義」は数名のゼミ生参加という「さびしい状況」のもとで始まりましたが、講義終了時点ではほぼ全員がそろい、ゼミ生からの花束贈呈という形で最後を盛り上げてくれました。アダム・スミスは近代経済社会の重要な「徳性」としてPUNCTUALITY(時間厳守)を挙げておりますので、諸君のこれからの社会生活では、ぜひともこの「徳性」を実践していただくよう、切にお願い申し上げます。

卒業論文一覧

嶋田 葵	人生とは一大きな選択をした3人を通じて－エネルギー政策
好川将史	チャールズ・ロバート・ダーウィンの軌跡
尾崎優大	原子力発電のルーツ
藤田穂積	社会保障制度の系譜と課題 ー生活保護・年金を中心にー
芝原裕貴	私的ダウンロード違法化の経済学的効果の実証分析
中川良介	ハーバード・スペンサーの教育に対する研究
東隆太郎	日本競馬の発展と海外挑戦
濱崎貴広	食料の重要性と今後の課題
高田裕人	「平和」のために「戦う」－「アラブの春」は未完の革命－
王 瑛	アダム・スミスの修辭学
田中健士郎	日米外交の歴史と今後の展望
山田昌幸	イノベーションとは ーヨセフ・アロイス・シュンペーターの理論とスティーブ・ジョブズの考え方から考察するー
尾崎正弥	『国富論』再考
足立 将	入退院を通じて
瀧内皓文	大麻について
高橋佑輔	レオナルド・ダ・ヴィンチ ー彼はなにをしたかったのかー
藤本将太	フィンランドの教育
★村井俊之	日富論ーアダム・スミスに学ぶ日本復興論ー
杉山崇裕	異彩あふれるインド ー思想と経済の歴史ー
寺田和馬	教育のルーツから貧困問題解決へ
呉本成基	

小林伸生ゼミⅡ

遠く離れてこそそのネットワーク

チームワークが良く、まとまりのある学年だったというのが、小林ゼミ第6期生に対する率直な印象です。ディベートや研究発表が近付くと、談話室ポプラを覗けばいつも誰かゼミ生がいて、ホワイトボードを真っ黒にしながらか、ディスカッションをしていました。皆が大学で過ごしたこの4年間は、私自身も職務上多忙を極めていましたが、皆に会って話ができるポプラは、多忙な日々のストレスを癒してくれる、心のオアシスでした。

第6期生は、関西以外の出身のゼミ生の割合が高い学年でした。そのこともあり、卒業後の進路は、例年以上にばらばらです。地元へ帰る人、関西に残る人、東京に出る人、それぞれが新しい持ち場で、社会人としての第一歩を踏み出します。一抹の寂しさを禁じえませんが、2年半で培われたこのつながりは、地域的な遠さをものもしない位強固なはず。遠くへ飛び立って、新たな場所で力強く、第一歩を踏み出しましょう。強い「個」が、与えられた場所で力を発揮しながら、他の世界で頑張っている仲間と、いつまでもつながってられる。それこそがネットワークの真価です。

……しかし、時には、ネットワークのハブ拠点である、上ヶ原にも顔を出しに来てください。私はこれからも、皆の後輩たちをビシビシ鍛えながら、待っています。

卒業論文一覧

中 美咲	LCCによる地方空港活性化について
高寄舞菜	開発援助のあり方～ソーシャルビジネスの台頭～
前田淳志	産学連携は日本経済を活性化させるか
佐々木このみ	出生率の国際間差異はなぜ生じるのか
崎山良太	我が国の観光市場の現状と将来性～観光立国の実現に向けての外客誘致～
瀬見敦之	日本で成長しうる企業像とは～価値観～
山黒友紀	中古住宅流通市場の活性化に向けて
田ヶ谷ゆみか	今後の政策の在り方～過去の反省と現状を踏まえて～
★奥山佳貴	学力向上にむけた日本の戦略～負のスパイラルから貧困層を救う～
杉嶋大嗣	鳥取県と企業誘致
浅田悠佑	ファッションマーケティング
植本和平	日本の電機メーカーの今後の成長戦略
馬谷美羽	大阪都構想は経済活性化につながるか～財政面から検証～
太田幸宏	日本の新競争戦略～BOPビジネスの可能性～
東野聖也	電子マネー普及のために
津田裕月	クレジットカードの課題と可能性
坂本あゆみ	アジアの人口転換と経済発展
吉田奈央	オーストラリア経済の分析
加藤 駿	西宮市の商店と阪急西宮ガーデンズとの関係についての分析
徳永麻里	日本自動車産業の今後
梅垣翔太	兵庫県における地域活性化～地産産業の活性化～
田中梨沙	観光による地域活性化～長野県における新たな観光振興～
小林理究	格差社会
田坂あつか	電力自由化の是非～東日本大震災を経て～

大洞公平ゼミⅡ

大洞公平ゼミⅡ

卒業論文の作業を通して、一つのことを完璧な形で上げることの大変さがよくわかったのではないかと思います。また、日頃のゼミ活動を疎かにしていると、後で痛い目にあうこともよくわかったのではないのでしょうか。普段から横着せずにやるべきことをしっかりやることの大切さは、ゼミ活動だけでなく広くあてはまることだと個人的には考えています。ゼミでの経験を、今後に生かしてください。ともあれ、最後まで粘り強く卒業論文を仕上げたという点には、敬意を表したいと思います。

卒業論文一覧

- ★梅本 成 マッチング理論による結婚ミスマッチの解消策
- 藤本静恵 合理的に非効率をもたらす国民性
- 下村くるみ 環境政策における罰則と報酬
- 一條達気 auのiPhone 4Sの販売権利獲得が与える
iPhone市場の変化
- 中谷亮介 日本プロ野球 選手移籍による戦力格差の是
正
- 鈴木健太 M&A戦略の分析～敵対的買収は悪か～
- 後藤 啓 スターバックスコーヒーの経営戦略
- 村上貴則 新規参入により変化する航空業界
- 檜田 良 企業成長に有益な経営法—内部成長—
- 山崎菜生 コンビニ 24時間営業問題について

新海哲哉ゼミⅡ

総括

研究演習入門では、岡田章著の「ゲーム理論入門」を精読し、阪大に一人編入してゼミを辞め、研究演習Ⅰでは、Luis M. B., Cabral Introduction to Industrial Organizationを読み、夏季のゼミ合宿後、学内ゼミナール大会、立命館大学経済学部、大川隆夫ゼミ、紀國洋ゼミと合同研究報告会での研究グループ論文を執筆、研究演習Ⅱでは、就職活動後2名がゼミを辞め、残るは2人。卒論執筆で頑張りました。必修がはずれた最初の年度で、教員も学生も根気と忍耐がいるゼミでした。こんなゼミもあっていいと思います。2名のうち1名は神戸大学大学院博士前期課程に進学予定です。

卒業論文一覧

- ★三上康介 固定価格買取制度における均衡量の導出と固
定買取価格に関する比較静学
- 落合 剛 シネマコンプレックスの普及に伴う日本の映
画産業の変遷と分析

竹本洋ゼミ II

最後の卒業生に贈る

- ・自分の体は自分で守ろう。残念ながら社会は体をこわした者には冷酷である。
- ・損得の判断だけで人間関係を作らないようにしましょう。他人からも損得の目でしかみられない人間になりたくなければ。
- ・本を友としよう。失意の時や孤独の時にやわらかく支えてくれるのは、そして得意の時に頭を冷やしてくれるのは、独りで向き合える本である。

卒業論文一覧

康 貴碩 安部都兼 源中啓祐	日本の少子高齢化による人口減少 道州制導入が日本に与える影響 21世紀を創る次世代企業家が経済に与える影響
香山宗裕 佐川 翔 川嶋勇人 内匠佑樹	近年の大学の抱える現状と課題 インターネットビジネスとSNSの展望 宇宙開発による経済効果 日本の自動車産業は今後国際競争に勝ち抜いていくことができるか
久武 僚 吉井 遼 林 大悟	年金の現状と未来 大阪市西成区の現状と課題 セブンイレブンがコンビニ業界で業績が一番の理由
菅原隆太郎 中津琢磨 黄 賢人 松田紘士郎 ★寺内勇人	TPPによる日本経済への影響について 原子力発電にかわる代替エネルギーの可能性 スマートグリッドがもたらす経済効果とは 日本のたばこ産業の現状 なぜ戦時中、日本の貯蓄率は高かったのか

高林喜久生ゼミ II

ゼミは卒業後の方がずっと長い

高林ゼミの16期生は個性的豊かなお人好し(?)集団でした。ふだんはのんびりしていても「やるときは絶対にやる!」というゼミの伝統を引き継いでいました。「超短期集中型」の頑張りから潜在能力の高さは十分認識させてもらいました。3回生のときにインゼミやWEST(研究論文発表大会)で見せた粘りや集中力は目を見張るものでした。

卒論のテーマは以下の通りバラエティに富んでいて、毎年このことからちょっと財政学のゼミとは思えません。「地域」の課題に取り組んだ論文が多いのも最近の特徴ですね。テーマは自由でも必ずオリジナルなデータ分析を織り込むことを卒論作成の基本としました。社会に出て、「オリジナルな証拠をもとに説得する」という姿勢は持ち続けていただきたいと思います。

本当にこの2年半の間、いろんなことがありました。雨中の甲子園球場にみんなで繰り出して最悪(?)のゲームに出くわしたこと(2011年5月26日ロッテ戦)やディベートで北海道遠征したことなど、私は生涯忘れないでしょう。ゼミは卒業してからの方がずっと長いのです。5年後、10年後にさらに成長した姿でお目にかかることを楽しみにしています。

卒業論文一覧

清政よしの 亀岡夏子 中西健太	化粧品ビジネスについて 百貨店の現状とこれから 競馬に明日はあるのか～中央競馬・地方競馬の現状から見つめる～
八木隆幸 岡崎典興 林 幸奈 佐原 豪 関灘純子 ★杉内智哉	最適な広告方法とは 沿線から始まる街づくり 東日本大震災が自動車産業に及ぼした影響 スポーツによる地域活性化 たばこ税と喫煙 消費税逆進性とその緩和策～給付付き税額控除の試算～(共同論文)
★柘植俊輝	消費税逆進性とその緩和策～給付付き税額控除の試算～(共同論文)
井上聖一郎 森田有香	コンビニ産業における立地戦略 日本とアメリカの投資信託市場の比較～そこから見える今後の課題～
加古真也	消費税の逆進性とその緩和策～給付付き税額控除の試算～
堀本大輔 木曾聖子 山田大樹 米澤志織	難民の実態～諸国との違い～ アイドル産業の経済分析 九州の地方銀行と今後の課題 パーソナルトレーナーの資格制度を検討する～独自アンケートにみる分析～
海老原太郎	国内外の実情から分析する再生可能エネルギーの可能性
鮫島和子	プライダル市場の将来性に関する一考察-歴史分析・経済分析による検討-
角川知里	地方銀行のこれから-関西の地方銀行の地域貢献～
若島直人	政府、メーカー、小売りの3点から変えていく新たな自動車業界マーケティング

寺本益英ゼミⅡ

卒業生へのメッセージ

このところ報道に注目していると、安倍晋三首相が連日「安倍政権は政策の一丁目一番地を経済の再生と位置付けています」と訴えているのに気づきます。日本は今、様々な課題に直面していますが、首相は経済問題に最優先で取り組まなければいけないという認識を示しているのです。就職につながらず、かどうか不透明のため、経済学部はあまり人気がなく、資格をとれる学部が評価される傾向が続いているようですが、実は今こそ経済学部生が力を発揮し、経済再生のリード役にならなければいけません。

経済は企業・家計・政府の3主体によって動かされています。これは我々が何らかの職業につき、給料をもらい、消費生活を営んでいることと、税金を納め、公共サービスを受けていることを想定すれば明白です。しかしこの単純な図式の中に、難問が山積しており、壁にぶつかっているのです。

私は卒業生のみなさんに、この難局打開のために先頭に立つてがんばってほしいと思います。経済のどこに問題があるかを分析し、経済学の正しい知識に基づいて適切な行動をとり、豊かで幸福な経済を実現してほしいと願っています。

ご活躍をお祈りいたします。

卒業論文一覧

松本直人	食の脅威から学ぶこれからの食の安全・活性化への道
北川達也	トヨタショックにおけるトヨタ自動車の生産方式の欠点と愛知県の雇用状況・トヨタ自動車の雇用制度の見直し
西村 遼	これからのエネルギーを考える
馬場裕隆	最適な高齢者の暮らしとは
井上みなみ	日本音楽産業の現状と今後の課題
★森 一磨	インターネット時代における音楽産業の可能性
宇都野藍	少子化対策の過去・今・未来
寺田賢剛	最近のプライベートブランド
河合佑亮	大阪・堺市の歴史と経済
	クリエイティブ都市の形成に向けた神戸市の取り組みについて
橋高 真	家電系3社に未来はあるのか
山田雅弘	地域銀行の今後の可能性とは
馬淵祐也	LCCの参入による航空革命の影響
池内健人	日本の長時間労働
西尾達也	地方経済活性化の一つの手段としてのプロ野球
岡 亮二	ディズニーランドの一人勝ち戦略

田中敦ゼミⅡ

笑顔

笑顔。この言葉がもっとも当てはまるのが我がゼミではないだろうか。

2年生の時。約3倍の倍率を突破して、このゼミに入ることができた。この時はみな喜んだが、それはあまりにすぎなかった。先生は笑顔だった。

3年生の時。先生の厳しくも愛のあるご指導が始まる。発表の前日は眠れなかった。発表中も先生の顔色をうかがった。発表後は笑顔で怒られた。笑顔の分余計怖かった。ディベート大会ではまさかの敗北。あってはならぬことだった。秋のディベート大会。圧勝した。先生は笑顔だった。

4年生の時。人生の一大イベントの就職活動が始まった。面接官がやさしく見えたことは先生に感謝したい。就職活動中でもゼミの発表はあった。発表の前日に心折れ次々と辞めていく仲間たち。ゼミでサッカーができなくなり、野球もできなくなり、バレーができる人数でとまった。卓球にならなくてよかったと安堵した。それでも先生は笑顔だった。

卒業前。残ったのは7人となった。飲み会で予約が不要になった。総裁は白川さんでなく田中先生だと思ようになった。先生は常に笑顔だった。

我ら7人すばらしいゼミにめぐり合えたことに笑顔で感謝したい。

卒業論文一覧

李 海寧	財政危機後のユーロ圏におけるギリシャの行方
更谷卓彦	デフレ下における日本の金融緩和と政策の在り方
吉本朋也	同上（共同研究）
森本貴大	同上（共同研究）
★小林裕介	信用金庫の経営戦略～どのような形で地域経済に貢献していくのか～
太田晃太郎	日本農業再生への考察ーカロリーベース自給率向上に向けてー
柏井俊樹	日本の林業再生に向けての補助金政策

豊原法彦ゼミⅡ

コンピュータで遊ぶ

わがゼミでは、2.5年間にわたって、lunaを使いながら基本的なソフトに加えR、mapleなどのソフトを使って統計分析を研究しました。またインゼミ大会では準備に時間をかけ、アンケートを行いながら「地域政策、データ分析」について報告しました。さらに報告自体を1つのプロジェクトとしそれをマネージメントすることも学びました。そしてゼミの総決算である卒業論文では各自の関心に従って、宇宙産業、水ビジネス、ユニクロなど幅広いテーマでデータ分析を行いました。

社会に出るとしばしば決断を求められます。そのためには情報收拾が欠かせませんがたとえインターネットでたくさん情報を集めたとしても、そこに不確定な要素がある限り必ずリスクが伴います。予想外の事態を少しでも減らし、よい結果を導くためには事前の備えつまりシミュレーションをしっかりしておくことが重要です。そして一度意思決定すると、あとは熱意を持って一気に事を進めなければことは成就しません。もちろん、今後の情報環境が大きく変化していくことは間違いありませんが、ゼミで学ばれた情報分析能力が皆さんの今後に少しでも役に立てばと願っております。

卒業論文一覧

平原 遼	日本の外国人労働者問題について
本田康二	日本における宇宙産業の利用と経済発展
村田裕介	TPP参加における日本への影響について
木村 晋	日本の人口問題について
三宅正大	格付け業界の未来
★柴田靖之	日本は水ビジネスで成功できるか
戸松健太郎	スポーツビジネス
加藤 誠	自動車の電子化による生産方式の移行
王子康智	ユニクロ経営戦略について
嶋崎俊也	日本のマスメディアについて ～インターネットの出現～
佐野弘貴	円高から分かる日本経済の状況
西本拓弥	消費税増税問題について ～日本経済に及ぼす影響～
塩田文香	女性の社会進出について
中藤将太	フリーターの増加について
平子裕司	野球と確率
金丸 拓	我が国“ニッポン” ～中国との比較から～

利光強ゼミⅡ

「どうにか研究活動もがんばった」

09年度入学のゼミ生は、当初21名で出発したが、現在1名が海外留学中であり、1名やめたので、最終的には19名での卒業となる。この期のゼミ生のうち5名が研究演習Ⅰの12月に学習院大学で東京の4私大（上智、中央、法政、学習院）との合同ゼミナールにおいて研究発表を行った。それなりの発表ではあったが、東京の大学生のレベルの高さに少しばかり忸怩たる思いをしたかもしれない。そのことを糧に、今後、一社会人としてがんばってもらいたい。

卒業論文一覧

都出貴之	国際経済史
松成亮	中国市場は魅力的であるかー所得格差による消費の制約ー
岡田聡一郎	カンボジア経済の現状とこれからの展望
井上 諒	ベトナム産業の実態と今後の動向
永井 了	オフショア開発の経済効果
古枝亮輔	音楽と経済学ーヘヴィメタルの未来ー
高橋和也	税効果会計の経済分析
結城建人	中国の経済成長と日系企業
渡邊大貴	TPP参加における日本への経済効果ー農業に対する影響ー
★伊藤有佑	東南アジアにおける教育と経済成長
高山寛正	サッカーと経済効果ーJリーグと地域活性化ー
福岡洋介	東日本大震災と今後の日本経済
井土翔太	日本企業の中国進出
篠原秀典	直接投資と立地選択ーこれからのアジア経済ー
井林 章	原発と今後の経済の動き

林宜嗣ゼミⅡ

卒業おめでとう。そして、ありがとう。

25期生のゼミ活動は共同研究で始まり、初めての個人研究である卒業論文作成にたどりついた。卒業論文の採点を終え、どれもが力作であったことはとても嬉しく、これまでの努力が実を結んだことを心から喜びたい。

ほんとうにあつという間の2年半だったような気がする。2年数ヶ月前にまだ幼さを残してゼミに入ってきた25期生が、ゼミでの報告、討論会などを経て大きく成長した。もちろん、就職活動も含めて本当に忙しく、大変な2年半であったことと思う。そしてこの期間がゼミ生にとって山あり谷ありであったことは容易に想像がつく。とくに、ゼミが選択制になった初めての学年であり、しんどいゼミから抜け出したという気持ちが湧いたかもしれない。しかし、大変だからこそゼミ生活は楽しく有意義だったのだろうし、共同研究やイベントを通じて培われた友情は、きっと卒業後も消えることはないと思う。

研究以外にもさまざまな思い出がある。ゼミ旅行、夏の北海道合宿、京都での合宿、学祭での模擬店出店、コンパ等々、さまざまなイベントを楽しませてくれた。精神的に最も成長するこの時期に時間を共有できたのは幸せなことであり、ゼミ生に感謝しなくてはならない。

卒業論文一覧

山田隆允	統計学的観点による2013年度プロ野球セ・リーグのペナントレース予想
住川仁美	少子化の要因分析—効果的な少子化対策とは—
矢島里奈	関西人と関東人のテレビ嗜好の違い
水野雅登	ゲーム機市場の勝因分析
★山城もこ	ファストファッションブランドの消費者動向—関西学院大学経済学部編—
松浦圭佑	総合商社の今後の在り方
橋本奈苗	航空業界の現状と展望—収入の変動要因分析を用いて—
内山 芽	女性の就業継続に向けた研究
西森新司	スウェーデン・日本の年金政策分析
御子柴嵩	教育的観点から見たOECD加盟国の国際競争力の要因分析
伊永恭子	宝塚花火大会の経済波及効果
後藤太智	高校野球において先制点は重要か?—先制点から見る勝てる試合展開—
広瀬一優	建物火災の要因分析
楠田真梨	幼保一体化について
常光康彦	人口と経済成長
古賀隼人	医療費の地域格差の要因分析—格差を是正するには—
中山麻衣子	フリーターの実態と増加の要因分析
山上麻衣	離婚の決定要因について
石森一基	幸福度から考える世代別考察—住みよい都道府県は何処か—
櫃本紗代	Jリーグ観客動員数の決定要因分析

野村宗訓ゼミⅡ

世界を広げる

2回生秋学期からプレゼンとディベートを中心に、ゼミ旅行や飲み会、OP生や卒業生との交流など、忙しい2年半でした。ゼミ募集で約束した通り、ほとんどのメンバーがどこかで何らかの役割を果たしてきたはず。面倒なロジ周りの仕事をした人は、会場設営や予約手続き、見積もり作成などでそれなりに苦労したかもしれませんが。

週1回のゼミでは得られる知識も限られるため、就活に向けたインターンや外国旅行も強く勧めてきたつもりです。日程や金銭面での事情もあるなかで、思い切って行動に踏み切った人もいれば、思うように経験を積むことができなかった人もいでしょう。授業とバイト、クラブ・サークルだけの生活でも、それなりに充実していたと思います。

いつも「就職するとまとまった時間はとりにくくなるから、海外へ行くなら今しかないよ」という助言をしてきました。資源争奪や国境線をめぐる紛争が増えているからこそ、地球人として生きていく必要性も高まっているのではないのでしょうか。就職先が関西でよかったとか、地元に戻るので安心という発想も否定しませんが、今後も自ら世界を広げる気持ちは持ち続けてほしいと願っています。

卒業論文一覧

東 大雅	トップ営業マンになるための営業過程の研究
中嶋 慶	電気自動車は本当に普及するのか
檀野早希	消費税による幸福度 —デンマークから学ぶこと—
中川詩麻	原子力とエネルギーの未来 —ドイツの実例から考察する—
松本光加	円高の善と悪
奥田真弓	不動産業界の現状と課題 —これからどうなる不動産業—
寺山阿須沙	非正規雇用の現実と今後の雇用改革 —職業能力開発社会実現に向けて—
★山口 誠	地方都市活性化と鉄道政策 —コンパクトシティを核とした政策—
牧田彩美	安心できる安全な食生活のために —互いの信頼関係が築く安全な食卓—
若佐谷薫	資源小国、日本におけるベストミックスとは —欧州との比較から考察する—
中野亜梨花	雇用ミスマッチ —就職活動のあり方—
野崎紗都子	女性の選択 —一脱少子高齢社会—
三宅直人	車載用リチウムイオン電池市場において日本が勝つにはどのような方策があるのか
福良崇祐	日本の電力自由化の今後
森田亮祐	日本における地熱発電の優位性
柴尾衣美	再生可能エネルギー —安心・安全な未来への希望—
布施絵莉子	地域とエネルギー
森本有莉佳	日本は韓国から学ぶべきか —家電メーカーにみる企業の実態—
大西祐里	世界で進む電力自由化と日本における自由化の展望
森 越朗	広告媒体の変化
新井国人	通信販売の可能性 —カタログからインターネットへ—
木佐直幹	東日本震災後の日本とスマートグリッド
谷口将大	北陸新幹線 —地域活性化とその先へ—
田口紗也	生活保護における関
矢野真衣	日本女性が変わる経済 —男女平等雇用実現への模索—

春井久志ゼミⅡ

ゼミ総括

2009年9月から2010年9月までの1年間、イギリスのロンドンにある大学へ客員研究員として派遣され、中央銀行に関する研究を行った。2008年の「リーマンショック」によりアメリカのサブプライムローン問題が世界的な金融・経済危機に発展し、それがやっと収束しつつあった2009年秋に、ギリシャ危機の勃発とギリシャ国債価格の暴落(利回りの高騰)が発生し、さらに2010年春にはユーロ圏の南欧諸国(PIGS) ソブリン・デット危機を引き起こしてしまった。現代の世界各国がいかに密接に政治・経済関係を構築しているのか、グローバル化がいかに進展してきたのかを実感させられた。

今春卒業する春井ゼミ生は総勢19名と平均的なゼミの規模であるが、「ユーロ危機」の問題を中心にゼミを展開してきたが、これは現代のわれわれがおかれている世界の政治・経済環境についての関心とそれを深く洞察する分析力を身につけることを意図して。卒業するゼミ生1人ひとりが高い学識を身につけて、社会に飛び立っていくことを心から祈念するものである。

卒業論文一覧

太口裕介	ブレトンウッズ体制崩壊後の為替レート制度の変遷と国際通貨危機問題のこれから
圓谷健二	日本における現在と今後の貿易について
西村 悟	日本のTPP参加の是非——欧州経済危機から学び、次に活かすために——
北條心也	東アジア通貨統合への課題と日本の展望
堤 健太	Jリーグの成功について
★白井元貴	格付けとデフォルトの関連性について
大矢匡志	TPPとアメリカの知的財産権保護
的場 順	ギリシャ危機から派生したユーロ危機からの脱却
山本翔平	ユーロ危機からまなぶ、日本への教訓
陳 多	ロシア経済発展およびEUの発展との関連
横山真人	地方銀行と地域発展

原田哲史ゼミⅡ

ゼミ1期生へ

22年間教えた他大学からこちらに来て、初めてのゼミ生が君たちであった。立派な偏差値の関学生なら自主的に勉強してくれるだろうと思ったのだが……。そういうわけにもいかないことが分かり、途中でしっかり締めていったら、逆に脱落者が増えていったのには正直まいった。私にとって君たちの指導は転職にともなう適応のプロセスでもあり、おかげでここでの指導方法がそれなりにつかめたので感謝している。他方、本気になればできる君たちの能力を十分に引き出せなかったかもしれず、その点では申し訳なく思っている。

とはいえ、何度かのコンパや、徳島でのゼミ合宿、ユーハイム本店への訪問、映画(?)鑑賞などそれなりに面白いことをともに体験することができたり、また卒論では各自の関心に応じたテーマでのプレゼンで楽しませてもらった。最後まで残ったゼミ生はプレゼン・討論の能力でも人間的にも成長しているので、それを基礎に今からゼミを始めたような気持ちに駆られるが、そうもいかないのが残念である。

すでに言ってきたことだが、一流になるために一生懸命努力すること、ひとつの目標を定めたら全体を自分で思い描いて最後まで成し遂げること、運命が厳しくても自分のできることを追求して活路を開いていくこと、これらを忘れずに今後とも頑張してほしい!

卒業論文一覧

村岡弘太郎	ドイツと日本の食文化
藤田 祈	情報技術革新が経済社会に与える影響
竹内慎哉	トヨタとベンツの比較
和泉宏次郎	イタリアと日本の食文化
★山田浩毅	欧州の交通事情から学べることはないだろうか
嶋田陽一	「下流」化論の諸相とその連関
岸本 淳	日本の農業とTPP
堀 和真	外国人から見た日本社会
松岡太一	ドイツと日本のエネルギー供給問題の比較と環境問題
末永健悟	フランチャイズ・システムの現状と問題点

平山健二郎ゼミⅡ

平山ゼミ 14 期生総括

平山ゼミ 14 期生も本の書評を 6 本書いたり、毎日 1 人ずつ日経新聞の記事コメントをしたり、株式ポートフォリオを組んだり、企業訪問したり、日経 TEST を受験したり、2 年半でディベートを全部で 8 試合したり、インゼミ大会で研究発表したり、海岸で BBQ したり、ゼミ合宿したり、と数多くの活動に参加してくれました。早稲田・同志社との対戦のために東京遠征した際には、東京証券取引所や日本銀行の見学もしました。それが今後、役立つのかどうかよく分かりませんが、平山ゼミとして一致団結してあったことは良い思い出になる筈です。

進路も企業・公務員・専門職と多様ですが、卒業後も交流を暖めて頂ければと願う次第です。

ゼミのときに何度も「情けは人のためならず」と申し上げました。(自分のことは棚に上げて) 人のために働ける人、人を喜ばせる人になってください。諸君の社会でのご活躍を心より祈念いたしております。

卒業論文一覧

古根川桂	東京ディズニーリゾートの成功：経営戦略から分かること
田中祐衣	行動経済学は政策に役立つのか？
奥谷寛晃	コーヒーとフェアトレード
吉川祐介	音楽産業の現状と今後について
中村丘史	メガバンク化の選択における妥当性
高橋悠介	生涯賃金～大卒は経済的に得か～
鈴木唯弘	メガバンク化の選択における妥当性
村木俊哉	欧州財政危機からの欧州経済の復興
★小林耕平	日本の株式市場における小型株投資とバリューストックの有効性
貫見優太	日本証券市場の活性化は、日本経済回復の手段に成り得るか
安武祐輝	グローバル経済における日本企業の M & A 成功要因
西村美緒	国際財務報告基準～利益をとらえるアプローチに注目～
藤本三智姫	日本が少子化社会を脱出する道はあるのか
林田泰佑	コーヒーとフェアトレード
高柳実奈	行動経済学は政策に役立つのか？
岩崎翔吾	欧州危機を通して考える日本への影響
西脇健人	ソーシャルゲーム市場
萩尾幸治	東日本大震災と日本経済への影響
吉村 潤	ユーロ危機と日本の共通点：日本が財政危機を迎えないために
藤本昌宏	買収防衛策の導入は必要であるのか

東田啓作ゼミⅡ

今年の 4 回生は・・・

4 回生のゼミ生のみなさん、ご卒業おめでとうございます。2 回生の秋から 2 年半、僕のががまま(?)にお付き合いいただき、どうもありがとうございました。

今年は、学部の規定よりもずっと長い卒業論文を、それぞれが頑張って仕上げました。データを集めたり、自分でアンケートをとったりして、統計分析(多変量解析、重回帰分析)を行った人も多かったです。学部の卒業論文の水準としては、とても良いものがたくさん出来上がったと思います。

この学年は、良い意味で大人だと思います。他のメンバーより勉強や卒論が進んだ人は、いやがらずに遅れている人の卒論を手伝ってあげてくれました。下級生の面倒も見てくれました。とても感謝しています。

それから、不思議なことに、それぞれが好きなことを自由にやっているにもかかわらず、2 回生のころより仲がよく楽しそうでした。今年度はゼミが 2 限だったのですが、あるときゼミが終了してから 30 分以上たったころに忘れ物を取りに教室に戻ったことがありました。そしたら、みんなで輪になって座って楽しそうにおしゃべりしていました。とても微笑ましかったです。

できれば、今後ともよろしく願っています。

卒業論文一覧

大谷亮太	マイナンバーのすすめ
北野勝也	日中間における廃プラスチック貿易の経済分析
田邊有惟	水ビジネスを制するために日本が行うべき戦略
山口耕平	都市鉱山の有効活用 ー携帯電話のリサイクル率を上げようー
横内誠史	ハイブリッドカーの普及 ー消費者意思決定理論ー
大井千聖	人はなぜ行動を我慢できないのか? ー衝動買いのメカニズムと自己制御資源ー
清家康平	生物多様性の経済価値評価 ー夙川・六甲山の経済価値評価ー
信保武志	日本を救おう ー海洋資源メタンハイドレートの開発ー
陸野友太	中学年代におけるサッカー選手の特徴分析
坂口良介	卒業論文の選択科目化を踏まえた今後の学校教育の在り方
★澁谷百合子	ドイツに学ぶ太陽光発電の普及政策
野田ちとせ	食糧問題と貧困
木口屋竹志	災害廃棄物の最適な処理方法
岩崎由華	日本における電力自由化について
倉田駿平	インド農村部の経済発展
長谷川貴一	日本に求められる賃金体系
三澤優香	太陽光発電を普及させるためには
泉本泰宏	文楽 ー歴史的経緯からの助成金問題考察ー

藤井和夫ゼミⅡ

「前進あるのみ」

ゼミに入った当初から、この2年半で皆さんは大きく変わるはずで、と言いつけてきました。

これまで結構長くゼミを担当してきた感想なのですが、多くの学生が、「大学生になる」ことなしに、つまり、自分が何者であるか、あるいは何者でありたいかを考えることなく、何を学ぶべきなのかわからないまま入学してきます。それゆえ、2年生の後半からのゼミでは、知識を学び身につけるといよりは、社会の中の自分の位置づけを手探りしながら、もっばら何かを学ぶ基礎と気構えを作り上げることに費やされます。皆さんの2年半はそういう時期だったと思います。

ゼミの中で、皆さんは一步前進します。2年半経って気づけば大きく変わっています。その間、ゼミで何かを教え込もうとしても無駄です。実は、何かを身につけていくのはこれからです。本当はここから大学生活を始めてほしいのですが、無理には引き留めません。

ただ、前進あるのみ。これからの皆さんを楽しみにしています。

卒業論文一覧

諏訪弘樹	一般消費者にとって電子書籍は必要であるか
佐々木啓太	消費者から支持されるファッション企業とは
平野 萌	いかにして、日本の富裕層を投資に向かわせるか
小柳和也	日本カジノ合法化への道
竹内利彰	日本における米消費拡大への道
中野 翔	国内スマートフォン産業の今後
上田慎也	国内市場における日本のたばこ産業の未来
★南出仁嗣	中小企業の可能性
喜多 舞	水ビジネスー日本企業の競争力向上に向けてー
野口奈津美	女性の社会進出の推進ーワークライフバランスの実現ー
小山雄介	スマートシティ実現による日本再生
高田和徳	緑茶の昔、今、これからー緑茶は世界ブランドになれるのかー
眞鍋拓馬	領土問題を抱える日本の国防費は現在の額で十分であるか
藤林拓也	粉飾決算防止における監査役役割
木下郁美	我が国における電子決済の可能性
山本 潤	商社ビジネスを追って
嵯峨拓真	グローバル資本主義の問題とその影響ー新しいグローバル経済の模索ー
高岡ゆい	清涼飲料から見るロングセラー商品の戦略
谷川原彩	消費行動からみるコーヒービジネスのゆくえ

藤井英次ゼミⅡ

“No pain, no gain”

大学における学びの集大成として、ゼミ生が知的にも精神的にも独り立ちすることを求められた1年であった。就職活動と重なる時期もあって、受講者にとってはしんどい1年間であったと思うが、苦しみもがいた分だけ実りも多く、卒業研究をやり遂げた者は実際にやり遂げる事でしか得ることの出来ない自信と誇りをもって、充実感に満ちた表情で卒業を迎えた。こつこつと積み上げてきた経済学の基礎の上に立って、自らの関心と視点から現実の国際経済・社会の課題を取り上げた意欲的な卒業論文が並んだ。「自らの付加価値は何か」と繰り返し問われた卒業研究は、本ゼミの学びのモットーである“no pain, no gain”そのものであり、それを実践する過程で得たものは一生の財産になるだろう。

最終授業における議論では受講者がほぼ反射的に「経済学的に考える」姿勢を身に付けている事が窺え、初めて研究室に訪ねてきた頃の様子を思い起こしてはその成長ぶりに目を見張った。安易な妥協を重ねて楽な方向に流されることなく、最後まで「成長したい」という志を貫いた記念すべき第1期生の面々を指導教員として敬意を持って送り出したい。実社会での活躍を祈念しつつ。

卒業論文一覧

近藤洋行	為替レートの変動が日本の貿易に及ぼす影響についての分析ー二国間レートと実効為替レートの比較を用いた検証ー
★影山りえ	海外直接投資が受入国の雇用に与える影響ー産業別比較分析ー
安藤早紀	為替変動が企業業績に及ぼす影響：金融業と製造業の比較研究
香西直美	円高による日本の輸出企業への影響と対策
猪元恭宏	災害が為替レートに及ぼす影響
横山 峻	世界各国の犯罪発生率とその経済的要因

前田高志ゼミⅡ

誇りと希望

世に出る皆さんを、誇りと希望をもって見送ります。プロジェクト研究への渾身の取り組みと報告会での地方議員や自治体職員、NPO関係者、他大学の先方等を前にしての立派な報告、研究報告書の発刊、名市大・関大・同志社との合同報告会、ゼミ合宿、新月祭出店、懇親会、クリスマス会、お誕生日会、女子会、大阪女学院の高校生のための模擬ゼミ…学びも遊びもすべてに最高のゼミでした。これからいよいよ人生の本番、いろいろと辛いことも多いでしょうが、皆さんなら大丈夫です。誇りをもち胸をはって陽の当たる道を歩いて行って下さい。

最後に、私の好きな映画「ニューシネマパラダイス」の中で、故郷から旅立つ青年サルバトーレ（トト）に、彼を幼い頃から父親代わりとして愛しんできた老映写技師のアルフレードが告げた別れの言葉を送ります。

戻るなよ
私たちが想い出すな
手紙も書くな
郷愁にくじけずに すべて忘れる
我慢できずに戻ってきてても うちには入れない
いいな
何をやるにせよ それを愛せ
子供の頃 パラダイスの映写室を愛したようにだ

卒業論文一覧

- ★湯浅美穂 日新信用金庫の成長戦略—京都中央信用金庫との比較による考察—
- 三好亮太 過疎地域の活性化が与える日本への影響
- 鎌田早紀 商店街の活性化～高齢者の住みやすいまちづくりのために～
- 西岡正之 経済思想から経済政策を考える
- 鷹尾実和 太陽光発電の今後を考える
- 遠藤洋紀 スポーツによるまちづくり～スポーツが地域に与えた影響とは～
- 芥川 睦 サード・セクターとしてのNPOのあり方
- 小森 彩 農産物の地域ブランド化～京野菜を事例として～
- 市川真実 信用組合の現状と在り方～豊橋商工信用組合が生き残っていくためには～
- 島本綾香 北欧型福祉国家から日本が学ぶべきもの—経済状況・税制の比較—
- 長田彰紘 消費税増税による社会への影響
- 清水菜都美 住みやすいまちづくりとは—東大阪市を事例に—
- 櫻間康介 地域活性化における地方銀行の役割と今後
- 上岡 誠 商業を中心とした地域の活性化（大阪市）
- 重久優也 日本の音楽産業の現状と今後の展望～デジタル社会でどのように発展していくべきか～
- 中永椋友 日本郵政の今後
- 小銭美穂 生活保護の現状と未来～最後のセーフティネットのあり方～
- 秋月大和 ブームとその経済効果～マラソンブームを例に挙げて～
- 美田嘉行 大阪市経済の活性化—大阪市の観光産業からの分析—
- 伊藤健一 消費税の逆進性
- 土村亮太 徳島経済と徳島銀行の役割
- 奥野彰仁 スマートグリッドによる日本の経済効果
- 甲山敬悟 日本特殊陶業の現状とこれから
- 岩本悠里 ネットワークビジネス（MLM：マルチ・レベル・マーケティング）について
- 田部 翠 学童保育と指定管理者制度の関係
- 河野桃子 非正規から正規への転換
- 堀越早由希 日本の消費税のあり方
- 畑中智絵 フランス・リール第1大学留学中

藤原憲二ゼミⅡ

ゼミの総括

第1期生である。留学先のカナダで事務室からメールで送られてきた志望理由書を読み、どんな学生なのか分からないまま18人で出発した。欠席が多く単位を落とした人、クラブに専念するために辞めた人がいて16人になった。授業中は勉強だけに集中しそれが終わると各自のやりたいことに専念するという目標は達成されたと思う。授業中に学んだグラフや数式は忘れてもよいが、ゼミで養ったこの姿勢は社会人になっても維持してほしい。

卒業生へ2つ願いがある。まず時間を守ること。就職活動が終わって気が抜けたのか、4年生になって授業開始直前にメールで欠席や遅刻を知らせたり無断欠席する人が多かった。携帯やメールが使えるからといって時間をおろそかにしないこと。そして適度に休むこと。これまで仕事を頑張る余力体調を崩すことが度々あった。若いから大丈夫だと思っていたが、最近は仕事もスローペースにしている。このゼミの目標通り、集中するときには仕事に専念しそれが一段落つけばゆっくり休むようにしてほしい。

卒業論文一覧

- 原田拓哉 日本の貿易相手国としての中国とアメリカの違い
- 茨木啓次 円高不況下で日本政府が今後とるべき政策
- 田中健太郎 日本のTPP参加意義と日本経済に今後期待される役割
- 棕尾俊亮 米国発の世界金融と欧州危機の行方—ギリシヤ危機に端を発して—
- ★岡島良典 イギリス経済と日本経済
- 桐山伸人 日中間貿易の将来
- 山中浩行 開発援助と日本のODA
- 谷野稜太 国際経済史
- 池宮輝一 日中貿易の経済分析
- 青沼佑樹 国際経済危機の日本への影響
- 北原礼都 BOPビジネスについて
- 甲斐浩介 東南アジアの経済発展について
- 深井友貴 国際貿易の問題点とその解決策—貿易で途上国が豊かになるには—
- 服部祐樹 ギリシヤ危機から見る欧州金融危機
- 久米洋希 中国市場の拡大が日本に与える影響

村田治ゼミⅡ

2013年3月卒業

今年卒業するゼミ生は、いつもながら個性的なゼミ生の集まりでした。そのためか、研究報告では質の高い論文に仕上げてくれました。このことは、WESTでの発表やと東京でのISFJでの報告などに反映されています。卒業してからも、ゼミの友人を大切に、お互いに切磋琢磨していくことを願います。また、社会に出たら、上司や同僚など人間関係に煩わされることもあると思いますが、小さなことを気にせず、自分の信じた道を進んで行ってください。決して諦めないで、自分の可能性に挑戦して行ってください。皆さんの活躍を期待しています。

卒業論文一覧

藤井達貴	発送電分離による電力自由化が日本経済に与える影響
小林 匠	ミャンマーの持続的な発展に必要なものとは
永野真弓	TPPが農業にもたらす影響
瀧浦 凜	私的コピーがもたらす経済的影響
太田 亮	輸出企業と投資行動
峯 吉希	中小企業活性化のための金融システムの構築
末富詩織	増税による財政再建
安藤亮輔	公的年金制度の改革
★平岩宏章	Jリーグの地域に対する経済波及効果
古田彩花	日本の家計貯蓄率低下の要因分析
徳植貴大	日本の消費税と海外の税の比較
中野友理	未婚率の上昇
山元七菜子	日本経済と広告
西山理絵	国民医療費抑制政策
宮内英恵	現代の就職内定率と若年層の雇用問題
稲垣祐司	ビール酒税改革の考察
梅田祐里	日本の経済格差と教育格差
眞砂大介	教育格差と所得格差
筒井裕梨奈	少子化と女性の社会進出
野入遥香	女性の社会進出
中村 翔	国民皆保険に代わる医療制度への移行
岡田涼佑	開発途上国における非正規労働廃止が与える影響
五宝亮太	日本のエネルギー政策の今後に関する考察

松本有一ゼミⅡ

また会う日まで

今期のゼミは、研究演習が選択科目になって最初のゼミです。そのため途中で抜けた人がいますが、下記の卒業論文提出者が最後まで残った人たちです。卒論を提出しなかったけれど一年半以上同じゼミで学んだ人たちの氏名を記録として残しておきます。春日井翔太、中戸進哉、土居通也、米田俊一、荒武信吾、長見祐樹、皆見圭亮の7名です。

ゼミ活動としては特段のことは出来ませんでした。みなさんはゼミ外で楽しい活動をしていたようです。卒業しても、これから更に厳しい現実があります。健康には気をつけて、社会の荒波と戦ってください。Bon voyage.

卒業論文一覧

町谷和基	次世代を牽引する自動車
岩本浩希	日本における環境税の現状
上元雄太	排ガス規制と自動車産業
藤川洋基	循環資源・廃棄物の越境移動—アジアを中心とした国際資源循環体制
石田陽平	環境税の導入と競争力への影響
栗巢脩平	新エネルギーの現状と今後の展望
笠松友樹	西宮市でのエコシティ提案
山下拓洋	スマートシティ構想
山崎敦史	次世代エコカー 燃料電池自動車の可能性
稲葉 秀	日本の環境税の望ましいあり方
中村尚寛	スマートグリッドと再生可能エネルギー
島田恭兵	経済活動と環境保全の両立は可能か？
平 拓也	容器包装リサイクル法の定めるリサイクルとその実態
佐々木健斗	風力の未来—風力発電の現状と動向
山森隆広	地球温暖化に伴う気候変動とその経済的リスク
笹井貴文	資源と教育を考える一次世代の「持続可能な社会」
上田浩捷	排出量取引
★遠藤 興	スマートシティにおける環境ビジネスの今後
宮滝悠佑	ハイブリッドカーの未来—トヨタ・ホンダの戦略を比較して

本年度は不開講の研究演習Ⅱに所属していた
卒業論文提出者は次のとおり。

井上勝雄ゼミⅡ

中村彩乃 子どもの収入・学歴に影響する教育格差

山鹿久木ゼミⅡ

「今年度のゼミの総括」

今年のゼミは、山鹿ゼミには珍しく、女性が多かった！
だから、男性陣も緊張したのかな？少しおとなしいゼミで
した。

みんな大丈夫かな、と2年の時は思っていたが、や
はりみなさん成長するものですね。これからは楽しみな人
になってきました。

これから、どんどんいろんなことに挑戦していきたく
さい。

卒業論文一覧

- | | |
|--------|---|
| 森田 鼓弓 | 日韓両国における音楽産業の比較と分析 |
| 渡邊 満春 | 差の差の手法を用いたイベントと政策のインバクトの計測 |
| 内海 明子 | アイドルがおよぼす経済効果 |
| 小西 麻莉子 | 東京ディズニーリゾートの事業戦略 |
| 森田 あすか | CDは生き残るのか |
| 松江 大樹 | 職場のメンタルヘルス |
| 磯 祐一郎 | 観光地としての長崎県 |
| 美根 弓香 | ワークライフバランスの現状と課題 |
| 高谷 愛子 | 楽天イーグルスができたことによる宮城県仙台市への影響 |
| 大島 絵美 | 日本でのLCCの普及と浸透 |
| 木内 俊彰 | 今後の戸建て住宅と集合住宅の展開 |
| 堀川 渉 | TPPはどうあるべきか |
| 南部 修志 | アマチュア野球界を盛り上げる |
| 福岡 歩 | 日本の今後の交通整備の展望 |
| 笠原 卓也 | 原子力の是非をエネルギーの観点から考える |
| 川上 絵梨 | 商工組合中央金庫の企業価値 |
| ★井戸本 響 | ランドマークが地域に与える便益—あべのキューズタウン開業を事例として— |
| 吉山 洋輝 | 日本の卓球と中国の卓球の違い—どうすれば日本は中国に追いつくことができるのか— |

懸賞論文の選考について

本年度から、懸賞論文は個人執筆論文部門と共同執筆論文部門に分けて審査し、それぞれの最優秀論文に賞状と副賞を授与することになった。個人執筆論文部門に5本、共同執筆論文部門に14本、計19本の応募があった。選考委員会の審査と教授会の議とを経て以下の論文に賞を与えることになった。

経済学部懸賞論文受賞者と論文名

<個人執筆論文部門>

福田彩乃（栗田匡相ゼミ）

ベトナムにおける男女間賃金格差の要因分析

—サンプル・セレクション・バイアスを考慮した分位点回帰による分析—

<共同執筆論文部門>

井戸友貴・内田亜輝・大谷貴志・富野光章・西村早織（栗田匡相ゼミ）

カンボジア農村は稲作において最も効率的な生産を行っているのか

—確率的フロンティアを用いた技術非効率性の分析—

<講評>

個人執筆論文部門の福田論文は、ベトナムのドイモイ改革に伴う労働市場への影響を、男女別の賃金変数を求めたうえで、男女間の賃金格差の要因と結果について分析し考察を深めたものである。男女間に賃金の格差は依然として認められるものの、2004年から2008年のあいだの賃金上昇率に着目すると、女性の賃金上昇率が男性のそれを上回り、賃金格差は縮小する傾向にある。その作用因として女性の就学に対する評価の高さがみとめられるとしている。問題意識の明瞭さ、分析に用いた統計的分析手法の理解の高さとその応用における周到さ、導きだされた結論の妥当性において、学部学生の水準を超えるものと高く評価された。

共同執筆論文は、現地調査によってえたデータをも使用しながら、カンボジア経済において圧倒的比重を占める農業の生産性の上昇を阻害している要因を分析し、その結果をふまえて政策提案をおこなった論文である。耕作に導入された農業機械が生産以外の用途に使用されていることや農地の散在のために機械の効率的利用が阻害されていることが、機械の導入にもかかわらずそれがかならずしも生産の向上に寄与していないこと明らかにし、加えて教育の遅れによる技術の非効率性が農業所得に負の影響を与えていることを指摘している。この分析をふまえて、農業の専門的知識のレクチャーの機会を設けること、次世代の子どもたちに対する教育水準の底上げをはかることの2点の政策提案をおこなっている。執筆者たちの分析手法もそれを使った検証結果の経済学的解釈も、また政策提案も妥当であり、グループ研究のメリットをよくあらわした好論文と評価された。

（懸賞論文選考委員会委員長 竹本 洋）



① 昨年のエコノフォーラムは、ダイレクトに東日本大震災を取り上げておられました。今年、東日本大震災とその後の問題について、少し異なった視点から捉えてみようと考えました。それでいて、あれもこれもといった感じにならずにギュッと焦点を絞ればよいなあと考え、……それでも少し焦点がぼやけた感じはありますが、何とかモラルという視点からまとめることができたかなと感じています。

最初からかなりテーマを絞ってお願いしたにもかかわらず、快くご執筆いただいた先生方には、心より感謝申し上げます。特に何人かの先生方には、わざわざ書き直しをお願いしてしまいました。本当にありがとうございました。(東田)

② 関学に着任して10年未満ですが、これまで編集委員を何故か4、5回も担当させてもらいました。しかし、本年度は編集委員とは名ばかりで、原稿を書くこともなく、ほとんど全ての仕事を東田先生や他の方々にお任せしてしまいました。申し訳ありませんし

Publisher

利光 強 (経済学部長)

Chief Editor

東田啓作

Editors

岡田敏裕
田 禾
本郷 亮

Managing Editor/Staff

植田幸利 (経済学部事務長)
白坂 建
山本由香

発行/関西学院大学経済学部
〒662-8501
西宮市上ヶ原一番町 1-155
TEL. 0798-54-6204
©2013 All rights reserved.

た。次回もし担当させていただくことがあれば(?)、初心に帰り、真面目にモラルを持ってお手伝いさせていただきたいと思っています。(HR)

③ 今年度の編集に参加するチャンス을いただき、とても光栄です。この雑誌は学生と教員が分担して編集するものであり、その点は独自の試みで、非常に有意義だと思います。毎回の雑誌は学生の皆さんの努力によって刊行されてきましたが、今回は学生の皆さんの協力なしにはできなかったでしょう。コンピーナの東田先生をはじめとする委員会の皆さんは座談会を開き、特定テーマのエッセイをアレンジするなど、本当にありがとうございます。何もできなかった自分はとても勉強になりました！(田)

④ 関学・経済学部に着任して、まもなく1年になります。研究活動に加え、ゼミ・講義の準備など、多忙を極めた1年でしたが(人生で最も忙しかった!)、母校関学のためであれば少しも苦しくはありません。むしろ幸せです。本誌の刊行にあたり、今回はお役に立てませんでした、1年目ということでどうか大目に見て下さい。徐々に貢献できるように頑張りますので！編集委員の一人として改めて本誌を熟読しましたが、手作り感に溢れる素晴らしい情報誌であり、学部の制度的財産としての本誌の編集に携わることに、誇りと責任を感じます。(本郷)

⑤ 世間にはありとあらゆる情報が散乱していますが、その中から自分達にとって正しい意味のある情報を如何に素早く入手できるかが、社会で生活をしていく上で重要な要素であるのはいまうまでもありません。しかしながら、この情報化社会に「どっぷり」の学生達に、なかなか有用な情報が伝わらないことに苛立ちを覚えます。私自身は学生の「尋ね癖」がその一因ではないかと思っています。今後 社会に出れば、「自分で調べる癖」というのは重要なスキルの一つだと思うので、是非学生時代に習得して欲しいと思っています。(yuki)

⑥ 最近、脳に関する本を読んだ。人間起きている時は、五感すべてで情報を得ようとし、脳は常にその情報を行動に結びつけようとする。睡眠中は情報

が遮断されるため、起きている間に得た情報を取捨選択し思考を整理する。朝に仕事が始まり、前日とは違ういいアイデアが浮かびやすいのはこういう理由もあるようです。本誌編集作業でもこれは当てはまる。必死で考えて作ったページ案だからこそ、そのまま出すのではなくて一晩寝かせることが重要だった。(白坂)

⑦ 久しぶりに学生時代の友人と会うと、手にしているのは全員スマートフォン。電車などでも、多くの人がスマホの画面を見つめています。普通の携帯しか持っていない自分がすごく時代に取り残されている気がしました。いつでもどこでも様々な情報を手にできる便利な時代。私もそろそろスマホデビューしてみようかと思案中。使いこなす自信は全くないですが……。デジタルに慣れた学生さんたちにも、エコノフォーラムにはぜひじっくりと目を通してもらいたいです。(山本)